

医師人生五十年

— 大島 伸一 業績集 —

名古屋大学大学院 医学系研究科
病態外科学講座 泌尿器科学

令和3(2021)年3月

緒言

名古屋記念病院 名誉院長

藤田 民夫

大島伸一先生、業績集の上梓を心よりお祝い申し上げます。本業績集は先生のこれまでの基礎的、臨床的業績はもとより、人材育成の足跡を記録する記念誌として後進にとって貴重な資料となるものと思います。

私が社会保険中京病院に医師として入職する前年に泌尿器科に着任した先生は、中京病院では慢性腎不全医療に力を入れ透析医療は盛んに行われていましたが、慢性腎不全医療のもう一つの治療方法である腎臓移植、当時は全く一般的な治療法とはなっていないのにも関わらず、その実現を目指すという夢を語ってくれました。私が泌尿器科へ入局したのはその姿に共鳴したからでした。その実現に向けて準備活動に入った先生はアメリカで実情視察し、その際にシカゴ大学においてスターツル教授の下で肝臓移植を行っていた名古屋大学第二外科出身の岩月舜三郎先生に支援の約束を取り付けたのでした。その後の先生の動きは速やかで、わずか卒後3年目の昭和48年に第一例の生体腎移植を実現したのでした。わが国の腎臓移植の黎明期だから臨床経験の全くない若い医師によって実現が可能であったのかもしれませんが、今では考えられないことといえます。まさに開拓者、フロントランナーの姿そのものを後輩の私たちは目の当たりにできたのです。私も第8例目に血管吻合をさせていただき大いに緊張して手術に当たったことを記憶していますが、大島先生の新たなことへのチャレンジの迅速さと、その医療技術を後進である私たちに速やかにかつ積極的に伝授しようとする姿勢を見ることができます。

このように速やかに腎臓移植が実現したのは大島先生の計画を信頼し支援した当時の中京病院副院長の太田裕祥先生の存在が大きかったと思います。太田裕祥先生はまさに奈良の大仏の手のひらに例えられ、ともすれば人は徒党を組むといったように偏った選択の下にグループを作ることが多く見られますが、太田先生は多種多彩な人材を包み込むような懐の大きな先生で、その下に夢多き若き医師により活気のある診療活動が展開されていました。大島先生の部門運営での人材育成、あるいは適材適所の人材配置などで発揮されるリーダーシップはこの太田裕祥先生譲りのものかもしれません。しかし部下から見ると大島先生の魅力は決して人におもねるようなことなく自らをさらけ出しても、なお人から信頼と尊敬される人柄にあると思います。驚くのは当時の大阪大学園田孝夫教授、東京大学阿曾佳郎教授、京都大学吉田修教授などの先輩教授とも親交があり、さらには移植免疫で世界的に名を馳せた岩城裕一教授とも密な親交があるなど専門職はもとより、領域も若干異なる行政職との信頼関係の構築も厚く、先輩、後輩、職種を超えた広い交流は先生の深い人間的魅力の証左であると思います。

大島先生は泌尿器科運営においても前立腺肥大症への経尿道的手術の導入、腎結石手術において腎盂切石術の採用、泌尿器科癌の化学療法の取り組み、さらには血液透析患者における外シャント、内シャント手術を通じての腎臓内科への支援等、積極的かつ広範囲にわたり中京病院の泌尿器科の隆盛の基礎を築き、特に内シャント領域の診療では腎臓移植を目指す泌尿器科医にとっては血管手術に慣れる良い機会となりました。

当時の中京病院泌尿器科には大島先生を慕ってくる先生の後輩や、他の診療科に属していた医師が希望して泌尿器科に転籍する医師もあって、医師不足ならぬ医師過剰状態が起こっていました。そんな中最古参といっても卒後7年目の私が現藤田医科大学泌尿器科に転籍することに。転籍後間もなく脳外科神野哲夫教授の働きかけもあって死後の臓器提供への取り組みを開始し、転籍後2年目の昭和54年に第一例の死体腎摘出を実施し、その後症例を重ね当時ではわが国で最も多い症例数を経験することになりました。それまで私はデンバーでスタートルのところで行われていた脳死患者からの臓器摘出、肝臓移植手術の見学の経験はあるものの、心停止後の臓器摘出の経験はありませんでした。そこで文献を読み漁り結果的にシカゴ大学のマーケルの摘出方法を採用することを決め頭の中で理論化しシミュレーションし準備していました。実際の最初の症例では大島先生に立ち会ってもらって無事に実践できましたが、パイオニアとしての苦勞がいかに大変かを実感した初めての経験でした。

大島先生は中京病院の副院長を経て名古屋大学泌尿器科教授に転籍され、転籍後もチャレンジ精神を遺憾なく発揮され大学での幅広い臨床実績、臨床研究や基礎研究の実践に加え人材育成に努められました。その成果は今回の業績集にも反映されています。その後、国立長寿医療センターの総長として転籍されていますが、高齢者医療は内科診療科を専門とする医師が担当するのが一般的との先入観にとらわれると泌尿器科医師の着任に意外感ほぐえなかつたと思われま。しかしパイオニア精神豊かなフロントランナーである大島先生にとってそうした前例にとらわれることのない決断は蓋然性のあることであつたと思われま。まさにパイオニア精神の真髓。こうした姿勢は先生の名古屋大学での医療安全への取り組みに反映され医療界でも評価されています。一方で移植に関連する発言などでは訴訟などに巻き込まれるも決しておれることのない姿勢は言行一致の証でもあります。

先生とのこれまでの交流を通じ感じることは、絶えずしっかりと考え行動することの重要性です。そうした考えで行動することを是とする先生は、決して人を一定の枠に当てはめることなく柔軟に人をみてくれているように思います。よって人は安心して先生と向き合うことができます。こうした優れたリーダーシップの下に多領域における人材育成が可能になったと思われま。大島丸は大島船長というパイオニア精神のある優れたリーダーシップを備えた大型船としてこれまで航行を続けてきました。今後はこれからの後継者がこれまでの歴史をしっかりと踏まえパイオニア精神旺盛に将来に向けて発展的に航行を続けて行ってくれることを願うばかりです。

目次

緒言	藤田 民夫	1
医師人生五十年	大島 伸一	5
業績集発刊に寄せて		
あと追いの「腎移植人生」	星長 清隆	11
大島伸一先生の医師生活50年に寄せて	絹川 常郎	12
大島先生と私	後藤 百万	14
国立長寿医療研究センター名誉総長大島伸一先生、業績集発刊を寿ぐ	鳥羽 研二	16
大島伸一先生が目指してこられたもの	辻 哲夫	18
医療について	大島 伸一	19
業績		
中京病院		33
名古屋大学		57
国立長寿医療研究センター 総長		79
国立長寿医療研究センター 名誉総長		94
研究助成等		100
略歴		103
おわりに	荒井 秀典	109

醫師人生五十年



医師人生五十年

大島 伸一

名古屋大学を退官する時(58歳)に、業績集をどうするかといった話があったが、即座に断った。任期途中で退職ということもあり、まったくその気がなく、転職先である国立長寿医療センター(現・国立研究開発法人国立長寿医療研究センター)のことしか頭になかった。

今回、勃然と業績集を残そうという気になったのは、後藤教授の業績集への原稿を書いていた時である。何故そんな気になったのか、歴代の教授で私だけ業績集がないのも変だなと思ったのは事実だがこじつけである。いいかげんな話だがとにかくその気になってしまったというのが正直なところで、終末が見えてきたということだろう。

大学とかナショナルセンターと言えば研究施設であり、その教授とか総長となれば研究者と見られるのが当たり前である。だが、私は自分を学者とか研究者だとか思ったことがない。では何なのかと問われれば、どう考えても臨床家とか実務家とか専門家という像しか浮かんでこない。

何故、そんなことにこだわるのか、自分でもよくわからないが、以下に私の医師としての経歴と学問との関係について振り返ってみる。

中京病院時代

私は1970(昭和45)年(24歳)に名古屋大学を卒業した。学生時代は名大も他の大学に劣らず学園紛争の渦中にあった。1960年代の安保騒動以来、社会・政情は安定せず、1970年以降までその余韻は続いていた。名古屋大学の医学部では、小児科の教授選考で不正が発覚し、学内あげての大問題となり、他の教授選考も進まないままの不安定な状態が続いていた。

1970年卒業の我々は、医局制度解体などと呼び大学の医局には属さない、残らない、博士の学位は取らない等のクラス決議をして全員が地域の病院に研修先を求めて散っていった。

私は縁があって、学生時代から社会保険中京病院にお世話になっており、研修先も当然のように中京病院と決めていた。しかも、卒業の時には進路を泌尿器科として、腎移植をやろうということも決めていた。

当時、腎不全は死病であった。米国で開発された血液透析は導入されたばかりで、今のように入学的保障等はない。一方、腎移植は日本では黎明期で、米国等で研修して帰国した外科のパイオニア達が各所の大学で移植医療を始めたばかりという状況にあった。私はこうした実態を知り、これはやりがいのあることだと、迷いもなく腎移植をやろうと決めた。外科に属さず泌尿器科を選んだのは、第一に腎臓は泌尿器領域のものであること、第二に外科の教室に入った

ら5年や10年は下働きで過ごさなければならないこと、そしてこれが決定的な要因だったと思うが、当時の中京病院の副院長であった故・太田裕祥先生(皮膚・泌尿器科長、後に病院長)に相談したところ、“よし、やれ”と後押しをしてくれたことである。

しかし、卒業したばかりの私が、移植、移植と騒いでも誰も見向きもしないどころか、時には人間としても、医者としても、おかしいのではないかと言われたこともある。太田先生には、米国のクリーブランドクリニックへの留学、動物実験室の整備等々、最大限の支援をしていただいたが、私一人だけでは何もできない。人を集め技術を身につけるにはどうするか。私より年長の人に移植をやろうと協力を求めることができない以上、新しく卒業してくる研修医を獲得するしかなく、どう頑張っても実際に腎移植を開始するには最短でも3~4年はかかると考えた。

問題は第一に、どうやって人を集めるか、しかも、実績も何もない青二才が新卒の学生を、私と一緒に腎移植をやろうという気にさせるにはどうすればよいか、第二に、人を増やしたとしても、外科手術のいろはも分からないような集団に誰が移植医療の技術を指導してくれるのか、第三に、医師を雇い入れる大前提は、医師の給料の何倍もの収益を上げることであり、そのためには病院での診療収入をどう増やすかである。

私は、これらに対する答えは、①何よりも指導者を見つけ、②泌尿器科の症例数、手術件数を増やし収益を上げ、③行った医療を学問にすることと考えたのである。

結論だけ述べると、デンバーのコロラド大学のスターツル教授のもとで修練した、故・岩月舜三郎先生(元ピッツバーグ大学外科教授)を指導者として迎え、腎移植を開始するとともに、その後の十年で泌尿器科の専用病床数を5~6床から50床に、プラス移植用病床10床の60床に、手術件数を年間数十件から700件以上に増やし売り上げを診療科としては一位にした。医師数も研修医を含め6~8名を擁するまでになったが、ここまでくると病院では学会活動のための出張(外国出張も含め)も抵抗なく許可してくれるようになる。学会発表や論文発表はゼロからのスタートであったが、国際、国内を問わず関係学会にはできるだけ演題を出し、論文数は英文を含め毎年10編以上になった。

このように中京病院時代の26年間に、一般病院の一診療科では稀有と言われる400編を超える論文を書いてきたのは、唯自分のやりたい医療をやるために必要であったからである。強いて言えば、新しい医療に挑戦する限りやったことを公表し評価を受けることは義務である(岩月先生の指導による)と考えたこと、更には私と関わった者の医師としての将来の可能性についてはできるだけ広いものにしておきたいということもあった。

臨床研究の科学的な理論と実践については、福島雅典 一般財団法人LHS研究所代表理事(前医療イノベーション推進センターセンター長・京都大学名誉教授)から学んだ。当時は異端視されていた福島氏の理論は今では臨床医学研究の標準とされている。

中京病院時代に、私の部下3名を米国へ長期の留学に送り出した。これは一般病院に勤めている者の将来への可能性が限定されないことがないように考えたことによるが、一般病院でも外国

への長期留学はやればできるということを示したいということもあった。これが実現できたのは、岩城裕一現南カリフォルニア大学教授(兼 メディシノバ代表取締役社長兼CEO)のおかげである。岩城氏は米国に在住し、我々だけでなく日本の移植医療への支援を四十年以上も続けている。

名古屋大学時代

社会保険中京病院に勤めて26年、副院長職にあった1996年に、名古屋大学の第5代の泌尿器科教授に選ばれ、1997年1月1日(51歳)に大学へ赴任した。大学とは教育機関であり研究機関である。更に、医学部の臨床系では診療を通しての教育が欠かせず、診療そのものの質や在り方が問われることになる。

赴任後、教室のテーマをどうするか熟慮した。①これまで私がやってきた移植医療と内視鏡医療等、外科手術を中心とした両分野をテーマにすることには迷いがなかった。②三つ目のテーマとしては、排尿障害を選んだ。来るべき高齢社会に於いてもっとも需要が大きくなる疾患の一つというのが、その理由である。

泌尿器科学とは外科学を中心としながらも、内科的対応も必須な臨床医学で、求められる医療技術は多彩である。私は限られた人的物的資源を考え、研究テーマを絞り、当面は基礎研究にまで範囲を拡げることはしないと決めた。目指すところは、第一に標準的泌尿器科学の教育の確立、第二に卓越した臨床技術の獲得と継承、第三に世界に通用する臨床研究の展開とし、何よりも医学生が泌尿器科を専攻したいと思いたくなるような教室づくりである。

そのために最初に医局員にお願いしたのは、次の二つだけである。一つは毎朝7時半の症例カンファレンス、もう一つはアルバイトは国の規定通り週に1日にするということである。しかし、医局員には余程厳しい要求であったらしい。実際に計画が進み始めたのは、助教授として小野佳成(故人・愛知淑徳大学教授)を、翌年に講師として後藤百万(前教授・現地域医療機能推進機構中京病院院長)を迎えてからである。

教室の年次変化を見るために、論文数の推移を見ると、平成9年26、平成11年43、平成13年62、平成15年65と増えている。無論、論文数だけで教室の活性を示すことはできないが、例えば当時最先端の治療であった腹腔鏡下手術も100例を超えるまでになり、日本でもっとも多い症例数を行うまでになった。

名古屋大学医学部の再編改革が進むなかで、私は2000年に副病院長に、2002年には病院長に選任されたが、背景には医局の解体だけでなく大学の設置主体が国立から独立行政法人へと大学組織の抜本的な改変計画があった。独立行政法人の精神は、自己決定、自己責任であり、財政的には予算制ではなく独立採算を原則とする。病院は大学のなかでも、その事業規模は最大であり、財政問題を含めその経営の在り方が大学全体に及ぼす影響が大きかった。

病院長としての1年4か月は大学病院の経営に集中しており、医局の運営は助教授以下に依存

することが多かったが、教室では目標を着実に進めてゆくことができた。この間、第15回日本Endourology・ESWL学会総会と第2回日韓移植フォーラムを2001年に、第36回日本臨床腎移植学会を2003年に開催した。

国立長寿医療(研究)センター時代

2003年の十月頃だったかと思うが、2004年の三月(58歳)に六番目のナショナルセンターとして発足する国立長寿医療センターの初代総長の指名を受けた。高齢社会の進展により、排尿障害等、高齢者の疾患が増えていることは分かっていたが、高齢者の医療に泌尿器科医である自分が取り組むなどということは考えたこともなかった。大学の改革も道半ばであり、相応の抵抗も試みてはみたが無理と判断した。長寿医療センターに求められるのは進行しつつある高齢社会で国が進めようとしている医療政策にナショナルセンターとして、どう貢献できるかである。

私の立場は国立長寿医療センターの設置目的を実現することであり、自らは研究や学問を行うことではなく、国が求める研究を進め、その成果を国に提言できるよう、センターを管理経営する立場である。

従って、この時期には原著論文と言えるようなものはなく、総説とも論説とも分類に困るような論文もどきばかりである。学会等での招請講演は増えたが、求められる課題は高齢社会の現状、将来課題といった、学術講演と言ってよいものかどうか迷うような内容のものが多い。

ナショナルセンター(国立高度専門医療研究センター)は大学等の研究機関とは異なり、その最大の使命は医療政策への提言であり、センターにおける研究も目的志向型の研究を求めた。

赴任して5年間はセンターの体制の整備に費やされた。本格的に研究活動が動き始めたのは、2009年4月に研究所長として鈴木隆雄 現 桜美林大学教授を、2010年3月に病院長として鳥羽研二 現 東京都健康長寿医療センター理事長(2014年4月～2019年3月当センター理事長)を迎えてからであり、認知症やフレイル等高齢者に特有な疾患等に取り組む研究体制が整った。

赴任した翌々年(2006年3月頃)に、高齢化により医療提供体制が激変し病院中心の医療が地域全体で診てゆく医療へと変わることに、その受け皿となるのが在宅医療になるという、辻哲夫厚生労働審議官(当時)(後に厚生労働事務次官、東京大学教授を経て、現東京大学客員研究員)の話に感銘を受け、これを政策として実現するために、長寿医療センターとして何ができるかを考え続けてきた。

2013年、社会保障制度改革国民会議でこれからの医療のあり方について述べる機会を得て、2014年に医療介護総合確保推進法に結実したが、10年の年月が経っていた。

長寿医療研究センターを退いた三年後の2017年に第30回日本老年学会総会を主催した。医学だけでなく、看護、歯科、精神科、社会科学、基礎老化、ケアマネジメントの老年学に関与する学会の集合体で二年毎に行われているものである。

最後に私どもが移植医療に取り組んだ当初からの仲間のうち亡くなった二人について記す。

小野佳成、名古屋大学助教授から愛知淑徳大学教授（昭和48年卒・享年68歳）は研修医時代から、松浦治、小牧市民病院副院長（昭和51年卒・享年67歳）は学生時代から私のチームに参加し、文字通りのセブン・イレブン、土日無しの業務を支えてくれた。

二人とも現代の医療では根治不可能な疾病により平均寿命を超えることなく亡くなった。私は毎日10種類以上の薬をのみながら75歳を超えてまだ馬齢を重ねている。

本業績集の目的の第一が、大学の泌尿器科学教室に記録を残すことにあるため、中京病院、名古屋大学に勤務した時代の先輩や同僚、指導した仲間たちについては、あえて名前を挙げることをしない。その点については、同門会会員名簿を参照していただき、ここでは私と共に働き、私を支えてくれた同僚たちに感謝の思いを述べるにとどめることでお許しいただきたい。

これまで一緒に働き、私を支えてくれた皆さん！ありがとうございます。そして諸先輩の皆様、本当にありがとうございました。

ため^しを解り^{おも}ためを考ひて^{はぐ}ために生きたために生かされ老みて逸れず



業績集発刊に寄せて



あと追いの「腎移植人生」

学校法人藤田学園 理事長

星長 清隆

偉大な泌尿器科医ならびに移植医であられ、また旧帝大の病院長やナショナルセンター長などが国の最高医療機関のトップを務められた、大島伸一先生の業績集への寄稿をさせて頂くことは、私に取りましてはこの上もなく光栄と存じます。

大島先生の5年後輩の泌尿器科医ならびに移植医である私が医学部(慶應義塾大学)を卒業したのは昭和50年です。大島先生は腎移植に曳かれて泌尿器科医になられたと伺っておりますが、実は私も同じです。6年生として初めての大学病院の臨床実習の場において、米国留学から戻られたばかりの長谷川昭先生(現:東邦大学名誉教授)から、当時も世界最先端であった米国での移植事情をお聞きし、大きな感銘を受けました。当時も単細胞人間(大島先生からしばしば揶揄されています)であった私は、自分の人生を臓器移植に掛けてみようと思決意し、卒業と同時に唯一腎移植が行われていた泌尿器科に入局しました。

卒後3年間は大学病院と2つの出張病院で泌尿器科医ならびに一般外科医としての研修を受け、卒後4年目に頻りに腎移植が行われていた、念願の都立清瀬小児病院に配属されました。ここでは長谷川昭先生より、腎移植の手技から術後管理、ご家族への対応など、腎移植の必須項目全てを教わりました。対象が乳幼児から高校生までの腎不全患者であった事は、普通ではなかなか経験できない事でもあり非常に勉強になりました。卒後7年目に長谷川先生のご紹介で、米国のヴァージニア医科大学に留学し、移植免疫を中心に臓器移植の神髄に触れられたことは移植医としては掛け替えのない経験でした。3年後に帰国し、4年間は都立清瀬小児病院で研鑽を積み、平成2年6月に藤田医科大学(当時は藤田学園保健衛生大学)に移りました。

移籍後最初に挨拶に伺ったのは、中京病院の副院長をされていた大島先生でした。全面的に応援すると勇気づけられ、抱いていた不安も払拭され、この地で骨を埋める覚悟が出来ました。当時は心停止ドナーからの提供腎の摘出が私の重要な役割でしたが、移植腎の県内配分は全て大島先生が公平に行われており、私も安心してお任せしておりました。その後、腎の配分制度も大きく変わりましたが、藤田ならびに関連施設で摘出させていただいた献腎の総数は500腎を超え、半数以上は私自身が摘出させて頂いております。また、これら心停止腎を用いた腎移植成績は、同時期に行われた欧米の脳死腎移植成績と10年を超える期間でも全く遜色が無いことも証明され、移植医としての大きな誇りです。これも大島先生の暖かいお力添えが無ければ有り得ない結果であり、今更ながら心より感謝申し上げる次第です。古希を迎えながら、大島先生には何ひとつ追いつけませんでした。先生と出会えたことは幸運でした。大島先生、本当に有難う御座いました。

大島伸一先生の医師生活50年に寄せて

独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院 名誉院長

絹川 常郎

大島先生が2020年で医師生活50周年を迎えられ、いよいよ業績集を作成されこととなった。私が医師になってから今日に至るまで、最もお世話になった先生である。本稿では、私がこれまで先生にどのように育てられたかを振り返ることで、私の感謝の意を伝えたい。

先生は、医師としてのスタートを切られた社会保険中京病院で、当時まだ先進的な医療であった腎移植を、腎不全の患者を救うという強い意志を持って開始された。何と卒後3年目であった。故太田裕祥先生の理解と、故岩月舜三郎先生の指導があったとは言え、今から考えてもとんでもない冒険である。その2年後に名古屋大学を卒業した私は、先生のことなど全く知らず、卒後の研修先として中京病院を選んだ。当時の病院は、熱傷治療や切断肢再接着のことで地元のマスコミを度々賑わせていた。そこに他施設より自由で活発な雰囲気を感じたことが、まだ専攻領域模索中であつた私の病院選定の理由であつた。

外科系診療科を中心に研修する中で、同じ医局におられた故小野佳成先生に泌尿器科は腎移植も出来るし、面白いぞと誘われた。このようなきっかけで、隙間の時間に、研修は予定外の泌尿器科にも出入りするようになった。すぐに色々な手術の経験もさせてもらえ、腎移植の手術にも麻酔医として加わるうちに、将来の専攻科が見えて来た。そこで漸く大島先生に泌尿器科医になりたいと申し出ることとなった。ここに至ったのは、私が中京病院で興味を持った他部門を率いている先生より、大島先生が最も頼り甲斐があると感じ、先生に人生をかけようと思ったからでもあつた。

その時代の泌尿器科は、今から顧みると超ブラックな環境下にあつたが、皆、明るく先を目指して働いていた。手術の最中に術者同士が突然手を止めて、最良の手術方法を巡って議論を始めることもしばしばであつた。このような雰囲気の中で、私も多くの臨床経験を積むことができた。その上、移植では早々に組織適合性検査を任せられ、泌尿器科医になって5年目には、私のもう一人の恩師でもある故Paul Terasaki先生が率いるUCLAの研究室に2年以上も留学させて頂いた。帰国後は、しばらくしてナンバー2として泌尿器科の診療を任せられ、やがて中京病院から直接、市立岡崎病院に部長として赴任し、自身の責任でその地方で初の死体腎摘出、腎移植同時手術を行う事も出来た。これらは大島先生を頼ったことで得られた充実した経験である。

先生の業績集は大きく3つの時期に分けられるが、その第1期は中京病院時代であり、私の名前が入った共著論文も多い。この時代の私は、年齢的にも大きな開きのない他の泌尿器科医たちと仲間意識を持って、腎移植の普及や腹腔鏡手術の導入という急な坂を一緒に登る事ができた。

先生は腹腔鏡下手術の研究では、第2期の名古屋大学時代にこれを全国展開させ、ロボット手術の普及にも繋げられた。腎移植については、この時期に先生は日本移植学会と日本臓器移植ネットワークの理事も兼ねられ、組織改革を中心に積極的に活動された。しかし、未だに献腎移植の数は国際的に大きな遅れを取っている。これを先進国並みにすることは、私たち後輩に残された課題である。あと数年で腎移植50周年を迎える中京病院を礎に、私としては、死後の臓器提供を今より円滑に行える社会環境の実現を目標に掲げて活動するのが最後の仕事と覚悟している。

ただし、ここへ来て、もう一つ、大きな課題が降ってきた。今、日本では、高齢者に対する医療の最適化が最重要課題となっている。中京病院の泌尿器科も名古屋市の高齢化率一位である南区で、この問題の解決に直面している。最近は移植者もこの問題を抱えている。第3期では、突然、長寿医療センターに移り先頭に立って日本の高齢者医療の問題にも取り組まれている先生に、この方面でもさらなるご指導を期待する次第です。



大島先生と私

独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院 院長

後藤 百万

大島伸一先生の業績集編纂にあたり、編集委員の大任を仰せつかりましたことは誠に光栄に存じます。先生の輝かしいご業績は本誌に集録されるのですが、ここでは私個人にとっての大島先生について感謝と尊敬を込めて述べさせていただきます。

私が名大泌尿器科に入局した1980年には、先生は既に中京病院で本邦腎移植のパイオニア、また泌尿器科手術の名手としてご活躍され、お名前はもちろん存じ上げていましたが、当時名大と中京病院とは交流がなく実際にお会いする機会はありませんでした。初めて先生とお会いしたのは、私が碧南市民病院在職中の1990年頃、中京病院の勉強会に出るようと呼ばれた時で、その出会いが私の以後の運命を決めることとなりました。

一つ目は大島先生が中京病院から名大泌尿器科に教授として異動された後、碧南市民病院長の吉井才司先生を突然訪問され、部長の私を大学に戻すよう頼まれました。同院に骨を埋める覚悟であった私は躊躇しましたが、教授自身が関連病院を訪問するなどあり得ない話で、吉井院長の強いお薦めもあり、1998年大学に戻りました。2つ目は先生の国立長寿医療研究センター総長転任後の後任教授選考の時です。当時の医局の状況下、教授に立候補するのは自身の義務と理解していましたが、心情的には大学を出たいという気持ちが強く、大島先生に相談したところ迷うなら立候補しなさいと背中を押して頂き、2006年幸か不幸か教授に就任致しました。3つ目はJCHO中京病院の院長就任の話を頂いた時、定年退官の1年前であること、退任後は緩い仕事に就きたいと思っていたことから、またまた躊躇しましたが、この時も大島先生からぜひ受けなさいと強く背中を押されました。このように、私が適材適所の職場を得て、社会のために仕事をさせて頂けるのは本当に幸せなことで、すべて大島先生のお蔭といっても過言ではありません。

私が大島先生について語るなど恐れ多いことではありますが、先生は常に大局から物事を見て、方向性を正しく判断され、組織や制度を果敢に改革されます。おそらく実務は不得意かと思うのですが、必ず大島先生の元には実務を行う人材が集まります。折に触れて大島先生に諸事ご相談に伺って帰ってくると、すごく元気になるのですが、ふと気が付くと具体的な指示は何だったかなという感じです。大島先生の傍で仕事をさせて頂いたのは名大時代ですが、その間、先生は2000年から附属病院の副院長、2002年からは病院長として病院改革に尽力されました。国立大学の独立行政法人化の時期でしたが、先生の手腕により院内の改革が急速に進み、硬直していた組織が見事に変わっていくのを目の当たりしたことを鮮明に覚えており、大島先生の突破力、改革力、人心掌握力、指導力に驚嘆しました。正直、私が今までお会いした中で最もすごい人です。

本邦高齢者医療の今後の方向性と政策を決められた先生ですので、ご自身も健康長寿を地で
いって頂くよう健康に留意して、益々社会に貢献頂くとともに、私共の光明となって頂けました
らと存じます。



国立長寿医療研究センター名誉総長 大島伸一先生、業績集発刊を寿ぐ

東京都健康長寿医療センター 理事長
元 国立長寿医療研究センター 総長

鳥羽 研二

勇者の軌跡

国立長寿医療研究センター名誉総長大島先生が業績集を出されるという。

長寿医療と社会実装としての国の政策に多大な功績を挙げてこられた、人生の7号目としての記念碑であろうと拝察いたします。しかし、科学業績で語れないところにこそ、大島先生の真骨頂があると思っています。

野武士

大島先生を一言で言い表せばそうなりましょう。社会保険中京病院での激しい臨床生活の中で、腎移植関連の業績を積み重ね、母校の泌尿器科教授から経営に大きな課題があった名大病院長として、一部では「壊しや」と言われるほど徹底的な意識改革を行ってこられました。その手法は、「理想像は示すが、あとは意識の高い若手の参集を図ってうねりとする」という野武士スタイルだ。名大病院長の仕事が一区切りついて、本人弁では「門外漢」の老年医学の領域のナショナルセンターのトップになり、任期10年の間に、昔が想像できないほどの改革を遂げられた。藪を開き、抵抗勢力をバツバツとなぎ倒してきた。

誠実

私が足掛け3年の就任要請後呼ばれたのは独法化直前の2010年であるが、最後の決め手の言葉は「鳥羽さん、うちのセンターにはいいところは一つもないが、改革すべき重篤な欠点が6つもある。でもきて欲しい」。これを聞いたらやめるのが普通ですが、私も「自反而縮雖千萬人吾往矣」を校是とする諏訪清陵高校出身の暴れ者、後に引けなくなりました。就任後毎朝8時半から、総長(早朝)ミーティングがあり、業務課題の打ち合わせはそこそこ、長寿センターのあり方、改革について口角泡を飛ばし論議し、早ければ来週から改革を実行するよう、事務に迷惑をかけっぱなしでした。赴任する時、井藤英喜、東京都健康長寿理事長(当時)から、「鳥羽くんが好きなようにやればいいんだよ」と言われたことを真に受け暴走してきました。辞任するときに、大島総長から尻拭いが大変だったと聞き、その誠実さに打たれました。

信 念

なんと言っても、長寿時代の最大の功績は、在宅医療の国のシステムづくりに奔走し、「長寿の国をみる」に簡潔にまとめられています。今後の医療ニーズを的確に読み解いて、新しい在宅医療連携体勢を厚労省を牽引して実現したことです。「引かない、ブレない、畏れない」これが大島総長の生き様として、大変勉強させていただきました。



大島伸一先生が目指してこられたもの

東京大学高齢社会総合研究機構 客員研究員

辻 哲夫

私はかつて厚生労働省在職中の2005年頃に、日本の医療政策のあり方を論ずるため国の政策医療を担う6つの国立高度専門医療研究センターの総長のお話を個別に伺う機会を得た。その一環で国立長寿医療センター総長(当時)であった大島先生と初めてお会いし、意見交換をするうちに二人は意気投合し、以来今日まで公私にわたり親しく交流をさせて頂いている。

医師としての先生のご経歴を顧みると、死病といわれた腎不全の患者さんを治療現場で目の当たりにし、人として生き永らえてほしいという願い一心から、医学部卒業時に腎移植に取り組むという志を立てられたのが原点で、地域の病院に身を置いて並はずれた活躍をされた後、名古屋大学の教授に就任され、次々と大きな成果を挙げられた。

このように傑出した力量を示された先生は、推されて国立長寿医療センター総長に就任され、数々の業績を残された。医師でない私には先生の研究者としての業績について語る資格はないが、特筆すべきは、政策医療推進の立場から敢然と行動を起こされ、曲がり角にある現在の日本の医療の方向性について大きく舵を切る役割を果たされたことである。

先生は2007年に日本医師会を始めとする幅広い関係団体からなる在宅医療推進会議を招集され、各作業部会を設け在宅医療の推進方策を取りまとめる等様々な活動を開始された。その上で、国の社会保障制度改革国民会議に参加し、これまでの「治す医療」から人のQOLの確保を目指す「治し支える医療」へという医療改革のあり方を示す報告書作りに尽力された。

この報告書は、効率的で質の高い医療提供体制と地域包括ケアシステムを総合的に推進するという現在進行中の制度改革の根拠となっており、また、在宅医療推進会議は、国が招集する全国在宅医療会議に発展し、先生はその座長となられ今日に至っている。併せて、先生は介護専門職団体を指導され、介護の専門性を更に向上させるために尽くされている。

このように先生のこれまでの業績を振り返ると、泌尿器科での臨床と研究と教育において徹底した研鑽を積み重ねつつ医師として自らを常に問い直し、世に発信し続ける中で、その視野と活躍の舞台は大きく広がり、「社会を診る」という仕事を見事に展開してこられた。

先生自身、自らを「学者とか研究者だとか思ったことがない」と語っておられる。大島先生は、人の役に立ちたいという初心が揺らぐことなく、移り行く社会を鋭敏に捉え、身をもって本来の「医学」の意義を明らかにされてきた真の医師であると思うのである。

医療について



医療について

1. はじめに・医療は変わる	20
2. 医療について	21
(1) 医療とは	
(2) 研究とは	
(3) 臨床研究の使命と条件	
(4) 大学と研究	
(5) 医療と科学	
(6) 理・農・工学等との学際化	
(7) 医局講座制	
(8) 学術を巡る世界の動向	
3. 医療と倫理	27
(1) 生殖補助医療と病腎移植	
(2) 社会的背景	
(3) 現状の限界	
(4) 今後の課題	
4. おわりに・医療とは何か	29

医療について

大島 伸一

1. はじめに・医療は変わる

時代によって医療は変わる。第一に、科学技術の進歩は、医療を劇的に変える。コレラやペスト、結核等の感染症が制圧されたのは、20世紀である。麻酔技術や栄養補液管理技術の進歩は、手術における術式を発展させ、手術後の管理を安全なものにし、手術成績を飛躍的に向上させた。昨今では、ロボットを使用した内視鏡手術が主流になりつつあり、術創も手術侵襲も格段と小さなものになっている。また、臨床検査領域や放射線領域技術の進歩、とりわけCTやMRI等の発明がどれほど診断能力を高めたかなど枚挙に暇がない。

第二に、技術の進歩は、国民の意識や医療理念の考え方に影響を与え、医療そのもののあり方を変える。紀元前から2000年以上続いてきたパートナーリズムという意思決定のあり方が、インフォームドコンセントを基本にしたパートナーシップ医療へと変わったのは20世紀の後半である。何よりもヒポクラテスの誓いにあるDo No Harmという理念すら、輸血から臓器移植へと健康人に傷害を与えることを許容するまでになった。

第三に、人口動態の変化は医療のあり方に大きな影響を与える。現在、世界一の超高齢社会を形成した日本が直面している問題は、これまでの医療問題とは質が異なる。すなわち高齢化によって人口構造が変わり、人口構造の変化が疾病構造を変えるという変化で、従来の医療のあり方の進歩・発展の延長上の問題として捉えることができない。医療需要が量的にだけでなく質的にも大きく変わるため、医療そのもののあり方に加え、医療提供の仕組みにも影響を与えるからである。

第四に、医療制度や医療システムは、社会的な枠組みを設定して、医療の提供のあり方を規定し、医療を変える要因となる。1961年に定められた国民皆保険制度は医療提供のあり方を一変させたが、保険制度は保険料を原資として成立しており、予算の計画立案やその調整には常に利害関係がつきまとう。

現在急速に進行している高齢・少子・人口減少という人口構造の変化は、医療・介護を一体的・総合的に診てゆくという社会保障システムの改革を伴うものであり、これまでの年金を含めた医療・介護・社会保障体制の制度的な枠組みを抜本的に見直さなければならない。

超高齢社会とは、寿命が延びた社会ではなく、平均寿命が延びた社会である。平均寿命が延びるということは、高齢者の大群が発生し、その大群が高齢層の方へ移動するということであり、今の日本ではこの現象が出生数の減少と重なって人口の軸の重心が高齢の方へと急速に動いている。2030年には逆ピラミッド型へと人口構造が変化してゆくが、人口構造が大きく変わると、そ

れまでの制度や仕組みでは、医療だけでなく社会が機能しなくなる。

2. 医療について

(1) 医療とは

医療とは、①医術で病気をなおすこと、②医学的知識とともに福祉分野とも関係しつつ病気の治療・予防あるいは健康増進をめざす社会的活動の総体(広辞苑)で、人の病苦を軽減する社会的な営みであり、安全の確保は医療の根幹である。

この医療を具体的に実現するのが医療人であり、その代表的な職業が医師である。医師とは実務者である。従って、医師の存在が意味をもつ根拠は、患者すなわち疾患をもった人間が存在するという一点にある。

研究とは「よく調べて真理を究めること」(広辞苑)である。究めた真理をどのように使うのか、他の真理との組み合わせによって別の新しい知識や技術を創り出すのも研究である。

医学とは「人体の研究、及び疾患の治療や予防に関することを研究する学問」(広辞苑)、「病気を予防または治す技術であり病気とそれとの全ての関係において治す科学」(ステッドマン医学辞典)である。

医学は科学に包含されるものだが、純粋な自然科学ではなく、自然科学の手法だけで医学の問題を解決するには限界がある。医学とか医療とかの言葉は人や病気と不可分のものであり、人や患者の存在の見えない医学・医療の研究はあり得ない。

臨床医学とは「病人を実地に診察・治療する医学」(広辞苑)であり、医療の研究と臨床医学研究とは同じ意味である。

科学の目的は新しい知を創造することにある。創造された知の価値は常に中立であるという意見があるが、医療という場で知の意味や価値を問わず、知の追求そのものが目的であるという考え方には同意できない。

私が卒業した1970年の頃は学園紛争が激しいところで、インターン闘争とか、授業料問題とか民主化運動とかいろいろあったが、あの時の学生達の間には、①大学とは一体何なのか、そして、②研究とは一体何のためにあるのかに、集約される。

2004年に国立大学が法人化され、大きな変革が行われたが、法人化が現実的な話になると同時に、大学は社会・国民・学生のためにあるということや、研究とは研究のため、科学のため、ましてや研究者のためにあるのではなく、人類、社会、自然、地球のためにあるのだということが改めて確認された。

1997年に26年間勤めた社会保険中京病院から大学に転任したが、私には、大学は臨床や教育より研究に重点が置かれており、臨床系の研究に対する価値も、インパクトファクターによる評価が第一であるように見えた。私のようにすべてが臨床論文であると、泌尿器科領域の代表的な

雑誌である Journal of Urology のインパクトファクターは3点(2019年は5.92点)しかなく、点数は稼げない。問題は、医学部の臨床系にまで、あれほどインパクトファクターで評価するような空気ができあがってしまったのかである。

(2) 研究とは

研究には、好奇心駆動型の研究と目標達成型の研究がある。

好奇心駆動型の研究とは、研究の動機が人の知りたいという本能に基づくものであり、唯、未知のを知りたいということにある。新しい知の開発が人類や地球の存続に大きな脅威になることもあると気づいたのは、核の開発とそれが実際に使用されてからである。これ以降、発見された知は中立であって、それが悪用されるかどうかは科学者の責任ではないという考え方に疑問が投げかけられた。今では核の問題だけでなく、科学技術の利用が環境に及ぼす影響との関係等でその功罪が広く問われるようになってきている。

目標達成型の研究とは、現場のニーズが明らかであり、そのニーズに応えるための研究である。すでに開発された知識・技術を学際的に協同させて、ニーズに応えるという具体的な応用研究の場合もあれば、問題は明らかであっても、その現象が何故生じているのか、その原因にまで遡らなければ問題の解明、解決はできないという基礎的な研究から始めなければならない場合もある。

何れにしても目標達成型の研究では、研究の動機も目指す目標も明らかであり、研究者の向かうべき方向ははっきりしている。医学・医療研究が、どちらの研究に属するかは言うまでもない。

誤解のないように言っておきたいが、私は基礎的な研究に取り組むことの重要性について否定したことはない。私が納得できないのは、インパクトファクターにしか眼に入らないような研究態度や価値観であり、そのために基礎研究に偏り過ぎることから生ずる弊害についてである。

(3) 臨床研究の使命と条件

臨床の使命とは、①標準化された医療技術の実践、②開発された医療技術の標準化、③新しい医療技術の開発である。

医療における科学とは、臨床決断の最大の根拠ではあるが、常に不完全であり、治療の不確実性を完全に払しょくできるものではなく、臨床研究の使命は、この医療の不確実性をいかに小さくできるかということにある。

臨床研究は、③の新しい医療技術を開発し、そして②の開発された技術を標準的な医療にしてゆく過程に関わることであり、その成果は臨床の場で有益かどうかではかられるもので、最終的には人に技術を介入させて検証する過程が避けられない。このような臨床研究を行う研究者の資格については、研究室での実験研究とは全く異なる厳しい条件や資格が求められるべきである。

第一に、卓越した臨床能力である。新しい技術の開発が高度で先駆的で専門的なものであるほど、その必要性は現場の医療のなかでしか理解できない。特に、すでにある技術の先に今までの

技術を超える新しい技術があるとすれば、すでにある技術の長所、短所、限界について、十分に熟知していることが大前提である。

第二に、研究を行ううえで求められる倫理性である。倫理の一つは学問を行ってゆくうえで求められる倫理であり、行ったことを結果の善し悪しに拘わらず正直に、専門家集団の学会や雑誌に報告をし批判を仰ぐことである。もう一つは、人に介入する研究であることから求められる倫理である。ヘルシンキ宣言は、医療の進歩のために人体実験は必要と認めつつも集団の利益よりも実験に参加する個人の安全と利益が優先することをはっきりと述べている。

第三には、臨床研究の科学的な方法論を十分に理解し、それに基づいて行うことである。第四には、より良い医療を提供したいという使命感、医療現場での問題を解決したいという意欲である。そして、何よりも愚直といってもよい正直さは欠かせない条件である。

これらの条件の、いずれが欠けても臨床研究を行う資格が問われなければならない。

臨床研究とは、病苦に対する挑戦であり、人に介入するという究極の技術の最先端の場で、明確な動機と目標をもって、人体を対象として行う研究である。従ってその成果は、現場でどれほど役に立つのかで計られるものでなければならない。このことは、どれほど強調してもしすぎることはない。

(4) 大学と研究

医学部の特に臨床系が学者の養成を志向するような状況が長く続くと、診療が軽視されるようになる。診療の軽視が続くと、他の医療スタッフ、コメディカルの人達が医師を軽侮するようになる。

今のように専門分化している状況では、より完成された医療の提供にチーム医療は前提条件になるが、医師が軽侮されるようになると質の高いチーム医療はできない。チーム医療の質が低ければ、診療機能は荒廃する。そうなると、医療の不信感に繋がり、医学教育にも影響が出てくる。

科学技術の進歩に併行して医療の分化は進み、分化が進めば進むほど、より高い専門性が求められるようになる。内科一般が病態別に分かれ、更には臓器別に分化し、今では疾患別にまで細分化してきている。専門分化の結果が学生の教育にどのような影響を与えるのか、総合的に人を見る能力を養う場が大学から消滅してゆく危険性を考えないわけにはゆかない。

基本的な診療能力を得るという目的で必修化された新しい研修医制度の施行に際して目的に沿った教育プログラムや研修の環境を準備することをせず、卒後研修病院の選択対象から学生によって外されるという大学病院が多数出て、大学病院の医師不足、病院からの医師の引き上げにつながったという教訓を忘れてはならない。

このようなことの責任がすべて大学にあるとは言わないが、大学の研究に対する価値のあり方が、診療や教育に影響し、医療への不信や医師数の偏重という歪みなどを助長してきた原因の一つであったことを認めないわけにはゆかない。

2004年に国立大学は国立大学法人になった。これまでの価値観が外圧によって崩されるという大きな変化のなかで、社会の価値観と大学の価値観との整合性をどのようにとってゆくの、大学の在り方を根本的に見直す良い機会と考えるべきであろう。

(5) 医療と科学

なぜ、大学では、このように研究偏重、インパクトファクター重視といった状況が生まれてしまったのか。

理由のひとつに、科学至上主義、科学信仰とも言われるような状況が、世界を覆いつくしたということがある。科学的であるということは、正しさや知的水準の高さを証明する代名詞のように使われるようになった。その理由は、第一に科学は①普遍性②論理性③客観性を生命としており、結果をすべて数値と形態で表すので、人が納得するのに極めて判りやすい体系であるということ。そして、第二に科学は大きな富を生むことである。富は権力と結びつき、権力に保護されることになる。

科学は17世紀の科学革命を経て大きく変わった。地球を中心に考えられていた宇宙観がコペルニクスによって覆され、ブルーノによって無限宇宙の概念が掲げられ、そしてデカルトによる二元論が、精神を物体から分離すること等によって、それまでの宇宙観や自然観が根本から覆された。

デカルトの二元論は、研究対象を客体化することにより、研究者の恣意性を排除するという、実験科学の方法論を確立した。その成果は全体を部分に分解し、更に細分化し、今では分子生物学的手法を生み、分子から遺伝子レベルにまで要素を分解するまでになっている。要素還元による実験手法とその成果がどれ程の貢献を医学の分野に果たしたかは言うまでもないが、この手法の限界は、全体を各要素の集合体として捉え、生命体そのものを全体として見ることができないため、人間の全体を各部分との関係性について説明することができないところにある。

客観性を重視するほど、研究者に対する評価は論文が中心となり、専門家以外には評価は難しく、社会の求める価値や医師像から乖離してくる。従って、臨床に有用かどうかという評価についてはインパクトファクターだけではない。臨床医学の研究者は何よりも自らを臨床専門医であると認識しない限り、役に立つ研究を志向する状況は生まれにくい。

(6) 理・農・工学等との学際化

人体の外部の自然の解明と技術開発に向かっていた科学が、20世紀の後半から人間の内部の解明へと向かってきている。

遺伝子の解明とゲノム計画が推進されはじめた頃から、細胞工学、遺伝子工学といった領域の研究者が増えているが、2万2,000の遺伝子そして30億の塩基対を解析するのに情報系の知識・技術は不可欠である。もともとこの分野で医学以外の科学者の果たしてきた功績は大きい。

1930年代にDNAを発見したのは物理学者のマックスデルブリックである。1953年にワトソン

とクリックはDNAの二重らせん構造を発見し、DNAがコピーされる仕組みを解明し、分子生物学の発展に大きな貢献をしたが、クリックも物理学者である。1973年にはDNAの組み換え技術が開発され、1997年にイギリスでドリーというクローン羊が誕生した。クローン人間を作りうる技術ができたということである。

1980年代からゲノム研究が進み、今はポストゲノムの時代であるが、医学に限らず、理学・農学、そして工学を含め生命科学分野の研究は、分野・領域の区別をつけることができなくなっている。

今、生命科学は遺伝子レベルで細胞の寿命を規定するものが何かを明らかにしつつあり、細胞の寿命だけでなく、個体の寿命を長くしたり短くしたりする技術を得ようとしている。老化のメカニズムに迫り、個体レベルでの生命への操作の可能性が見え始めてきているが、このような事態をどう考えればよいのか。

ひとはひとの生命の神秘に対して、どこまでの介入が許されるのかという生命観そのものに関わる根本的な問題はもとより、遺伝子解析と個人のプライバシーとの関係はどうあるべきか、あるいは、遺伝子による選別、優生学の問題、バイオ技術と産業・商業とのあり方についてなど、倫理的、社会的問題が噴出してきている。

1942年にロバートマートンは社会と科学との状況を考察し、科学者のエートスとして①共有性②普遍性③公平性④組織的懐疑主義を示し、願望をこめて科学者はこうあらねばならぬと指摘したが、半世紀たった1995年にジョンザイマンは、科学の現実には①所有的②局地的③権威的④請負的⑤専門的であると述べ、科学者が人類や公共への貢献のために研究に取り組むというよりは、研究者自らや彼らに影響を与える者達の私的欲望によって支配されるものになっていると指摘している。

科学技術の進歩と地球の破壊といった人類の生存を物理的に規定するような問題、加えて老化という人間存在の根源的問題にどのように向かうのか、このような最先端の技術は、日常の診療に従事している臨床医には縁遠い話のように思えるが、歴史を変えるような医学研究が常に人体を介して行われてきていることを忘れてはならないだろう。

(7) 医局講座制

大学が研究偏重になった大きな理由の一つは医局講座制にある。医局講座制とは不思議な制度である。大学における医師の養成だけでなく、教育や診療・研究のあり方について、独自の価値観のもとに決定、実行し、医局相互間は互いに不干渉で共存している。

一体、医局という組織の目的とか目標とは何なのか。日本の近・現代の医療は、1869(明治2)年にドイツ医学を国策として導入したことから始まる。ヨーロッパにおける実践的な病院医学は英国のエジンバラ学派であり、特に近代に於ける実践的な病院医学の代表はフランスの医学である。ドイツ医学はイギリスやフランスの病院医学に比べると、いわゆる研究室医学といわれるも

のであった。我が国は明治から昭和の終戦に至るまでをドイツ医学一辺倒で、その後米国の医学を模範としてきたが、この医療のあり方の実質的な受け皿となったのが大学の医局という組織である。

医局は設立された当時には、良医をつくるというかなりはっきりとした役割があったようである。しかし、現在では日本の医療や地域の医療を守ることを第一の目標に掲げ実践しているとはとても思えない。他にどんな目標があるのかを考えてみても、はっきりしない。組織には、自らが生き残るために、自己増殖しようとする性質があり、同類との競争が避けられない。

では、医局は他の医局と何を競争するのか、そしてその評価は何かであるが、目的も存在価値も曖昧な組織であるから、基準がわかりにくい。現実には組織の大きさ、すなわち医局員の数が多いか少ないか、連携する関連病院の数が多いか少ないか、入局者数が多いか少ないかが指標となる。そして、その時代に支配的な大学の価値、研究面で言えば、インパクトファクターの高い論文をどれだけ作り、全国の大学にどれだけ多くの教授を送り込むことができるかになる。

(8) 学術を巡る世界の動向

科学研究を巡る学術の世界でも、大きな変化が起こっている。

最近SDGsなどよく使われる言葉に、sustainable(持続可能な)という言葉がある。この言葉は、国連の「環境と開発に関する世界委員会」の委員長であった、ノルウェーのブルントラント首相が、1987年の最終報告書のなかで、sustainable development(持続可能な開発)という表現で、使ったのが最初である。科学による新しい知の発見とその歯止めのない利用が、地球環境の悪化そして、地球の生態系を破壊しかねないという危機感を訴えたものである。

このような背景のなかで、1999年にハンガリーのブダペストで開催された世界科学会議では、「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」を採択した。

その前文には、「科学は人類全体に奉仕するべきものであり、科学者たちは科学を責任ある方法で人類の必要と希望とに適用させることが急務であって、個々人に対して自然や社会へのより深い理解や生活の質の向上をもたらさなければならない」と、役に立つ科学・技術という概念をはっきりと打ち出している。

第一項、知識のための科学；進歩のための知識では、科学の働きは、「内発的な発展や進歩を促すためには、基礎的で問題に即した研究の推進が必要。公的部門と民間部門は、長期的目的のための科学研究の助成を、緊密な共同作業として、相互補完的に行うべきである。」とし、問題指向型の研究の重要性を指摘している。

第四項、社会における科学、社会のための科学、では、「研究によって得られた成果は人類の福祉を目的とし人間の尊厳、世界環境を尊重し、未来世代に対する責任を考慮するものでなければならない」と明快である。

我が国でも、2003年に第18期の日本学術会議は科学論のパラダイム転換分科会で、地球の諸

状況を考えると、社会は学術にパラダイムの転換を求めているとし、「新しい学術の視点とは有限の資源のもとで“Quality of life”を保ちながら人類が持続的に存続できる社会の構築に向けて人類と人類、人類と社会、人類と自然との関係を対象に統合的なシステムを提供することになる(中略)このためには個々の専門技術の統合化された知識体系への成長が構成されなければならない」と研究者コミュニティと需要者である社会や個人との相互関係が必要であると「人間と社会のための新しい学術体系」をまとめている。

科学者集団の内でも科学が単に人間の好奇心を満たす知的作業としてのみ存在する正当性を否定し、「Science for Science」というパラダイムから、「Science for Human, Earth, Society, Nature」への大きなパラダイムの転換を行ったのである。

このような背景のなかで2006年～2010年の第3期目の我が国の科学技術基本計画のライフサイエンス部門では4つの重点投資のための戦略理念を掲げ、その2番目に研究成果を創薬や新規医療技術などに実用化するための橋渡し研究の重要性をあげた。いわゆる臨床医学研究であり、Translational Researchである。

そして、戦略的重点科学技術として、臨床研究、臨床への橋渡し研究の必要性と、その具体的な推進方策として、臨床研究推進のための体制整備を取り上げている。

3. 医療と倫理

(1) 生殖補助医療と病腎移植

社会問題となった生殖補助医療や病腎移植は、医療のあり方や医療研究、あるいは医療倫理のあり方といった医療の理念に直結する問題である。両者とも学会が認めないと判断した治療を行った医師を、患者等が応援をし、それに社会の一部が共感を示している等々、よく似た構造になっている。

しかし、両者の問題の本質は異なる。生殖補助医療問題は、医学的には確立されている技術の適応拡大という場面で生じた問題であり、第三者の健康問題を巻き込むだけでなく、生まれてくる子供の権利や福祉のあり方に関わるという医師の職能の裁量や責任の範囲を超えたものである。

一方、病腎移植問題は、医学的には認められていない医療が行われたということ、そしてそのような医療が行われるにあたって、とられるべき適切な手続きがとられていないという倫理的な判断が問われたものである。

生殖補助医療問題については、2008年3月に政府の諮問を受けて日本学術会議が「代理出産については原則禁止」という見解を出したが、これがどのような効力を持つのか。

病腎移植問題では、日本移植学会、泌尿器科学会、腎臓学会、透析医学会、臨床腎移植学会の5学会からなる調査委員会が「現在の医療水準から外れた医療が適切な手続きを取らずに、計画的組織的に行われた医療であり、現時点では認められない医療である」という結論を出したが、こ

の学術団体の医学的な判断に国会議員までが介入して異を唱えている。

生殖補助医療も、病腎移植も、学術団体の判断は社会全体のコンセンサスにはならないということである。

病腎移植問題は、2008年から2009年にかけて、病腎移植を行った宇和島徳洲会病院の医師および患者が原告となり、医療を受ける権利と生存権を侵害されたなどとして損害賠償を求め、この問題に対応した私を含め日本移植学会関係者5名を訴えた。結果は2014年に松山地裁が「医学的妥当性に関する意思表示であり、違法性は無い」として原告の主張を退け私たちが勝訴した。その後、控訴されたが、2016年高松高裁は一審の松山地裁の判決を支持し棄却した。

(2) 社会的背景

医療のあり方を巡っての社会的背景も大きく変化した。1970年代の後半から広がってきた患者の人権意識、権利意識の向上は、パターンリズムを否定し、生命倫理を基本におくインフォームドコンセントと自己決定を原則としたパートナーシップの医療に変わった。

医療技術の進歩も、医療倫理のあり方を大きく変化させた。人工呼吸器の発明によって脳死という概念が生まれ、死の定義が曖昧になった。あるいは、生前診断が胎児の生命を決定する理由として、どこまで認められるかなど、技術の評価のあり方に、大きな影響を与えている。

特に第三者の身体や身体の一部を治療として使用する技術が確立されてから、それまでの医師対患者の1対1の関係が複雑なものとなり、健常人に障害を与えるという行為をどう正当化させるのかという新たな倫理問題を生んだ。輸血療法は、第三者への侵襲の小ささと治療としての効果の大きさによって、倫理的には大きな問題とされることなく、有益な治療手段として定着してきたが、原理的には生殖医療も臓器移植医療も、この延長上にある。

札幌で世界で30例目の心臓移植が行われたのは1968年である。当初は英雄視されたが、内部告発による疑惑に、大学も医学界も、社会に対し適切な対応をしなかったために、札幌医大だけでなく医療界は大きな不信感を残す結果となり、その後の30年間を脳死論争に費やし、脳死からの臓器提供は封印されることになった。

この問題に決着がついたのは、1990(平成2)年の脳死臨調の答申(1992(平成4)年1月)を経て、1997(平成9)年10月に「臓器の移植に関する法律」が成立した時で30年間を要している。

(3) 現状の限界

新しい医療技術を巡る倫理問題は、ほとんどが医療の現場で発生するため、医療界の責任のように考えられてきた。このような社会状況のなかで医療界では、自主的に倫理委員会や倫理規範を作って、自浄作用の発揮できる仕組みを作ろうとしてきた。例えば、日本移植学会は、1994(平成6)年に他の学会に先駆けて倫理指針を公表した。倫理委員会の委員には、法律関係者など外部からも参加してもらい、原則公開もしている。

しかし、医療界のこうした取り組みも所属している学会員にしか拘束力はなく、生殖補助医療や病腎移植のような問題が起きると、学会員以外には医師であれ、社会一般に対してであれ、何の権限も強制力もないことに気づくことになる。

これらのことは、我が国の医療のあり方に、二つの大きな欠落があったことを気づかせる。一つは、救急のたらい回しや医師不足で深刻化している地域の医療問題である。これは、医師等の人的医療資源を社会の変化や技術の進歩、国民意識の変化による医療需要に合わせて育成し配置してこなかったことによる。もう一つの欠落は、医師が統一された専門職能団体として、医療の安全と質について統括して担保し責任を持つ仕組みを持たなかったことである。

(4) 今後の課題

医療技術のような行為が社会的に許容される条件や限度は何かを明らかにする必要がある。そのためには第一に人体そのものをどう考えるかである。すなわち技術の進歩と人体への利用についての倫理原則を社会の合意のもとに持つかどうかである。

第二に、新しい医療技術の開発や、その技術が、それまでに想定されていなかった分野に適応されようとするような時に、その技術の医学的な評価だけでなく、社会的あるいは経済的、ときには政治的な評価をどう行うか。医学会が職能団体として医学的価値や評価を行うのは当然だが、社会的な問題等については誰がどう関わるべきか、その関わり方と責任の範囲を明らかにする必要がある。

第三に、医行為を実際に行う専門職能団体は、専門職能の範囲のどこまでの裁量をもち、責任を負わなければならないのかを明らかにする。そのためには専門家がその責任の範囲で行った決定については、社会もこれを基本的に認めるという合意が求められる。規範とか規律は、それを破った場合の罰則規定を伴って完結するものであり、専門医学会の最終結論なら少なくとも医学界全体に対して、強い影響力をもつものでなければ有効ではない。

最終的に社会で問題となっている医療技術を受け入れるのかどうかは、社会的、経済的判断を含めた総合的な政治的判断が必要とされる。医学会は移植医療の医学的価値については評価できるが、組織や臓器といった生体材料を使用することが、社会にどのような影響を及ぼすのかというような問題については、その裁量を超えている。医療界と社会と政治の役割と責任の範囲を明らかにし、同時にそれぞれの限界をあいまいにしないことが重要である。

4. おわりに・医療とは何か

19世紀から20世紀に生きたウィリアムオスラーは、“Medicine is a science of uncertainty, Art of probability”と述べたが、この状況は現在に至るまで変わっていない。従って医療者と患者とは医学医療の不確実さとその限界についての理解を共有することが前提となる。これは医師の側の責

任回避のための理屈ではない。医療は不確実であるという医療の限界と現実とを、お互いが正面から向き合って理解せざるを得なく、それなくしては医療は成り立たない。100%確実であることについて、信頼関係は必要ない。

臨床研究とは標準的な医療の診断・治療の確立に資するものだが、それぞれの人の個別性に合わせた治療法を保証できる域には達していない。従って、医療現場では標準的な範疇から外れた症例に遭遇することや、倫理的な判断に迷うといったことは日常的に起こりうるため、その場で何らかの対応をしなければならない。

このように現実の医療とは不確実なものであり、現場の医師は自らの責任で、隠さずに、ごまかさずに誠意をもって最善と考えられる手を選び対応してゆく以外になく、それこそが医師の義務であり特権であって、医師の存在理由である。

正解の解らない状況のなかで、最適解を探し決断を下して行動を求められる臨床医は専門職としてどうあるべきか。1. 医学医療への使命・責任感、2. 患者への共感と理解と対話能力、3. 標準的医療水準の理解と技能、4. 生涯にわたる研鑽、5. 現時点での倫理と手続きの理解と遵守、6. 法・規則の理解とその遵守、といった項目が浮かんでくるが、考えてみればこれらは特別なことではなく、当たりまえの医師像として求められる資質・条件である。

哲学者の清水哲郎氏は「医療現場に臨む哲学」(勁草書房、1997年)のなかで、医療について

1. 患者のより良い状態をめざせ
 - 患者のQOLの総和を大きくすることをめざせ
2. 患者を人間として遇せよ
 - 患者が充実した人生を送ることを妨げるな
 - 患者と共同で医療行為をせよ
 - 患者の傍らにあれ(表記改変)

と述べているが至言であり、私は座右としてきた。

このように記すと医師に聖人君子のような人間像を思い浮かべるかも知れないが、そうではない。患者の前ではいかに真摯であっても、医療の現場から離れば酒を飲んで、少々ハメを外すぐらいのことは意に介することではない。

今回、これまでの講演や文章にしたものを読み返し、当時の状況を思い出しながら本稿をまとめたが、あらためて、「医療とは何か」と問われれば、私は次のように答える。

医療とは病苦を取り除くために、科学・技術・倫理に支えられた 人が人に行う 社会的、公共的な営みである

<師匠の言葉>

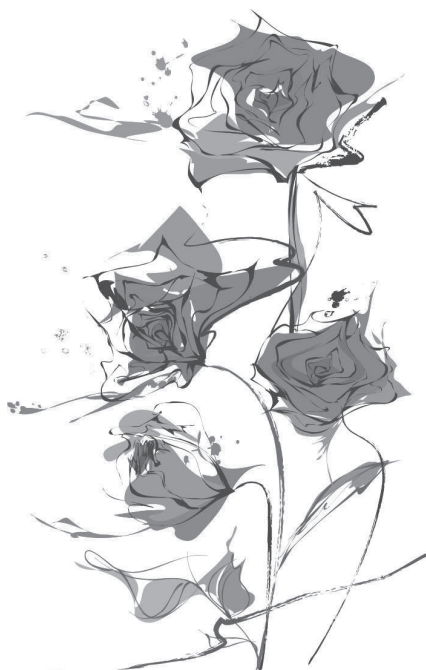
医療とはつまるところ奉仕だよ (故・太田裕祥先生・元 社会保険中京病院院長)

医は意地だ 仁でも算でもない 志をたて 誤を恐れず 禄を望まず

(故・岩月舜三郎先生・元 ピッツバーグ大学外科教授)

(参 考)

1. 藤田保健衛生大学医学セミナー第15回特別講演「医学研究私見」2004年9月22日.
2. 第3回名古屋工業大学創立100周年記念講演会「超高齢社会を迎えて－医工科学技術と社会のあり方－」2005年10月31日.
3. 第30回日本小児皮膚科学会学術大会特別講演「臨床医学研究について」2006年6月17日.
4. 病気腎移植の何が問題なのか－「二つの医療」と医師集団の責任. 日本医事新報. 4324(2007年3月10日):106-114. 2007.
5. 第115回日本産科婦人科学会関東連合地方部会特別講演「臨床医学会の社会的責任と裁量」2008年6月15日.
6. 超高齢社会と医療. 学術の動向. 18(1):76-79. 2013.



業 績



社会保険中京病院

(1970(昭和45)年4月～1996(平成8)年12月)

〈 編 書 〉

1. 阿曾佳郎, 大島伸一, 田島惇 編: Endourology の現況と問題点 名古屋シンポジウム. 日本泌尿器科学会東海地方会, 名古屋. 1987.
2. 東間紘, 大島伸一, 長谷川昭 編著: 腎移植臨床マニュアル. 中外医学社, 東京. 1993.

〈 著 書 〉

1. Fujita T, Naide Y, Ohshima S, Ono Y, Suzuki K, Tajima A, Asano H, Ohta K, Fukushima M, Aso Y: Responsiveness of Chemotherapeutically Treated Metastatic Prostate Cancer to Hormonal Therapy. In: Prostate Cancer. The Second Tokyo Symposium, Karr JP, Yamanaka H (Eds.). Elsevier Science Publishing Co., New York. 1989. pp. 320-323.
2. 大島伸一: 臨床の要点に答えて. 透析療法と腎移植(太田和夫 編). 中外医学社, 東京. 1981.
 - (1) 腎移植 D. レシピエント(準備)1)腎移植手術前の処置. p. 305.
 - (2) 腎移植 D. レシピエント(準備)3)移植予定の前々日. p. 309.
 - (3) 腎移植 H. 拒絶反応 4)不可逆性急性拒絶反応の条件. pp. 343-346.
3. 大島伸一: 腎移植の現状と将来. 第2回浜松カンファレンス泌尿器科学の最近の進歩(阿曾佳郎 編). 浜松医科大学, 浜松. 1981. pp. 34-16.
4. 大島伸一: 腎移植の実際(太田和夫, 岩崎洋治, 園田孝夫 編). 南江堂, 東京. 1985.
 - (1) 移植腎をあきらめるとき. pp. 100-105.
 - (2) 移植腎摘除の手技. pp. 292-295.
 - (3) 胸管ドレナージ法. pp. 296-298.
5. 大島伸一: Dismembered Pyelolithotomy. 腎と透析 臨時増刊号 腎尿路結石のすべて(小磯謙吉 編). 東京医学社, 東京. 1987. pp. 173-176.
6. 大島伸一: 腎移植について. 平成元年度卒後教育テキスト(卒後教育委員会 編). 名城大学薬学部・薬学部同窓会, 名古屋. 1989. pp. 1-7.
7. 大島伸一: 体外免疫調節(阿岸鉄三 編). 日本メディカルセンター, 東京. 1990.
8. 大島伸一: 腎摘出術(提供腎, 拒絶腎). 臨床透析 Vol. 6 8月別冊 腎移植のすべて(酒井糾 編). 日本メディカルセンター, 東京. 1990. pp. 186-191.
9. 大島伸一: 図説泌尿器科学講座 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学(吉田修, 三宅弘治, 小柳知彦 編). メジカルビュー社, 東京. 1991.
 - (1) 腎血管性病変 動脈瘤, 動静脈瘻, 腎血管性高血圧症. pp. 68-71.
 - (2) 腎血管性病変 治療 外科的療法. pp. 75-76.
 - (3) 腎移植 歴史と用語, 手術手技, 生体腎移植. pp. 106-114.
10. 大島伸一, 小野佳成: 腎移植 死体腎移植. 図説泌尿器科学講座 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学(吉田修, 三宅弘治, 小柳知彦 編). メジカルビュー社, 東京. 1991. pp. 125-128.
11. 小野佳成, 大島伸一: 図説泌尿器科学講座 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学(吉田修, 三宅弘治, 小柳知彦 編). メジカルビュー社, 東京. 1991.
 - (1) 腎血管性病変 腎硬塞, 腎静脈血栓症, 腎静脈奇形. pp. 72-74.
 - (2) 腎移植 組織適合抗原と移植免疫反応. pp. 115-118.
 - (3) 腎移植 免疫抑制療法. pp. 119-124.
 - (4) 腎移植 拒絶反応. pp. 129-132.

12. 絹川常郎, 大島伸一: 腎移植 術後管理と合併症. 図説泌尿器科学講座 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学(吉田修, 三宅弘治, 小柳知彦 編). メジカルビュー社, 東京. 1991. pp.141-146.
13. 小野佳成, 大島伸一: 腹腔鏡下腎摘出術. 図説泌尿器科手術書(吉田修, 三宅弘治, 小柳知彦 編). メジカルビュー社, 東京. 1992. pp.54-59.
14. 大島伸一: 死体腎移植後の早期管理について. モダンクリニカルポイント泌尿器科(吉田修, 奥山明彦 編). 金原出版, 東京. 1993. pp.104-105.
15. 小野佳成, 大島伸一: 免疫抑制. 腎移植臨床マニュアル(東間紘, 大島伸一, 長谷川昭 編). 中外医学社, 東京. 1993. pp.23-34.
16. 松浦治, 大島伸一: 腎移植手術手技. 腎移植臨床マニュアル(東間紘, 大島伸一, 長谷川昭 編). 中外医学社, 東京. 1993. pp.64-79.

外16編 全41編

＜ 英文論文 ＞

1. Ohshima S, Ono Y, Umeda S, Kinukawa T, Matsuura O, Ohno S, Fujita T, Asano H, Ohta Y: Effect of Blood Transfusion on the Survival of Renal Allografts. *Low Temp Med.* 4(4):115-118. 1978.
2. Ono Y, Hirabayashi S, Ohshima S, Koide Y: Natural Cell-Mediated Cytotoxicity in Long-Term Kidney Transplant Recipients. *Transplant Proc.* 13(2):1508-1510. 1981.
3. Ohshima S, Ono Y, Mitsuya H: Dismembered Pyelolithotomy: New Procedure for Removal of Renal Calculi. *Urology.* 17(1):22-25. 1981.
4. Inagaki Y, Ohshima S, Fujita T: The Applications of Double-Balloon Catheter - Preservation of Cadaver Kidney for Transplantation in Situ. *Medical Apparatus News.* 3(11):8-14. 1982.
5. Ono Y, Takeuchi N, Ohshima S, Mitsuya H: Anterior Urethral Valve. *Urology.* 20(5):538-539. 1982.
6. Takagi H, Uchida K, Ohshima S, Fujita T, Yamada N, Ono Y, Asano H, Akaza T: Prospective HLA-DR Matching in Cadaveric Renal Transplantation. *Transplant Proc.* 15(4):2139-2141. 1983.
7. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Tsuzuki K, Itoh S: Kidney Transplantation from an Anencephalic Baby: A Case Report. *J Urol.* 132(3):546-547. 1984.
8. Ono Y, Ohshima S, Hanai S, Sugiyama S, Kano T, Suenaga M: A Kidney Transplant Patient with Hepatocellular Carcinoma. *Transplantation.* 37(6):620-621. 1984.
9. Takagi H, Uchida K, Ohshima S, Fujita T, Kano T, Asano H, Ono Y: Cyclosporin A Effective Therapy for Fifty-two Cadaver Kidney Recipients. *Jpn J Surgery.* 15(2):160-165. 1985.
10. Ohshima S, Ono Y, Fujita T, Aso Y: Three-Drug Combination Chemotherapy for Advanced Urothelial Tract Carcinoma. *Cancer Chemother Pharmacol.* 20(Suppl):S20-S23. 1987.
11. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R: The Beneficial Effects of Thoracic Duct Drainage in HLA-1 Haplotype Identical Kidney Transplantation. *J Urol.* 138(1):33-35. 1987.
12. Ono Y, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Hirabayashi S: MLR Suppression and MLR-Suppressor Activity Induced by Thoracic Duct Drainage Prior to Transplantation. *Transplant Proc.* 19(1):1985-1987. 1987.
13. Ohshima S, Fujita T, Asano H, Ono Y: The Effect of Cyclosporine on the Early Postoperative Function of Allografted Kidneys with Warm Ischemic Damage. *Transplant Proc.* 19(1):2081-2084. 1987.
14. Hasegawa S, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi Y, Hattori R, Murakami S: Adenocarcinoma of the Bladder 29 Years after Ileocystoplasty. *Brit J Urol.* 61(2):162. 1988.
15. Ono Y, Watanabe J, Hirabayashi S, Yamada S, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Kato N, Sugiyama T: Transurethral Lithotripsy Using Rigid Ureteroscope. *Jpn J Endourol ESWL.* 1(2): 47-50. 1988.

16. Fujita T, Asano H, Naide Y, Ono Y, Ohshima S, Suzuki K, Aso Y, Ariyoshi Y, Fukushima M, Ota K : Antitumor Effects of Human Lymphoblastoid Interferon of Advanced Renal Cell Carcinoma. J Urol. 139(2):256-258. 1988.
17. Ono Y, Ohshima S, Yamada S, Hattori R, Hasegawa S : Cyclosporine Level of Lymph in the Thoracic Duct and the Lymph Node. Transplant Proc. 20(1 Suppl 1):167-169. 1988.
18. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hirabayashi S : The Beneficial Effect of Thoracic Duct Drainage Pretreatment in Living Related Kidney Transplantation. Transplant Proc. 20(1 Suppl 1):415-417. 1988.
19. Hasegawa S, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R, Murakami S : Adenocarcinoma of the Bladder 29 Years after Ileocystoplasty. Acta Urol Jpn. 35(4):671-674. 1989.
20. Kinukawa T, R Hattori, Ono Y, Watanabe J, Yamada S, Ohshima S, Matsuura O, Takeuchi N, Katoh N, Sugiyama T : Treatment of Ureteral Stone Using Rigid Ureteroscope. Jpn J Endourol ESWL. 2(2):154-158. 1989.
21. Ono Y, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Hirabayashi S, Yamada S : Long-term Results of Transurethral Lithotripsy with the Rigid Ureteroscope : Injury of Intramural Ureter. J Urol. 142(4):958-960. 1989.
22. Asano Y, Yoshikawa T, Suga S, Yazaki T, Hirabayashi S, Ono Y, Tsuzuki K, Ohshima S : Human Herpesvirus-6 Harboring in Kidney. Lancet. 2(December 9, 1989):1391. 1989.
23. Ono Y, Ohshima S, Fujita T, Kinukawa T, Matsuura O, Hirabayashi S, Takeuchi N : Low-Dose Cyclosporin, Prednisolone and Anti-Lymphocyte Globulin Immunosuppressive Treatment in Cadaveric Kidney Transplantation. Transplant Proc. 21(1):1657-1659. 1989.
24. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R : The Long-term Results of Thoracic Duct Drainage in Living Related Kidney Transplantation. Transplant Proc. 21(1):1972-1973. 1989.
25. Tsuzuki K, Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O : Growth and Kidney Transplantation in Children. Transplant Proc. 21(1):1995-1996. 1989.
26. Kinukawa T, Ohshima S, Ono Y, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R, Hasegawa S, Sugiyama S, Tsuzuki T : Paradoxical Effects of Acute Rejection in Long-term Kidney Allografts After Pretreatment with Thoracic Duct Drainage. Transplant Proc. 21(1 Pt 2):2192-2193. 1989.
27. Hanai S, Hirabayashi S, Ono Y, Watanabe J, Yamada S, Kamihira O, Ohshima S : Extracorporeal Shock Wave Lithotripsy for Ureterolithiasis and Supplementary Therapy. Jpn J Endourol ESWL. 3(2):208-211. 1990.
28. Takeuchi N, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Hattori R, Hasegawa S : An Outlet Obstruction Caused by V-Shaped Bar at the Bladder Neck in a Woman. J Urol. 143(4):811-812. 1990.
29. Tanaka K, Matsuura O, Takeuchi N, Kuriki O, Ohshima S : Clinical Experience Using the MPL-9000 with an X-Ray System. Jpn J Endourol ESWL. 4(1):74-76. 1991.
30. Ono Y, Ohshima S : Recent Advances in Ureteroscope : Endopyeloureterotomy-Transpelvic Extraureteral Approach. Jpn J Endourol ESWL. 4(1):98-99. 1991.
31. Katoh N, Sugiyama T, Itoh M, Ono Y, Watanabe J, Yamada S, Kamihira O, Hirabayashi S, Hanai S, Ohshima S : ESWL Monotherapy for Large Renal Calculi. Jpn J Endourol ESWL. 4(2):176-180. 1991.
32. Sahashi M, Ono Y, Matsuura O, Ohshima S, Fukushima M : Combination Chemotherapy for Advanced Urothelial-Tract Carcinoma. Cancer Chemother Pharmacol. 30(Suppl):S59-62. 1992.
33. Yamada S, Ono Y, Sahashi M, Ohshima S, Nonomura H : Transurethral Ureteroscopic Balloon Dilation for Obstructive Disease in Ureter. Jpn J Endourol ESWL. 5(1):20-22. 1992.
34. Ono Y, Kinukawa T, Sahashi M, Katoh N, Matsuura O, Hirabayashi S, Yamada S, Suenaga H, Ohshima S : Laparoscopic Nephrectomy in 10 Patients with Renal Disease. Jpn J Endourol ESWL. 5(2):146-149. 1992.
35. Kamihira O, Ono Y, Sahashi M, Yamada S, Kurokawa T, Mizutani K, Watanabe J, Ohshima S : Treatment of Mid and Distal Ureteral Calculi with Extracorporeal Shock Wave Lithotripsy in the Prone Position. Jpn J Endourol ESWL. 5(2):191-193. 1992.

36. Ono Y, Ohshima S, Kinukawa T, Sahashi M, Yamada S : Endopyeloureterotomy via a Transpelvic Extraureteral Approach. *J Urol.* 147(2):352-355. 1992.
37. Suga S, Yoshikawa T, Asano Y, Nakashima T, Yazaki T, Fukuda M, Kojima S, Matsuyama T, Ono Y, Ohshima S : IgM Neutralizing Antibody Responses to Human Herpesvirus-6 in Patients with Exanthem Subitum or Organ Transplantation. *Microbiol Immunol.* 36(5):495-506. 1992.
38. Yoshikawa T, Suga S, Asano Y, Nakashima T, Yazaki T, Ono Y, Fujita T, Tsuzuki K, Sugiyama S, Ohshima S : A Prospective Study of Human Herpesvirus-6 Infection in Renal Transplantation. *Transplantation.* 54(5):879-833. 1992.
39. Takeuchi N, Ohshima S, Ono Y, Sahashi M, Matsuura O, Yamada S, Tanaka K, Kuriki O, Kamihira O : Five-Year Results of Thoracic Duct Drainage in Living Related Donor Kidney Transplantation. *Transplant Proc.* 24(4):1421-1423. 1992.
40. Hattori R, Kinukawa T, Ohshima S, Matsuura O, Ono Y, Fujita T : Outcome of Kidney Transplantation from Non-Heart-Beating Donors : Comparison with Heart-Beating Donors. *Transplant Proc.* 24(4):1455-1456. 1992.
41. Katoh N, Ono Y, Ohshima S, Miyake K : Diffusion of Cefmenoxime and Latamoxef into Prostatic Fluid in the Patients with Acute Bacterial Prostatitis. *Urol Int.* 48(2):191-194. 1992.
42. Hattori R, Ohshima S, Ono Y, Miyake K : The Significance of Cystoscopy for the Diagnosis of Urothelial Tumor. *Int Urol Nephrol.* 25(2):135-139. 1993.
43. Yamada S, Ono Y, Sahashi M, Ohshima S : Transurethral Ureteroscopic Ureterotomy for Stricture of the Ureter. *Jpn J Endourol ESWL.* 6(1):42-44. 1993.
44. Katoh N, Ono Y, Yamada S, Kinukawa T, Sahashi M, Matsuura O, Hirabayashi S, Hatano Y, Sakakibara T, Ohshima S : Review of Laparoscopic Nephrectomy in 26 Patients. *Jpn J Endourol ESWL.* 6(2):129-132. 1993.
45. Okamura K, Ono Y, Yamada Y, Katoh T, Ohshima S, Miyake K : Endoscopic Trigonoplasty for Primary Vesicoureteral Reflux : Initial Case Report. *Jpn J Endourol ESWL.* 6(2):226-228. 1993.
46. Ono Y, Sahashi M, Yamada S, Ohshima S : Laparoscopic Nephrectomy without Morcellation for Renal Cell Carcinoma : Report of Initial 2 Cases. *J Urol.* 150(4):1222-1224. 1993.
47. Ono Y, Ohshima S, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R, Tanaka K, Yamada S, Kamihira O, Kuriki O : Thoracic Duct Drainage Pretreatment in Living Related Kidney Transplantation. *Therapeutic Plasmapheresis.* 12:341-344. 1993.
48. Ichikawa Y, Hashimoto M, Nojima M, Sata M, Fujimoto N, Kyo M, Ishibashi M, Ohshima S, Amemiya H, Fukunishi T, Nagano S, Sonoda T : The Significant Effect of HLA-DRB1 Matching on Long-Term Kidney Graft Outcome. *Transplantation.* 56(6):1368-1371. 1993.
49. Kinukawa T, Ohshima S, Fujita T, Ono Y : Exploration of the System for Cadaver Kidney Transplantation with the Non-Heart-Beating Donor : Efficacy of In Situ Cooling and Low-Dose Cyclosporine. *Transplant Proc.* 25(1):1524-1526. 1993.
50. Ichikawa Y, Hashimoto M, Nojima M, Sata M, Fujimoto N, Kyo M, Ishibashi M, Ohshima S, Amemiya H, Fukunishi T, Nagano S, Sonoda T : Significant Effect of HLA-DRB1 Typing by Linkage Disequilibrium on Kidney Graft Outcome. *Transplant Proc.* 25(4):2707-2709. 1993.
51. Nojima M, Ichikawa Y, Ihara H, Ishibashi M, Ohshima S, Ikoma F : Long-Term Success Rate of HLA-DRB1 Compatible Kidney Transplants. *Transplant Proc.* 25(6):3056-3059. 1993.
52. Kobayashi T, Negita M, Yokoyama I, Kamura H, Kohara S, Ohshima S, Fujita T, Ono Y, Kinukawa T, Hoshinaga K, Matsuura O, Uchida K, Takagi H : Clinical Value of HLA-DRB1 Typing in Cadaveric Renal Transplantation. *Transplant Proc.* 25(6):3271-3272. 1993.
53. Katoh N, Ono Y, Yamada S, Mizutani K, Shintaku I, Ohshima S : Visual Laser Ablation of the Prostate : Early Experience in 97 Patients. *Jpn J Endourol ESWL.* 7(2):194-196. 1994.
54. Katoh N, Y Ono, Yamada S, Kinukawa T, Hattori R, Ohshima S : Laparoscopic Radical Nephrectomy for Renal Cell Carcinoma : Early Experience. *J Endourol.* 8(5):357-359. 1994.
55. Ono Y, Katoh N, Kinukawa T, Sahashi M, Ohshima S : Laparoscopic Nephrectomy, Radical Nephrectomy and Adrenalectomy : Nagoya Experience. *J Urol.* 152(6 Pt 1):1962-1966. 1994.

56. Ichikawa Y, Fujimoto N, Hashimoto M, Kyo M, Kinoshita T, Takahara S, Yamasaki M, Ohshima S, Ihara H, Fukunishi T, Sata M, Amemiya HP, Hanafusa T, Nagano S : Long-term Graft Survival Rate of Zero-Mismatch Kidney Transplants for HLA-DRB1. *Transpl Int.* 7 Suppl:S281-S285. 1994.
57. Sugiyama S, Tsuyuki M, Okazaki Y, Takeuchi N, Matsuura O, Ohshima S : Arteriosclerotic Lesions of Donor Kidney and Graft Survival. *Transplant Proc.* 26(2):929-930. 1994.
58. Nojima M, Ichikawa Y, Ihara H, Ishibashi MO, Ohshima S, Ikoma F: Long-Term Kidney Graft Outcome Based on HLA-DRB1 Matching. *Transplant Proc.* 26(4):1884-1886. 1994.
59. Takeuchi N, Ohshima S, Matsuura O, Ono Y, Katoh N, Yamada S, Fujita T, Kinukawa T, Hirabayashi S, Sahashi M : Immunosuppression with Low-Dose Cyclosporine, Mizoribine, and Steroids in Living-Related Kidney Transplantation. *Transplant Proc.* 26(4):1907-1909. 1994.
60. Furukawa T, Hattori R, Kinukawa T, Ohshima S, Fujita T, Ono Y : Analysis of Acute Rejection Episodes During Acute Tubular Necrosis. *Transplant Proc.* 26(4):1999-2000. 1994.
61. Yamada S, Ono Y, Katoh N, Fujita T, Kinukawa T, Matsuura O, Ohshima S : Patients Receiving Kidneys from Non-Heart-Beating Donors in the Cyclosporin Era : Factors Influencing Long-Term Results. *Transplant Proc.* 26(4):2013-2015. 1994.
62. Ohshima S, Ono Y, Sahashi M, Matsuura O, Takeuchi N, Tanaka K, Yamada S, Kamihira O, Kuriki O, Mizutani K, Kurokawa T, Hashimoto Y : Extracorporeal Shock Wave Lithotripsy Using the Dornier MPL 9000 Lithotripter. *Urol Int.* 52(1):17-20. 1994.
63. Okamura K, Ono Y, Yamada Y, Katoh T, Tsuji Y, Ohshima S, Miyake K : Endoscopic Trigonoplasty for Primary Vesico-Ureteric Reflux. *British J Urol.* 75(3):390-394. 1995.
64. Hasegawa T, Maeda Y, Yamakawa K, Tsuchida T, Ohshima S : Donor Card Registration System in Japan: an Obstacle to Procuring Kidneys for Transplantation. *Health Policy.* 33(3):169-177. 1995.
65. Ono Y, Ohshima S, Hirabayashi S, Hatano Y, Sakakibara T, Kobayashi H, Ichikawa H : Laparoscopic Nephrectomy Using a Retroperitoneal Approach : Comparison with a Transabdominal Approach. *Int J Urol.* 2(1):12-16. 1995.
66. Sakakibara T, Ono Y, Katoh N, Kinukawa T, Matsuura O, Hirabayashi S, Hatano Y, Nagano T, Kondo T, Ohshima S : A Retroperitoneal Approach in Laparoscopic Nephrectomy and its Efficacy. *Jpn J Endourol ESWL.* 8(2):170-174. 1995.
67. Takeuchi N, Ohshima S, Matsuura O, Ono Y, Katoh N, Fujita T, Kinukawa T, Hattori R : Laparoscopic Pelvic Lymphadenectomy for the Staging of Localized Prostatic Carcinoma: A Comparison between the Intraperitoneal and Extraperitoneal Approach. *Jpn J Endourol ESWL.* 8(2):175-179. 1995.
68. Kinukawa T, Hattori R, Ono Y, Katoh N, Hirabayashi S, Ohshima S, Matsuura O : Laparoscopic Radical Nephrectomy Analysis of 15 Cases and Preliminary Report of the Retroperitoneal Approach. *Jpn J Endourol ESWL.* 8(2):188-191. 1995.
69. Kuriki O, Ohshima S, Matsuura O, Ono Y, Katoh N, Yamada S, Kinukawa T, Hattori R : A Thermosensitive Stent for the Treatment of Benign Prostatic Hyperplasia. *Jpn J Endourol ESWL.* 8(2):192-194. 1995.
70. Yokoi S, Ono Y, Katoh N, Takeda A, Yamada S, Mizutani K, Shintaku I, Ohshima S : Visual Laser Ablation of the Prostate (VLAP) : Alteration of Laser Energy Depending on the Estimated Volume. *Jpn J Endourol ESWL.* 8(2):195-197. 1995.
71. Yamada S, Ono Y, Ohshima S, Miyake K : Transurethral Ureteroscopic Ureterotomy Assisted by a Prior Balloon Dilation for Relieving Ureteral Strictures. *J Urol.* 153(5):1418-1421. 1995.
72. Gotoh M, Yoshikawa Y, Sahashi M, Ono Y, Ohshima S, Kinukawa T, Kondo A, Miyake K : Urodynamic Study of Storage and Evacuation of Urine in Patients with a Urethral Kock Pouch. *J Urol.* 154(5):1850-1853. 1995.
73. Ichikawa Y, Hashimoto M, Hanafusa T, Kyo M, Fujimoto N, Matsuura O, Takahara S, Hayashi R, Ihara H, Ono Y, Suzuki S, Fukunishi T, Ohshima S, Nagano S : Delayed Graft Function does not Influence Long-Term Outcome in Cadaver Kidney Transplants without Mismatch for HLA-DRB1. *Transpl Int.* 8(6):421-425. 1995.
74. Ochiai T, Ishibashi M, Fukao K, Takahashi K, Endo T, Yokoyama I, Uchida K, Ohshima S, Takahara S, Morozumi K, Yamaguchi Y, Kyo M, Sonoda T, Takagi H, Ota K, Iwasaki Y, the Japanese FK

- 506 Study Group : Japanese Multicenter Studies of FK506 in Renal Transplantation. *Transplant Proc.* 27(1):50-53. 1995.
75. Ochiai T, Fukao K, Takahashi K, Endo T, Ohshima S, Uchida K, Yokoyama I, Ishibashi M, Takahara S, Iwasaki Y: Phase III study of FK506 in Kidney Transplantation. Japanese FK 506 Study Group. *Transplant Proc.* 27(1):829-833. 1995.
76. Itoh M, Katoh N, Ono Y, Ohshima S, Miyake K : Sequential Changes in the Prostatic Fluid Level of Latamoxef in Patients with Acute Bacterial Prostatitis. *Urol Int.* 55(2):101-104. 1995.
77. Ohshima S, Fujita T, Ono Y, Kinukawa T, Katoh N, Matsuura O : Immunosuppressive Treatment of Primary Cadaveric Renal Transplant Patients Receiving Kidneys from Non-Heart Beating Donors. *Artificial Organs.* 20(10):1130-1136. 1996.
78. Shintaku I, Ono Y, Katoh N, Takeda A, Ohshima S : Anterior Urethral Diverticulum Produced by Cowper's Gland Duct Cyst. *Int J Urol.* 3(5):412-413. 1996.
79. Yamada S, Ono Y, Ohshima S : Endourological Treatment of the Upper Urinary Tract Obsuruction. *Jpn J Endourol ESWL.* 9(1) : 37-42. 1996.
80. Kamihira O, Ohshima S, Ono Y, Katoh N, Matsuura O, Takeuchi N, Takeda A, Yamada S, Kuriki O, Hashimoto Y, Mizutani K, Shintaku I, Kondoh T, Yokoi S : ESWL Treatment and the Detection of Urological Neoplasms. *Jpn J Endourol ESWL.* 9(1):105-108. 1996.
81. Ono Y, Katoh N, Sahashi M, Matsuura O, Ohshima S, Ichikawa Y : Laparoscopic Adrenalectomy Via the Retroperitoneal Approach : First Five Cases. *J Endourology.* 10(4):361-365. 1996.
82. Okamura K, Yamada Y, Tsuji Y, Sakakibara T, Kondo A, Ono Y, Ohshima S, Miyake K : Endoscopic Trigonoplasty in Pediatric Patients with Primary Vesicoureteral Reflux: Preliminary Report. *J Urol.* 156(1):198-200. 1996.
83. Ono Y, Katoh N, Kinukawa T, Matsuura O, Ohshima S : Laparoscopic Nephrectomy Via the Retroperitoneal Approach. *J Urol.* 156(3):1101-1104. 1996.
84. Kamihira O, Ono Y, Katoh N, Yamada S, Mizutani K, Ohshima S : Long-Term Stone Recurrence Rate after Extracorporeal Shock Wave Lithotripsy. *J Urol.* 156(4):1267-1271. 1996.
85. Takeuchi N, Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Katoh N, Matsuura O, Yamada S : Endopyeloureterotomy Via the Transpelvic Extra-Ureteral Approach. *Minimally Invasive Therapy.* 5(2):217-220. 1996.
86. Hashimoto Y, Nagano S, Ohshima S, Takahara S, Fujita T, Ono Y, Kinukawa T : Surgical Complications in Kidney Transplantation: Experience From 1200 Transplants Performed Over 20 Years at Six Hospitals in Central Japan. *Transplant Proc.* 28(3):1465-1467. 1996.
87. Furukawa T, Kinukawa T, Hattori R, Ono Y, Katoh N, Fujita T, Nishiyama N, Matsuura O, Takeuchi N, Ohshima S : Multivariate Analysis of Factors Affecting Cadaver Kidney Allograft Survival in Chronic Stage. *Transplant Proc.* 28(3):1565-1567. 1996.
88. Mizutani K, Katoh N, Yamada S, Ono Y, Takeuchi N, Matsuura O, Ohshima S : Kidney Transplantation From Older (≥ 55 years) Donors: A Risk Factor for Graft Survival. *Transplant Proc.* 28(3):1589-1590. 1996.

＜ 和文論文 ＞

1. 大島伸一, 津村芳雄: 尿路感染症に対する Gentamicin の使用経験. *臨床と研究.* 48(12):3238-3240. 1971.
2. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 杉山敏, 加藤信夫, 松田真佐男, 絹川常郎, 下地敏雄, 伊藤勝基, 岩月舜三郎: 生体腎移植後の肝機能障害について. *移植.* 12(3):118-123. 1977.
3. 小野佳成, 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 下地敏雄, 杉山敏, 加藤信夫, 伊藤勝基, 岩月舜三郎: 腎移植後 Pneumocystis Carinii Pneumonia の 1 治験例. *移植.* 12(4):156-162. 1977.
4. 小野佳成, 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 絹川常郎, 杉山敏, 伊藤勝基, 岩月舜三郎, 下地敏雄: 白血球凝集反応による拒絶反応診断の意義—基礎的研究—. *移植.* 13(1):22-25. 1978.
5. 小野佳成, 大島伸一, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 藤田民夫, 浅野晴好: 腎移植後早期にみられた Irreversible Rejection の 4 例. *移植.* 14(5):250-255. 1979.

6. 大島伸一, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 藤田民夫, 浅野晴好, 水谷宣美, 伊藤勝基:腎移植後の肺に発生した細網肉腫の1例—臨床像を中心に—. 移植. 14(6):305-309. 1979.
7. 伊藤元, 大島伸一, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 藤田民夫, 浅野晴好, 伊藤勝基:腎移植後の肺に発生した細網肉腫の1例—組織学的所見を中心に—. 移植. 14(6):310-312. 1979.
8. 小野佳成, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 大島伸一, 下地敏雄, 三矢英輔:Ureterocalicostomyの経験. 日本泌尿器科学会雑誌. 70(6):720-726. 1979.
9. 藤田民夫, 名出頼男, 大島伸一, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治:排尿障害患者に対するPhenoxybenzamineの使用経験. 泌尿器科紀要. 25(1):107-119. 1979.
10. 小野佳成, 大島伸一:腎移植におけるALGの臨床的検討. 移植. 15(1):32-36. 1980.
11. 小野佳成, 平林聡, 絹川常郎, 大島伸一, 藤田民夫, 小出幸夫:長期移植腎生着患者におけるNatural Cell-Mediated Cytotoxicity. 移植. 15(4):197-203. 1980.
12. 斎藤泰, 近藤厚, 石川義昭, 山本実, 田口喜雄, 三浦一章, 岩崎洋治, 中村宏, 大坪修, 稲生綱政, 大島伸一, 小野佳成, 高木弘, 橋本勇, 岡隆宏, 宮崎重, 佐川史郎, 園田孝夫, 土肥雪彦, 許斐康熙, 山本裕士:腎移植における抗ヒト・リンパ球グロブリン(AHLBULIN)使用症例の検討. 移植. 15(5):265-281. 1980.
13. 稲垣豊, 寺町教司, 藤田民夫, 大島伸一, 天野泉:臓器静脈用ダブルバルーンカテーテルの応用—死体腎移植—. 人工臓器. 9(2):359-362. 1980.
14. 大島伸一, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 藤田民夫, 浅野晴好, 下地敏雄, 三矢英輔:体外腎手術による腎結石の治療. 日本泌尿器科学会雑誌. 71(4):344-351. 1980.
15. 絹川常郎, 小野佳成, 梅田俊一, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 名出頼男:腎移植と抗Bリンパ球抗体(その1)—移植前血清と予後について—. 日本泌尿器科学会雑誌. 71(6):607-613. 1980.
16. 小野佳成, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 大島伸一, 下地敏雄, 三矢英輔:上部尿路再建のための自家腎移植術の経験. 日本泌尿器科学会雑誌. 71(7):732-740. 1980.
17. 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 大島伸一, 三矢英輔:腎外傷後の腎結石:体外腎手術による治験例. 泌尿器科紀要. 26(2):187-193. 1980.
18. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 梅田俊一, 下地敏雄, 三矢英輔:体外腎手術による腎内動静脈瘻の治療. 泌尿器科紀要. 26(6):651-656. 1980.
19. 小川洋史, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 平林聡, 梅田俊一, 大島伸一, 下地敏雄, 三矢英輔, 平林紀男:自家腎移植術により腎保存を行なった限局性尿管アミロイドーシスの治療経験. 泌尿器科紀要. 26(9):1125-1130. 1980.
20. 松浦治, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好:複数動脈の腎移植. 移植. 16(1):53-59. 1981.
21. 藤田民夫, 浅野晴好, 柳岡正範, 玉井秀亀, 森口隆一郎, 置塩則彦, 名出頼男, 神野哲夫, 佐野公彦, 四宮陽一, 宮田隆夫, 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 打田和治, 富永芳博, 山田宣夫:死体腎摘出術6例の経験—Evisceration Techniqueについて—. 移植. 16(1):60-66. 1981.
22. 平林聡, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 小川洋史, 大島伸一, 水谷宣美, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一:腎移植後の肺結核症—2症例の経験—. 移植. 16(2):73-79. 1981.
23. 藤田民夫, 浅野晴好, 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一, 今川卓一郎, 天野泉, 杉山敏, 富田明夫:慢性血液透析患者における二次性副甲状腺機能亢進症に対する副甲状腺垂全摘除術12例の経験. 日本泌尿器科学会雑誌. 72(1):98-107. 1981.
24. 藤田民夫, 浅野晴好, 玉井秀亀, 柳岡正範, 森口隆一郎, 置塩則彦, 名出頼男, 小野佳成, 絹川常郎, 大島伸一, 稲垣豊:Double Balloon Catheterによる死体内局所的腎灌流法の実験的観察及び臨床応用. 日本泌尿器科学会雑誌. 72(4):452-459. 1981.
25. 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 大島伸一, 三矢英輔:腎結石に対する腎保存手術の検討. 泌尿器科紀要. 27(2):135-140. 1981.
26. 竹内宣久, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 大島伸一, 三矢英輔:Adenine Phosphoribosyltransferase部分欠損症による2,8-Dihydroxyadenine腎結石の1例. 泌尿器科紀要. 27(9):1079-1086. 1981.

27. 絹川常郎, 小野佳成, 松浦治, 平林聡, 梅田俊一, 浅野晴好, 藤田民夫, 大島伸一: 両側同時腎摘した両側性腎癌の1例. 泌尿器科紀要. 27(11):1361-1366. 1981.
28. 美濃和茂, 伊東重光, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 大島伸一, 都築一夫: 小児腎移植11例の検討. 移植. 17(1):20-24. 1982.
29. 岩城裕一, 堀見忠司, Terasaki PI, 高橋寿, 石崎允, 岡崎肇, 関野宏, 東間紘, 高橋公太, 太田和夫, 山内潤, 大坪修, 稲生綱政, 渡久地政夫, 宮本克彦, 小崎正巳, 阪上賢一, 折田薫三, 打田和治, 山田宣夫, 高木弘, 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一, Yoshihara E, Schulman B, Smith R: 米国より輸送された腎臓による屍体腎移植30例の検討 第1報—腎臓の輸送システムと腎提供者に関する分析—. 移植. 17(2):138-141. 1982.
30. 絹川常郎, 岩城裕一, Terasaki PI, 高橋寿, 石崎允, 岡崎肇, 関野宏, 高橋公太, 東間紘, 太田和夫, 山内潤, 大坪修, 稲生綱政, 渡久地政夫, 宮本克彦, 小崎正巳, 堀見忠司, 阪上賢一, 折田薫三, 山田宣夫, 打田和治, 高木弘, 松浦治, 小野佳成, 大島伸一, 田島惇, 藤田公生, 阿曾佳郎, 有馬正明, 佐川史郎, 園田孝夫: 米国より輸送された腎臓による死体腎移植42例の検討 第2報—単純冷却腎保存法に関する分析—. 移植. 17(4):270-274. 1982.
31. 小野佳成, 平林聡, 絹川常郎, 松浦治, 大島伸一, 小出幸夫: 腎移植後早期患者の Natural Cell-Mediated Cytotoxicity 活性. 移植. 17(5):347-351. 1982.
32. 稲垣豊, 大島伸一, 藤田民夫: 死体内腎灌流用 4-Lumen, Double-Balloon Catheter の開発. 移植. 17(6):425-433. 1982.
33. 大島伸一, 小野佳成, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 服部良平, 杉山敏, 絹川常郎: 腎移植患者における Bredinin の臨床的検討. 移植. 17 Supple:709-715. 1982.
34. 川井博, 大島伸一, Cisplatin 泌尿器科領域共同研究グループ: Cis-diamminedichloroplatinum(II) の泌尿生殖器腫瘍に対する Phase II Study. 癌と化学療法. 9(3):433-442. 1982.
35. 美濃和茂, 都築一夫, 田邊穰, 野口弘道, 上田典司, 伊東重光, 小野佳成, 絹川常郎, 大島伸一: Renal-Retinal Dysplasia を疑った腎移植の1女児例. 小児腎不全研究会誌. 2:80-82. 1982.
36. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 大島伸一, 梅田俊一, 藤田民夫, 浅野晴好: 死体腎移植における移植後早期の管理方法の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 73(5):577-583. 1982.
37. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 梅田俊一, 大島伸一: 前立腺癌に対するペプロマイシンの臨床的検討. 泌尿器科紀要. 28(1):49-56. 1982.
38. 大倉誉暢, 五島一征, 渡辺有三, 松尾清一, 打田和治, 吉田篤博, 高木弘, 大島伸一, 両角国男: 腎移植患者の尿中酵素排泄値について—第1報—. 移植. 18(1):6-13. 1983.
39. 小野佳成, 大島伸一: Cyclosporin A の副作用. 移植. 18(3):218-226. 1983.
40. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 服部良平, 杉山敏, 加納忠行: 腎移植における Pretreatment としての胸管ドレナージ法の検討. 移植. 18(6):484-492. 1983.
41. 小野佳成, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 平林聡, 杉山敏: 腎移植における Pretreatment としての胸管ドレナージ法の免疫学的検討. 移植. 18(6):520-526. 1983.
42. 加納忠行, 大島伸一, 小野佳成, 打田和治, 藤田民夫, 高木弘: 腎移植における胸管ドレナージ—長期胸管ドレナージの術式, 術後管理および合併症—. 移植. 18(6):538-543. 1983.
43. 稲垣豊, 山下喜弘, 大島伸一, 藤田民夫: 死体内腎補助冷却用 Balloon Catheter の開発. 人工臓器. 12(2):507-510. 1983.
44. 稲垣豊, 大島伸一, 藤田民夫: 死体内腎灌流用 4 Lumen および 5 Lumen, Double-Balloon Catheter の開発. 人工臓器. 12(2):511-516. 1983.
45. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治: Cefmetazole の前立腺組織内移行について. 西日本泌尿器科. 45(4):915-919. 1983.
46. 小野佳成, 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 名出頼男, 鈴木和雄, 阿曾佳郎, 有吉寛, 福島雅典, 太田和雄: ヒトリンパ芽球インターフェロン (HLBI) の腎細胞癌への効果. 日本癌治療学会誌. 18(4):962-968. 1983.
47. 今川卓一郎, 大島伸一, 天野泉, 杉山敏, 藤田民夫, 富田明夫: 慢性腎不全における二次性副甲状腺機能亢進症の対策—ことに副甲状腺摘出について—. 日本内科学会雑誌. 72(12):1720-1730. 1983.

48. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 杉山敏: 生体腎移植 50 例の検討—生存率の向上について—. 日本泌尿器科学会雑誌. 74(5): 765-769. 1983.
49. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 梅田俊一, 大島伸一: 腎結石症に対する体外腎手術の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 74(5):834-839. 1983.
50. 絹川常郎, 大島伸一, 小野佳成, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 小川洋史, 服部良平: 腎移植と抗リンパ球抗体 第 2 報 移植後出現する抗体と急性拒絶反応の関係について. 日本泌尿器科学会雑誌. 74(7): 1179-1185. 1983.
51. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 服部良平, 大島伸一: 上部尿路再建手術としての自家腎移植術の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 74(10):1784-1788. 1983.
52. 服部良平, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 花井俊典, 大島伸一: 原発性膀胱腺癌の 1 例. 泌尿器科紀要. 29(5):593-598. 1983.
53. 藤田民夫, 浅野晴好, 名出頼男, 大島伸一, 三矢英輔: 生体同種腎移植における術後早期の補液管理. 泌尿器科紀要. 29(6):615-633. 1983.
54. 都築一夫, 美濃和茂, 伊東重光, 小野佳成, 大島伸一: インターフェロンが奏効した腎移植後の非 A 非 B 肝炎の 1 小児例. 移植. 19(3):211-214. 1984.
55. 美濃和茂, 都築一夫, 伊東重光, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 大島伸一, 加藤信夫: 腎移植後に悪性黒色腫を合併した 1 男児例. 移植. 19(4):259-264. 1984.
56. 都築一夫, 美濃和茂, 伊東重光, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 大島伸一: 無脳児をドナーとした小児腎移植の 1 例. 小児科臨床. 37(6):1233-1236. 1984.
57. 美濃和茂, 都築一夫, 伊東重光, 小野佳成, 大島伸一: 小児腎移植例における FE_{Na} の検討. 小児腎不全研究会誌. 4:86-89. 1984.
58. 稲垣豊, 大島伸一, 藤田民夫, 池田隆, 笠原正孝: Balloon catheter を用いた死体内臓器灌流における各種臓器の冷却効率の比較検討と腎の代用温度モニター. 人工臓器. 13(2):815-819. 1984.
59. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平: 腎結石に対する体外手術の適応について. 泌尿器科紀要. 30(11):1551-1555. 1984.
60. Japan CTS: 雨宮浩, 園田孝夫, 永野俊介, 平野哲夫, 山本実, 中村宏, 深尾立, 落合武徳, 大森耕一郎, 大坪修, 小崎正巳, 太田和夫, 葛原敬八郎, 渡部浩二, 佐藤威, 津川龍三, 阿曾佳郎, 大島伸一, 岡隆宏, 栗田孝, 松浦健, 阪上賢一, 土肥雪彦, 福田康彦, 宮本直明, 進道和彦, Opelz G: 腎移植に関する国際共同研究報告—Collaborative Transplant Study (9th International Histocompatibility Workshop)—. 移植. 20(3):241-246. 1985.
61. 都築一夫, 美濃和茂, 浅井俊行, 伊東重光, 小野佳成, 大島伸一: 小児腎移植におけるシクロスポリンの使用経験. 移植. 20 Supple:433-438. 1985.
62. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 大島伸一, 杉山敏: Ciclosporin 腎毒性の臨床的検討—腎移植患者における尿中 FDP の推移—. 移植. 20 Supple:468-471. 1985.
63. 阿曾佳郎, 大島伸一, 三矢英輔, 小幡浩司, 他: 共同研究による Etoposide (NK171) の尿路性器悪性腫瘍に対する Phase II Study. 癌の臨床. 31(8):944-952. 1985.
64. 美濃和茂, 都築一夫, 伊東重光, 天野泉, 小野佳成, 大島伸一: 小児慢性血液透析における内シャントの検討. 小児腎不全研究会誌. 5:92-94. 1985.
65. 鈴木和雄, 田島惇, 阿曾佳郎, 小野佳成, 大島伸一, 藤田民夫, 名出頼男, 有吉寛, 福島雅典, 太田和雄: CDDP 腎毒性に関する臨床的検討—年令別および尿路変更の有無による比較—. 日本癌治療学会誌. 20(4):752-757. 1985.
66. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 服部良平, 大島伸一: 腎移植における Pretreatment としての胸管ドレナージ法の検討: Low Dose Steroid 療法の試み. 日本泌尿器科学会雑誌. 76(5):695-699. 1985.
67. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 平林聡: 生体腎移植における Pretreatment としての胸管ドレナージ法の効果. 日本泌尿器科学会雑誌. 76(5):710-715. 1985.
68. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 平林聡, 杉山敏: 生体腎移植 104 例の検討—移植腎生着率の向上について—. 日本泌尿器科学会雑誌. 76(12):1824-1829. 1985.

69. 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 竹内宣久, 服部良平, 大島伸一: 腎結石に対する腎保存手術の検討—その2—. 泌尿器科紀要. 31(4):579-583. 1985.
70. 小野佳成, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平: 単腎症例における珊瑚状結石に対する腎保存手術について. 泌尿器科紀要. 31(8):1407-1411. 1985.
71. 都築一夫, 美濃和茂, 田辺穰, 野口弘道, 露木ますみ, 田中宏, 浅井俊行, 伊東重光, 大島伸一: 腎移植後の女兒にみられた尿細管性アシドーシスと低K血症性四肢麻痺. 臨床水電解質. 3(2):175-181. 1985.
72. 竹内宣久, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 服部良平, 長谷川総一郎, 大島伸一, 杉山敏, 西脇敬祐, 國島和夫, 陶山元一: 生体腎移植後の肺扁平上皮癌の1例. 移植. 21(3):245-249. 1986.
73. 小野佳成, 大島伸一, 藤田民夫, 名出頼男, 鈴木和雄, 阿曾佳郎, 福島雅典, 太田和雄: 尿路移行上皮癌に対する Cis-platinum, Peplomycin, Adriamycin による3剤併用療法の試み. 日本癌治療学会誌. 21(1):28-33. 1986.
74. 杉山敏, 山本富男, 露木幹人, 大島伸一: 移植腎 IgA 腎症の検討—移植腎1時間生検に見られる Mesangial IgA Deposits の経時的変化—. 日本腎臓学会誌. 18(6):729-737. 1986.
75. 大島伸一, 川原弘久: 生体腎の売買について 今こそ不可能のあかしを—生体腎売買の不合理性—. 日本透析学会誌. 1(3):161-163. 1986.
76. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平: 自家腎移植による Urinary Undiversion の1例—固有腎の尿管と移植腎の腎盂との吻合による尿路再建例—. 日本泌尿器科学会雑誌. 77(9):1524-1527. 1986.
77. 竹内宣久, 絹川常郎, 松浦治, 服部良平, 長谷川総一郎, 大島伸一, 小野佳成: Latamoxef (LMOX), Cefoperazone (CPZ), Cefotaxime (CTX) の前立腺移行についての検討. 泌尿器科紀要. 32(12):1831-1841. 1986.
78. 長谷川総一郎, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 杉山敏, 小野佳成: 小児腎を使用した死体腎移植の2例—移植腎の肥大と機能—. 移植. 22(2):143-149. 1987.
79. 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 大島伸一, 松田真佐男, 井垣啓, 小野佳成: 死体腎移植後に発症した移植腎動脈瘤の1例. 移植. 22(3):167-172. 1987.
80. 長谷川総一郎, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 杉山敏, 小野佳成: スルファメトキサゾール・トリメトプリム合剤とシクロスポリンによる移植腎機能障害. 移植. 22(6):672-678. 1987.
81. 都築一夫, 大島伸一: 小児腎移植における Cyclosporin の使用経験. 腎と透析. 22(2):207-214. 1987.
82. 松浦治, 絹川常郎, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 大島伸一, 小野佳成, 平林聡: Pretreatment としての胸管ドレナージ法 (TDD) の免疫学的検討 MLR と MLR 抑制能. 日本泌尿器科学会雑誌. 78(4):579-585. 1987.
83. 服部良平, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 長谷川総一郎, 大島伸一, 小野佳成: 無症候性顕微鏡的血尿の臨床的意味—第1報—. 日本泌尿器科学会雑誌. 78(6):1045-1050. 1987.
84. 小野佳成, 平林聡, 山田伸, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 加藤範夫, 杉山寿一, 渡辺丈治: 経尿道的尿管結石除去術の検討—第1報—. 日本泌尿器科学会雑誌. 78(11):1917-1922. 1987.
85. 小野佳成, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平: Descent of Right Renal Vein 法により尿路再建を施行した1治験例. 泌尿器科紀要. 33(1):31-33. 1987.
86. 長谷川総一郎, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 大島伸一, 小野佳成, 村上栄: 後部尿道に発生した Inverted Papilloma の1例. 泌尿器科紀要. 33(1):91-95. 1987.
87. 平林聡, 小野佳成, 大島伸一: 腎移植患者における Natural Cell-Mediated Cytotoxicity の検討. 泌尿器科紀要. 33(4):501-507. 1987.
88. 大島伸一, 太田裕祥: 愛知県に於ける死体腎移植. 日本透析医会雑誌. 3(1):14-21. 1988.
89. 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 小野佳成, 平林聡, 山田伸, 藤田民夫, 松井基治: 経皮的腎尿管結石破碎除去術の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 79(5):864-867. 1988.
90. 服部良平, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 長谷川総一郎, 大島伸一, 小野佳成, 三宅弘治: 尿路悪性腫瘍における顕微鏡的血尿の意味. 日本泌尿器科学会雑誌. 79(8):1393-1398. 1988.

91. 長谷川総一郎, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 大島伸一, 梅田俊一, 平林聡, 小野佳成, 浅野晴好, 藤田民夫: 腎静脈の形態の多様性について—生体腎移植のドナー97例における検討—. 日本泌尿器科学会雑誌. 79(8):1458-1462. 1988.
92. 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 大島伸一, 平林聡, 山田伸, 小野佳成: 電気水圧衝撃波による上部尿路結石破砕手術の経験. 泌尿器科紀要. 34(5):777-781. 1988.
93. 絹川常郎, 大島伸一, 小野佳成, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 杉山敏, 都築一夫: 腎移植5年以上経過例の現況と問題点—合併症と社会復帰—. 移植. 24(4):344-350. 1989.
94. 伊藤克己, 川口洋, 川村猛, 星長清隆, 長谷川昭, 酒井糾, 大島伸一, 都築一夫: 小児腎移植後の急性拒絶反応に対する Muromonab CD3 の治療効果. 小児科臨床. 42(7):1551-1560. 1989.
95. 大島伸一: 死体腎提供に関する問題点. 腎移植・血管外科. 1(1):47-53. 1989.
96. 山田伸, 渡辺丈治, 上平修, 小野佳成, 大島伸一, 中野洋二郎, 三宅弘治: 死体腎移植27例の検討. 腎移植・血管外科. 1(2):126-131. 1989.
97. 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 橋本純一, 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 服部良平, 平林聡: 生体腎移植における胸管ドレナージ. 腎移植・血管外科. 1(2):132-139. 1989.
98. 服部良平, 松浦治, 竹内宣久, 橋本純一, 大島伸一: 移植腎への経皮的腎瘻造設後の動脈瘤に対する超選択的動脈塞栓術の経験. 腎移植・血管外科. 1(2):158-162. 1989.
99. 太田和夫, 園田孝夫, 高木弘, 大島伸一, 他: 腎移植後の急性拒絶反応に対する Muromonab CD3 の治療効果—多施設第II相試験—. 腎と透析. 27(1):143-156. 1989.
100. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 小野佳成, 平林聡, 山田伸, 加藤範夫, 杉山寿一: 自家腎移植術—53例の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 80(3):337-342. 1989.
101. 小野佳成, 渡辺丈治, 山田伸, 平林聡, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 絹川常郎: 上部尿路閉塞性病変に対する尿路再建術の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 80(9):1321-1326. 1989.
102. 浅野晴好, 日比秀夫, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 藤田民夫, 松井基治, 小野佳成, 平林聡, 山田伸: クラミジア性尿道炎の治療—オフロキサシンの臨床効果の検討. 泌尿器科紀要. 35(1):191-197. 1989.
103. 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 橋本純一, 瀬川昭夫: Iohexol の尿路造影における至適用量の検討. 泌尿器科紀要. 35(8):1457-1462. 1989.
104. 長谷川総一郎, 大島伸一: 腎静脈の形態の多様性について. 泌尿器外科. 2(7):707-712. 1989.
105. 岡崎嘉樹, 桜内靖浩, 露木幹人, 杉山敏, 竹内宣久, 松浦治, 大島伸一, 山本富男, 服部良平, 長谷川総一郎: シクロスポリン治療中の腎移植患者に発生した hemolytic uremic syndrome の1例. 移植. 25(2):216-221. 1990.
106. 竹内宣久, 松浦治, 田中國晃, 橋本純一, 大島伸一, 杉山敏, 服部良平: 二次腎移植後, 上腸間膜動脈血栓症によって死亡した1例. 移植. 25(4):406-410. 1990.
107. 都築一夫, 大島伸一: シクロスポリンと小児腎移植. 小児腎不全研究会誌. 10:28-33. 1990.
108. 大島伸一: 生体腎提供者の腎摘出術. 腎移植・血管外科. 2(1):38-43. 1990.
109. 竹内宣久, 松浦治, 田中國晃, 橋本純一, 三嶋敦, 大島伸一, 杉山敏, 露木幹人: 移植腎腎盂—自己尿管吻合術後, 自己腎に著名な水腎症と膿腎を来した1例. 腎移植・血管外科. 2(1):89-93. 1990.
110. 絹川常郎, 服部良平, 古川淳, 山本富男, 原英, 小野佳成, 藤田民夫, 大島伸一: 死体腎移植10例の経験. 腎移植・血管外科. 2(2):180-184. 1990.
111. 三嶋敦, 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 橋本純一, 大島伸一: CAPD カテーテルを留置したまま管理した死体腎移植の1例. 腎移植・血管外科. 2(2):201-204. 1990.
112. 小野佳成, 平林聡, 山田伸, 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平: 生体腎移植における Pretreatment としての 胸管ドレナージ法の検討: 少量ステロイドとアザチオプリン免疫抑制療法の長期成績. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(2):221-224. 1990.
113. 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 橋本純一, 小野佳成, 渡辺丈治, 山田伸, 上平修, 平林聡, 花井俊典: 生体血縁腎移植における胸管ドレナージによる前治療及び少量シクロスポリンと少量ステロイド免疫抑制療法—速報—. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(2):225-229. 1990.

114. 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 橋本純一, 大島伸一, 田中國晃, 三宅弘治: MPL-9000 による尿路結石の治療経験. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(2):236-242. 1990.
115. 服部良平, 松浦治, 竹内宣久, 橋本純一, 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 三宅弘治: 膀胱腫瘍における顕微鏡的血尿の意味. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(3):414-419. 1990.
116. 藤田民夫, 名出頼男, 大島伸一, 小野佳成, 鈴木和雄, 田島惇, 浅野晴好, 太田和雄, 福島雅典, 阿曾佳郎: 進行性前立腺癌に対する Cisplatin, Peplomycin, Adriamycin の三剤併用の臨床的効果. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(8):1225-1231. 1990.
117. 小野佳成, 渡辺丈治, 山田伸, 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 橋本純一, 大島伸一: 上部尿路閉塞性病変に対する経皮的内視鏡手術の試み. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(8):1247-1250. 1990.
118. 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 橋本純一, 杉山敏, 藤田民夫, 松井基治, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸, 平林聡, 絹川常郎, 服部良平: 死体腎移植 144 例の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 81(11):1694-1699. 1990.
119. 絹川常郎, 服部良平, 古川亨, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 橋本純一, 小野佳成, 渡辺丈治, 山田伸, 上平修, 藤田民夫, 松井基治, 平林聡, 花井俊典: HLBI による尖圭コンジロームの治療経験. 泌尿器科紀要. 36(11):1295-1300. 1990.
120. 橋本純一, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 長谷川総一郎, 大島伸一: 透析患者に発生した精巣腫瘍の 1 例. 泌尿器科紀要. 36(12):1475-1477. 1990.
121. 吉川哲史, 中島俊彦, 須賀定雄, 浅野喜造, 矢崎雄彦, 小野佳成, 藤田民夫, 平林聡, 絹川常郎, 加藤範夫, 都築一夫, 杉山敏, 大島伸一: 腎移植時における Human Herpesvirus-6 感染の血清ウイルス学的検討. 移植. 26(4):375-383. 1991.
122. 山田伸, 小野佳成, 佐橋正文, 上平修, 水谷一夫, 黒川孝志, 藤田民夫, 大島伸一: 死体腎移植 37 例の検討—生着率に關与する因子の検討—. 腎移植・血管外科. 3(1):30-35. 1991.
123. 竹内宣久, 松浦治, 田中國晃, 栗木修, 橋本好正, 大島伸一, 都築一夫, 奥村直哉, 松島正氣: 1 歳 5 ヶ月男子の腎血管性高血圧症に対する自家腎移植術の経験. 腎移植・血管外科. 3(1):78-83. 1991.
124. 藤田民夫, 西山直樹, 平林聡, 松井基治, 名出頼男, 星長清隆, 篠田正幸, 大島伸一, 松浦治, 小野佳成, 絹川常郎, 加藤範夫: 死体腎移植における提供腎虚血時間の分類の試みとその臨床的検討. 腎移植・血管外科. 3(2):149-153. 1991.
125. 小野佳成, 佐橋正文, 渡辺丈治, 山田伸, 上平修, 平林聡, 中野洋二郎, 三宅弘治, 大島伸一: 珊瑚状結石に対する体外衝撃波破碎術単独療法 治療成績及び適応の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 82(3):433-438. 1991.
126. 服部良平, 松浦治, 竹内宣久, 橋本純一, 大島伸一, 小野佳成, 山田伸, 絹川常郎, 三宅弘治: 無症候性顕微鏡的血尿症例に対する膀胱鏡検査の意義. 日本泌尿器科学会雑誌. 82(5):810-815. 1991.
127. 小野佳成, 山田伸, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久: シクロスポリンの体内分布の検討—リンパ系組織への分布—. 泌尿器科紀要. 37(10):1169-1171. 1991.
128. 須賀定雄, 中島俊彦, 吉川哲史, 浅野喜造, 矢崎雄彦, 安藤忠司, 小野耕一, 福田稔, 小島勢二, 松山孝治, 小野佳成, 都築一夫, 大島伸一: Human Herpesvirus-6 初感染, 再活性化時の中和抗体反応の検討. 臨床と微生物. 18(3):365-373. 1991.
129. 都築一夫, 岡田雅子, 野口弘道, 露木ますみ, 中村郁哉, 河野修二, 伊東重光, 大島伸一, 松浦治, 水野勢二, 美濃和茂: 移植腎喪失後の女兒に発症した再生不良性貧血. 小児腎不全研究会誌. 12:152-154. 1992.
130. 絹川常郎, 大島伸一, 小野佳成, 佐橋正文, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平: 胸管ドレナージ施行患者の急性拒絶反応に關する検討. 腎移植・血管外科. 4(1):25-32. 1992.
131. 田中國晃, 松浦治, 竹内宣久, 栗木修, 橋本好正, 大島伸一, 都築一夫: 術後, 循環不全をきたした小児生体腎移植の 1 例. 腎移植・血管外科. 4(1):95-99. 1992.
132. 竹内宣久, 大島伸一, 小野佳成: 小児腎移植の術前・術中・術後管理. 腎移植・血管外科. 4(2):125-132. 1992.
133. 黒川孝志, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸, 上平修, 水谷一夫, 大島伸一: 脾動脈を用いた腎血行再建の 1 例. 腎移植・血管外科. 4(2):180-184. 1992.
134. 岡崎嘉樹, 露木幹人, 杉山敏, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 栗木修, 橋本好正: 移植早期より間質に著しい線維化を認めた 1 例. 腎と透析. 33(6):1107-1108. 1992.

135. 水谷一夫, 佐橋正文, 山田伸, 小野佳成, 大島伸一: 外傷性腎動静脈瘻の1例. 日本泌尿器科学会雑誌. 83(1):102-105. 1992.
136. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 加藤範夫, 佐橋正文, 松浦治, 藤田民夫: 死体腎移植におけるDonor腎摘出術の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 83(2):225-229. 1992.
137. 小野佳成, 佐橋正文, 末永裕之, 大島伸一: Laparoscopic Nephrectomyの試み. 日本泌尿器科学会雑誌. 83(3):390-394. 1992.
138. 後藤百万, 吉川羊子, 大島伸一, 松浦治, 小野佳成, 佐橋正文, 絹川常郎, 小林峰生, 榊原敏文, 岡村菊夫, 近藤厚生, 三宅弘治: 根治的膀胱全摘出術後のUrethral Kock Pouch 畜尿・排尿機能の尿流動態学的検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 83(8):1220-1227. 1992.
139. 小野佳成, 絹川常郎, 大島伸一: 経皮的腎盂切開術 新しい術式 Endopyeloureterotomy via Transpelvic Extraureteral Approach の開発. 日本泌尿器科学会雑誌. 83(10):1677-1680. 1992.
140. 上平修, 佐橋正文, 渡辺丈治, 山田伸, 小野佳成, 大島伸一: 停留精巣に発生した精巣腫瘍の1例. 泌尿器科紀要. 38(3):355-358. 1992.
141. 藤田民夫, 大島伸一, 浅野晴好, 小野佳成, 絹川常郎, 加藤範夫, 平林聡: 前立腺肥大症に対するアルファ遮断剤(塩酸ブナゾシン)の臨床効果. 泌尿器科紀要. 38(5):613-621. 1992.
142. 市川靖二, 橋本光男, 藤本宜正, 山崎美保, 木下朋子, 京昌弘, 小角行人, 高原史郎, 松浦治, 佐田正晴, 鈴木盛一, 石橋道男, 福西孝信, 大島伸一, 雨宮浩, 永野俊介, 園田孝夫: 組織適合度と腎移植成績(I) - 血清学的適合度と移植腎生着率 -. 移植. 28(3):296-301. 1993.
143. 市川靖二, 橋本光男, 木下朋子, 野島道生, 藤本宜正, 山崎美保, 京昌弘, 小角行人, 高原史郎, 松浦治, 井原英有, 佐田正晴, 石橋道男, 鈴木盛一, 大島伸一, 福西孝信, 雨宮浩, 永野俊介, 園田孝夫: 組織適合度と腎移植成績(III) - HLA-DRB1と移植腎生着率 -. 移植. 28(3):308-314. 1993.
144. 水谷一夫, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸, 松浦治, 橋本好正, 大島伸一: 急性腎不全のドナーからの死体腎移植例の経験. 移植. 28(3):332-338. 1993.
145. 吉川哲史, 小野佳成, 大島伸一, 小島勢二, 松山孝治, 堀部敬三, 須賀定雄, 浅野喜造: 免疫抑制状態におけるHuman Herpesvirus-6感染. 小児科. 34(4):323-328. 1993.
146. 竹内宣久, 大島伸一, 都築一夫: 尿毒症性心筋症の合併例に対する腎移植. 小児腎不全研究会誌. 13:9-13. 1993.
147. 竹内宣久, 大島伸一, 松浦治, 田中國晃, 栗木修, 橋本好正, 天野泉, 稲垣豊, 加藤俊彦: ACDKの嚢胞破裂による後腹膜腔出血. 腎と透析. 34(別冊 腎不全外科1993):71-72. 1993.
148. 松浦治, 竹内宣久, 田中國晃, 栗木修, 橋本好正, 大島伸一, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸: 複数動脈を有する死体腎に対し血管形成術を施行した17例. 腎移植・血管外科. 5(1):51-57. 1993.
149. 黒川孝志, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸, 上平修, 水谷一夫, 大島伸一: 腎移植の現状と問題点 80歳をドナーとした死体腎移植症例. 腎移植・血管外科. 5(1):58-63. 1993.
150. 黒川孝志, 小野佳成, 加藤範夫, 山田伸, 上平修, 水谷一夫, 佐橋正文, 大島伸一: 免疫抑制剤FK506により溶血性尿毒症性症候群を併発した死体腎移植の1例. 腎移植・血管外科. 5(1):64-67. 1993.
151. 橋本好正, 大島伸一, 小野佳成, 浅野喜造: HHV-6と拒絶反応. 腎移植・血管外科. 5(2):133-138. 1993.
152. 小野佳成, 大島伸一, 藤田民夫, 絹川常郎, 加藤範夫, 佐橋正文, 松浦治: 腎盂尿管腫瘍に対する治療の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 84(4):686-693. 1993.
153. 上平修, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸, 大島伸一: 慢性前立腺炎に対する温熱療法の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 84(6):1095-1098. 1993.
154. 加藤範夫, 杉山寿一, 伊藤正也, 小野佳成, 山田伸, 上平修, 大島伸一: TULにおける尿管口バルーン拡張の有用性についての検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 84(9):1590-1594. 1993.
155. 小野佳成, 加藤範夫, 絹川常郎, 佐橋正文, 松浦治, 平林聡, 山田伸, 大島伸一: Laparoscopic Nephrectomy 初期14例の検討及び腎腫瘍に対する術式. 日本泌尿器科学会雑誌. 84(9):1618-1623. 1993.
156. 絹川常郎, 服部良平, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 藤田民夫, 西山直樹, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸: 死体腎移植後に発生する急性拒絶反応に対するモノクローナル抗体OKT3投与の長期移植成績への影響について. 日本泌尿器科学会雑誌. 84(10):1851-1856. 1993.

157. 西山直樹, 藤田民夫, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 小野佳成, 加藤範夫, 山田伸, 絹川常郎, 服部良平, 佐橋正文: 死体腎移植における高齢者ドナーの検討. 移植. 29(4):396-402. 1994.
158. 深尾立, 落合武徳, 高橋公太, 遠藤忠雄, 横山逸男, 打田和治, 大島伸一, 石橋道男, 高原史郎, 岩崎洋治, 太田和夫, 高木弘, 園田孝夫: 腎移植における FK506(tacrolimus)の後期第 II 相試験成績. 移植. 29(6):614-631. 1994.
159. 打田和治, 深尾立, 落合武徳, 高橋公太, 遠藤忠雄, 横山逸男, 大島伸一, 石橋道男, 高原史郎, 岩崎洋治, 太田和夫, 高木弘, 園田孝夫: 腎移植における FK506(tacrolimus)の長期投与成績. 移植. 29(6):632-649. 1994.
160. 落合武徳, 深尾立, 高橋公太, 遠藤忠雄, 大島伸一, 横山逸男, 打田和治, 石橋道男, 高原史郎, 岩崎洋治, 太田和夫, 高木弘, 大橋靖雄, 園田孝夫: 腎移植における FK506(tacrolimus)の第 III 相試験成績—シクロスポリンをベースとした既存療法のヒストリカルデータとの比較—. 移植. 29(6):650-681. 1994.
161. 橋本好正, 大島伸一, 松浦治, 小野佳成, 藤田民夫, 絹川常郎, 吉川哲史, 浅野喜造: 腎移植における HHV-6 感染の臨床的検討. 今日の移植. 7(1):55-60. 1994.
162. 長谷川友紀, 前田祐子, 山川和夫, 大島伸一: ドナーカードの現状と自由配付制度についての検討. JATCO NEWS. 13:1-3. 1994.
163. 古川亨, 絹川常郎, 服部良平, 大島伸一: 無尿期に急性拒絶反応をきたした症例の検討. 腎移植・血管外科. 6(1):10-14. 1994.
164. 黒川孝志, 小野佳成, 加藤範夫, 山田伸, 水谷一夫, 新宅一郎, 大島伸一: 外科的治療を施行した腎動静脈奇型の 3 例. 腎移植・血管外科. 6(1):25-30. 1994.
165. 松浦治, 竹内宣久, 栗木修, 上平修, 橋本好正, 大島伸一, 小野佳成: 単腎および対側腎機能低下の腎動脈瘤 3 症例に対する ex vivo による血管形成術の経験. 腎移植・血管外科. 6(1):34-41. 1994.
166. 松浦治, 大島伸一: 外科手術を施行した腎血管性高血圧症 8 例の経験. 腎移植・血管外科. 6(2):125-133. 1994.
167. 竹内宣久, 大島伸一, 松浦治, 栗木修, 上平修, 橋本好正, 杉山敏, 天野泉, 金日成, 小野佳成: 慢性血液透析患者に対する腎摘出術の臨床的検討. 腎と透析. 36(別冊 腎不全外科 1994):68-71. 1994.
168. 藤田民夫, 西山直樹, 松浦治, 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 佐橋正文, 平林聡: 死体腎移植 268 例の経験. 日本外科系連合学会誌. 19(1):55-58. 1994.
169. 絹川常郎, 小野佳成, 加藤範夫, 藤田民夫, 松浦治, 大島伸一: 根治的前立腺全摘を前提とした腹腔鏡下骨盤リンパ節郭清術 19 例の検討. 日本外科系連合学会誌. 19(1):71-75. 1994.
170. 後藤百万, 吉川羊子, 加藤範夫, 小野佳成, 絹川常郎, 佐橋正文, 松浦治, 大島伸一, 近藤厚生, 三宅弘治: 根治的前立腺摘出術後の膀胱尿道機能: 尿流動態学的評価. 日本神経因性膀胱学会誌. 5(1):13-16. 1994.
171. 岡村菊夫, 山田幸隆, 加藤隆範, 三宅弘治, 小野佳成, 山田伸, 大島伸一: 膀胱尿管逆流症に対する三角部形成術: Open Surgery より Endoscopic Surgery へ. 日本泌尿器科学会雑誌. 85(9):1368-1373. 1994.
172. 大島伸一, 藤田民夫, 小野佳成, 加藤範夫, 松浦治, 竹内宣久, 西山直樹, 水谷一夫: 透析導入後の多発性嚢胞腎疾患症例における腎盂腎炎および嚢胞感染, 嚢胞出血の臨床的検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 85(11):1673-1678. 1994.
173. 服部良平, 絹川常郎, 小野佳成, 加藤範夫, 佐橋正文, 山田伸, 水谷一夫, 藤田民夫, 松浦治, 大島伸一: 前立腺癌に対する腹腔鏡下骨盤内リンパ節郭清術の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 85(12):1729-1733. 1994.
174. 杉山敏, 竹内宣久, 松浦治, 大島伸一, 藤田民夫, 小野佳成, 絹川常郎, 伊藤正也: 糖尿病性腎症に対する腎移植例の検討. 今日の移植. 8(6):635-640. 1995.
175. 横井繁明, 小野佳成, 加藤範夫, 武田明久, 山田伸, 水谷一夫, 新宅一郎, 大島伸一: 溶血性貧血を発症した生体腎移植 2 例の検討. 腎移植・血管外科. 7(1):64-68. 1995.
176. 近藤隆夫, 松浦治, 竹内宣久, 上平修, 栗木修, 橋本好正, 大島伸一, 村上榮, 小野佳成: 腎動脈奇形に対しカテーテル動脈塞栓術を施行した 1 例. 腎移植・血管外科. 7(2):162-166. 1995.
177. 竹内宣久, 松浦治, 栗木修, 上平修, 橋本好正, 近藤隆夫, 大島伸一, 杉山敏, 露木幹人, 福田直行: 死体腎移植の臨床的検討—免疫抑制療法の変遷とその成績について—. 腎と透析. 38(別冊 腎不全外科 1995):93-96. 1995.

178. 水谷一夫, 小野佳成, 加藤範夫, 山田伸, 新宅一郎, 竹内宣久, 大島伸一: 精巣腫瘍 StageIIB にて化学療法を施行した透析患者の 1 例. 腎と透析. 38(別冊 腎不全外科 1995):109-110. 1995.
179. 上平修, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久, 栗木修, 橋本好正, 近藤隆夫: 腎摘に及んだ腎生検後の後腹膜血腫の 2 例. 腎と透析. 38(別冊 腎不全外科 1995):111-112. 1995.
180. 都築一夫, 大島伸一: 小児腎移植における長期観察例の問題点 肝障害を中心に. 日本小児腎不全学会誌. 15:42-44. 1995.
181. 本山治, 長谷川昭, 川口洋, 高橋公太, 上山泰淳, 宍戸清一郎, 都築一夫, 大島伸一, 小川修: 小児腎移植の進歩と問題点 小児腎移植後の成長・共同研究中間報告—その 2—. 日本小児腎不全学会誌. 15:50-54. 1995.
182. 小野佳成, 大島伸一, 加藤範夫, 佐橋正文, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 伊藤正也, 山田伸: Endopyeloureterotomy Via a Transpelvic Extraureteral Approach 法の検討. 日本泌尿器科学会雑誌. 86(4):888-893. 1995.
183. 栗木修, 小野佳成, 加藤範夫, 佐橋正文, 絹川常郎, 松浦治, 大島伸一: 膀胱癌に対する根治的膀胱全摘術施行例の検討 骨盤内リンパ節転移の意義. 日本泌尿器科学会雑誌. 86(4):919-926. 1995.
184. 上平修, 小野佳成, 加藤範夫, 山田伸, 水谷一夫, 黒川孝志, 大島伸一: 珊瑚状結石に対する体外衝撃波破碎後の Stone Street 治療. 日本泌尿器科学会雑誌. 86(7):1249-1254. 1995.
185. 絹川常郎, 服部良平, 小野佳成, 加藤範夫, 平林聡, 大島伸一, 松浦治: 腎細胞癌に対する腹腔鏡下根治的腎摘術 10 症例の検討および後腹膜到達法の試み. 日本泌尿器科学会雑誌. 86(11):1625-1630. 1995.
186. 水谷一夫, 小野佳成, 加藤範夫, 武田明久, 山田伸, 絹川常郎, 服部良平, 佐橋正文, 松浦治, 竹内宣久, 大島伸一: 前立腺癌に対する根治的前立腺全摘除術および骨盤内リンパ節廓清術の検討: リンパ節廓清術の意義について. 泌尿器科紀要. 41(11):867-871. 1995.
187. 佐橋正文, 小野佳成, 加藤範夫, 絹川常郎, 大島伸一: Neobladder の適応. 泌尿器科紀要. 41(11):915-919. 1995.
188. 須賀定雄, 浅野喜造, 矢崎雄彦, 星長清隆, 小野佳成, 大島伸一, 石崎徹, 山田明, 今西二郎: 腎移植後の HHV-6, HHV-7 DNA 排泄. 臨床と微生物. 22(2):223-228. 1995.
189. 本山治, 小原武博, 長谷川昭, 川口洋, 高橋公太, 上山泰淳, 宍戸清一郎, 川村猛, 都築一夫, 大島伸一: 小児腎移植における mizoribine 血中濃度の検討. 移植. 31(1):51-59. 1996.
190. 長谷川友紀, 山川和夫, 大島伸一, 若杉長英: 諸外国におけるドナーカード利用状況. 移植. 31(3):239-244. 1996.
191. 服部良平, 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 平林聡, 山田伸: 移植前に胸管ドレナージ法(TDD)を行った生体腎移植例の長期予後. 今日の移植. 9(5):509-513. 1996.
192. 竹内宣久, 松浦治, 栗木修, 上平修, 橋本好正, 近藤隆夫, 大島伸一, 小野佳成: 移植腎に対する endourology の経験. 腎移植・血管外科. 8(1):32-39. 1996.
193. 水谷一夫, 小野佳成, 加藤範夫, 武田明久, 山田伸, 新宅一郎, 横井繁明, 大島伸一: 高齢者レシピエントの検討. 腎移植・血管外科. 8(1):51-56. 1996.
194. 露木幹人, 坪井直毅, 福田直行, 杉山敏, 松浦治, 竹内宣久, 栗木修, 上平修, 大島伸一: 腎機能の発現がみられなかった死体腎移植例. 腎と透析. 41(3):384-385. 1996.
195. 石川清仁, 名出頼男, 瀬川昭夫, 深津英捷, 大田黒和生, 上田公介, 三宅弘治, 近藤厚生, 岡村菊夫, 大島伸一: 中部地区 13 施設における前立腺炎様症候群に対する診断と治療に関する臨床的サーベイランス. 西日本泌尿器科. 58(4):367-372. 1996.
196. 加藤範夫, 小野佳成, 山田伸, 水谷一夫, 新宅一郎, 大島伸一: 経後腹膜的腹腔鏡下腎摘出術を施行した無機能腎の 2 例. 日本泌尿器科学会雑誌. 87(1):13-17. 1996.
197. 加藤範夫, 小野佳成, 佐橋正文, 絹川常郎, 松浦治, 大島伸一: Hautmann 代用膀胱の臨床的検討. 泌尿器科紀要. 42(6):417-421. 1996.
198. 服部良平, 絹川常郎, 小野佳成, 加藤範夫, 山田伸, 武田明久, 藤田民夫, 西山直樹, 大島伸一, 松浦治, 竹内宣久: 限局性前立腺癌に対す腹腔鏡下骨盤内リンパ節廓清術の意義. 泌尿器科紀要. 42(10):775-780. 1996.

〈 総説 等 〉

1. 大島伸一：腎臓の自家移植。腎と透析。9(2):199-205。1980.
2. 大島伸一：腎移植後の尿路系合併症の対策。腎と透析。11(4):427-433。1981.
3. 大島伸一：新しい手術法：Dismembered Pyelolithotomy。泌尿器科紀要。28(8):1051-1055。1982.
4. 三矢英輔, 大島伸一, 小野佳成：離断腎盂切石術。臨床泌尿器科。36(6):520-522。1982.
5. 大島伸一：腎臓の自家移植—体外腎手術について—。腎と透析。15(3):339-345。1983.
6. 大島伸一：自家腎移植。現代医学。32(1):31-37。1984.
7. 大島伸一：市中病院で十分対応できる移植。モダンメディスン。16(1987年7月):34-39。1987.
8. 大島伸一：腎移植のすべて 腎摘出術(提供腎, 拒絶腎)。臨床透析。3(9):1523-1528。1987.
9. 小野佳成, 大島伸一：高齢者レシピエントの腎移植。腎と透析。25(4):625-629。1988.
10. 水本龍二, 大島伸一：止血手技 その3(腎臓)。手術。43(5):557-563。1989.
11. 大島伸一：腎移植の進歩—死体腎移植—。腎と透析。26(5):865-869。1989.
12. 小野佳成, 大島伸一：“腎・尿管結石”治療の進歩と問題点 治療の進歩とその実際 内視鏡的治療—経皮的方法。治療。71(7):1530-1536。1989.
13. 園田孝夫, 大島伸一, ESWL委員会：Endourology, ESWLによる結石治療の評価基準。日本泌尿器科学会雑誌。80:505-506。1989.
14. 大島伸一：腎移植の世界の現況と将来。泌尿器外科。3(6):687-693。1990.
15. 大島伸一, 小野佳成, 佐橋正文：リンパ節郭清を伴う根治的腎尿管全摘出術。泌尿器外科。3(12):1381-1384。1990.
16. 大島伸一：名古屋地区における腎バンクシステムとその現状。腎移植・血管外科。3(2):116-119。1991.
17. 小野佳成, 大島伸一：泌尿器科における内視鏡手術。現代医学。40(2):11-20。1992.
18. 大島伸一：移植医から透析医への提言。日本透析医会雑誌。7(3):151-154, 164-177。1992.
19. 小野佳成, 佐橋正文, 大島伸一：腹腔鏡下腎摘出術。泌尿器外科。5(2):115-119。1992.
20. 田中國晃, 小野佳成, 大島伸一：衝撃波結石破碎治療 腎及び尿管結石。病態生理。11(1):17-23。1992.
21. 大島伸一：臓器移植医療におけるネットワークシステム。宮城県腎臓協会会報。6:12-17。1993.
22. 大島伸一：愛知県における腎バンクシステム。とらんすぷらんと。23:28-29。1993.
23. 大島伸一：腎移植の現状と問題点。名古屋医学会ニュース。13(1993.5.15):27-28。1993.
24. 小野佳成, 大島伸一：小児におけるEndopyeloureterotomy via Transpelvic Extraureteral Approach。日本小児泌尿器科学会誌。1:70。1993.
25. 大島伸一：泌尿器科領域における最小侵襲手術。ネオスKODAMA USEFUL REPORT。5:6-7。1993.
26. 大島伸一：わが国における臓器移植のネットワークシステム。今日の移植。7(3):209-215。1994.
27. 小野佳成, 大島伸一：腎血管性, 腎性高血圧に対する腹腔鏡下腎摘出術。腎移植・血管外科。6(2):104-110。1994.
28. 加藤範夫, 小野佳成, 大島伸一：前立腺肥大症治療機はどこまで可能か ウロレーズによる治療。新医療。21(9):98-101。1994.
29. 大島伸一, 小野佳成：泌尿器科における腹腔鏡治療の進歩。日本医師会雑誌。112(3):MK 34-36。1994.
30. 大島伸一：社会保険中京病院における腎移植20年の経験。日本泌尿器科学会雑誌。85(1):29-31。1994.
31. 小野佳成, 大島伸一：Laparoscopic Nephrectomy。日本泌尿器科学会雑誌。85(1):78-79。1994.
32. 大島伸一：わが国の献腎移植ネットワークに対する提言。泌尿器外科。7(2):97-101。1994.

33. 小野佳成, 大島伸一: 内視鏡下外科手術の現状と問題点 腎・副腎摘出術. *Medicina*. 31(5):925-929. 1994.
34. 小野佳成, 大島伸一: 小児の泌尿器科診療 治療の実際 Endopyelotomy. *臨床泌尿器科*. 48(4):162-167. 1994.
35. 小野佳成, 大島伸一: 手術治療か非手術治療か 泌尿器疾患. *OPE Nursing*. 10(1):44-48. 1995.
36. 加藤範夫, 小野佳成, 大島伸一: 小牧市民病院での尿路結石に対する ESWL 治療. *新医療*. 22(8):74-76. 1995.
37. 加藤範夫, 小野佳成, 大島伸一: 尿路狭窄, 腫瘍に対する内視鏡治療. *腎と透析*. 38:383-387. 1995.
38. 絹川常郎, 大島伸一: 小児慢性腎不全のすべて 腎移植: 長期管理と合併症-再移植例. *腎と透析*. 38(6):854-859. 1995.
39. 小野佳成, 大島伸一: 多発性嚢胞腎(常染色体優性遺伝)の治療 外科的治療: 腎摘出の適応と方法. *腎と透析*. 38(別冊 腎不全外科1995):54-57. 1995.
40. 松浦治, 大島伸一: エリスロポエチンに関する Q&A; 透析導入前の慢性腎不全 Q3-⑤泌尿器科疾患(水腎症, 多発性嚢胞腎など)を原疾患とする透析前腎不全の特徴と r-HuEPO 治療の留意点は. *Pharma Medica*. 13(8):223. 1995.
41. 杉山敏, 大島伸一: 多発性嚢胞腎. *臨床成人病*. 25(11):1558-1559. 1995.
42. 松浦治, 大島伸一: 泌尿器科病棟マニュアル 術前・術後1週間の患者管理 腎移植術. *臨床泌尿器科*. 49(4):151-156. 1995.
43. 小野佳成, 大島伸一: 骨盤リンパ節廓清術 コメント2. *臨床泌尿器科*. 49(12):945-946. 1995.
44. 大島伸一: 腎移植の現況と展望. *免疫・Immunology Frontier*. 6(3):189-192. 1996.
45. 小野佳成, 大島伸一: 腹腔鏡下根治的腎摘除術. *癌の臨床*. 42(11):1231-1240. 1996.
46. 竹内宣久, 大島伸一, 都築一夫: 尿毒症性心筋症. *小児内科*. 28(12):1839-1843. 1996.
47. 藤田民夫, 大島伸一: 透析スタッフが知っておきたい腎移植のA to Z 拒絶反応の対策は 拒絶反応の種類と対策. *透析ケア*. 冬季増刊:120-131. 1996.

外4編 全51編

〈 鼎談・座談会 等 〉

1. 桑山直人, 白尾由美, 清水康博, 山崎博子, 広瀬光彦, 石原直之, 小倉修, 大島伸一: 「新人類」座談会. *月刊中京*. 10(昭和62年4月1日). 1987.
2. 加納英行, 反橋美保子, 伊東重光, 植村光子, 勝又次夫, 中村盟夫, 川地重幸, 大島伸一: 「旧人類」座談会. *月刊中京*. 10(昭和62年4月1日). 1987.
3. 高橋公太, 落合武徳, 大島伸一, 遠藤忠雄: Ciclosporin をめぐって. *腎と透析*. 22(2):239-253. 1987.
4. 高木弘, 大島伸一, 打田和治, 加納忠行, 平昇, 田中稔, 森本剛史: 臓器移植. *現代医学*. 36(3):469-485. 1989.
5. 大久保通方, 大島伸一, 岡田陽策, 大畑益子, 水谷典子, 溝島幸作, 溝島つたえ, 与那嶺千枝子, 森山早苗, 根本和子, 大津ゆり子, 新家真弓, 豊田信之: 与えられたいのち. 移植者として伝えたいこと(日本移植者協議会 編). はる書房, 東京. 1994. pp.15-101.
6. 平賀聖悟, 大島伸一, 高橋公太, 両角國男, 高原史郎: 移植の今後の展望. *腎臓*. 17(3):95-119. 1995.
7. 大島伸一, 両角國男, 杉山敏, 山崎親雄, 打田和治, 藤田民夫: 腎不全医療のあした-良質で効率のよい医療とは-. *腎と透析*. 38(別冊 腎不全外科1995):61-74. 1995.
8. 高橋公太, 大島伸一, 遠藤忠雄, 川口洋: 免疫抑制法の変遷. *腎と透析*. 39(6):903-916. 1995.
9. 太田和夫, 大島伸一, 菊島レイ子, 竹沢真吾, 土屋隆, 内藤秀宗: 腎不全の総合対策-21世紀に向けて-. *透析ケア*. 2(1):11-39. 1995.
10. 五島雄一郎, 山口豊, 幕内博康, 川島康生, 大島伸一: 老年者の手術(前編). *MEDICAL SCOPE*. 日医ニュース. 802(平成7年2月5日):10-12. 1995.
11. 五島雄一郎, 山口豊, 幕内博康, 川島康生, 大島伸一: 老年者の手術(後編). *MEDICAL SCOPE*. 日医ニュース. 804(平成7年3月5日):10-12. 1995.

12. 野本亀久雄, 岩城裕一, 大島伸一: 日本の移植は今後どうなるか. Question Now. 5(1996年2月):2-7. 1996.
13. 小出桂三, 藤見惺, 大島伸一: 全腎協結成25周年記念公開てい談 日本の腎不全医療四半世紀と今後の課題. 全腎協情報全腎協ブックレット9(全国腎臓病患者連絡協議会 編), 東京. 1996. pp. 0-33. 9月10日

〈 インタビュー 〉

1. 「ズーム・アップ」生体腎移植 健康な人にメスを入れることは医療ではない 今後増え続ける腎不全患者のためにも早急の措置を. メディカル朝日. 51(1991年2月)号. 1991.
2. 「全国移植チーム訪問」社会保険中京病院. とらんすぷらんと. 22:20-23. 1992.
3. 「トーク東海」エイズ事前検査 医療側から問題提起 大島伸一さん 医療従事者の安全が差別解消につながる. 中日新聞. 1994年1月27日朝刊.
4. 「ゆうかんさろん」公正さ問われる臓器の移植手術. 中日新聞. 1994年4月20日夕刊.
5. 「ドクターインタビュー」移植医療にたずさわって 大島伸一さん. 医療事故情報センターニュース. 94(1996年1月1日):1-3. 1996.

〈 論説・エッセー 等 〉

1. 「時代の目」移植医療、もっと真剣な議論を 技術も設備もある日本 助かる人が死んでいる. 毎日新聞. 1990年12月2日朝刊. 1990. p. 7.
2. 「臓器移植のあした6」拒絶反応「5日しか持たなかった」初期の移植腎 今、発症防止に2方法. 毎日新聞. 1991年6月14日夕刊. 1991. (連載 外7編)
3. 「サロン」移植医療のジレンマ. 中日新聞. 1994年8月30日夕刊. (外1編)
4. 苦悩の移植医療浮き彫り 各国と孤立する危険 脳死の診断、周辺に問題. 読売新聞. 1989年10月4日.
5. 「健康いかが」軽症なら薬物療法で 中等度以上は手術を. 読売新聞. 1991年2月25日.
6. 「医事サロン」臓器移植法廃案に「独自の道」. 読売新聞. 1996年10月15日.
7. 昭和53年8月東海腎臓バンク主催—Dr. Terasaki が来名—「腎移植と免疫」に関する講演会開かる. 東海腎臓バンク. 2(1979.3.1):8. 1979. (外3編)
8. 腎移植医者の立場. 財団法人愛知県腎不全対策協会だより. 3(1981.10.1):2-3. 1981. (外2編)
9. 「解説」メスを片手に考える 米国からの空輸腎について. 厚生福祉[時事通信]. 3047(昭和56年12月12日)号:2-5. 1981. (外4編)
10. 「スコープ」我慢の喜び. 厚生福祉[時事通信]. 3535(昭和61年11月22日)号:14. 1986. (連載 外28編)
11. 「学会レポート」第22回日本移植学会 ドナー不足が大きな壁に. モダンメディスン. 15(1986年12月):71. 1986.
12. 腎移植の現状と問題点. 愛知腎臓財団. 14(1988.1.1):6. 1988. (外9編)
13. 日本泌尿器科学会に望む. 日本泌尿器科学会会報. 2(1988年2月1日)号. 1988.
14. 「人物紹介」社会保険中京病院庶務係長 山田茂一さん. 病院のひろば. 1989. 5月
15. 「特別セミナー」社会保険病院にける臓器移植(腎臓). すくえあ. 336:8-11. 1990. 10月
16. 移植推進の主役は患者. 日本移植者協議会会報3号. 1394(平成4年7月25日):1. 1992.
17. 「健康随筆」医療と経営. 社会保険あいち. 271(1993.1):6. 1993. (連載 外31編)
18. 「巻頭言」図書室の悩み. 病院図書室. 14(3):93-94. 1994.
19. 「ドクターによる現場発想の管理ノウハウ」連載1 病院経営の現状を把握し処方せんが書けたら具体的な行動計画を. フェイズ3. 1996年11月号:98-99. 1996. (連載 外1編)
20. 地域の医師はこう考える アンケート結果. とぎ 四十年記念誌. 社会保険中京病院, 名古屋. 1987. pp. 106-107.

21. 盆踊りの夜. 親和. 29(昭和49年8月31日). 1974. (外7編)
22. 看護問題に寄せて(その一). 親和. 30(昭和49年10月31日). 1974. (連載 外3編)
23. 「ちょっとひとこと」医者 of イス、患者 of イス. 月刊中京. 14(昭和62年8月1日). 1987.
(外13編)
24. 太田先生を偲ぶ おやじさんご苦労さま. ひかり. 60(平成3年12月1日)号. 1991. (外1編)
25. 大島先生のあいさつ. 中京病院患者会 Chukyo. 創刊号(平成4年8月9日). 1992.

全135編

〈 特別講演・基調講演 等 〉

1. Thoracic Duct Drainage as Pretreatment of Renal Transplantation. 長庚記念病院. 台北. 1988年12月7日.
2. Present Status of Renal Transplantation in Japan. Global Plenum on Organ Transplantation. Dec. 16, 1990. Lucknow, India.
3. 日本の腎移植の現況. 第1回中国器官移植学会. 武漢. 1991年10月20日.
4. Tokai Genitourinary Oncology Group Overview. Southwest Oncology Group-Japan Clinical Trials Summit. Jan. 20, 1992. Seattle, USA.
5. FK506 の腎移植の臨床応用について. 第2回中国器官移植学会. 武漢. 1993年10月22日.
6. Ohshima S, Fujita T, Ono Y, Kinukawa T: Review of Immunosuppressive Treatment for 287 Primary Cadaveric Transplants Receiving Kidneys from Non-heart Beating Donors. Joint Meeting of INFA (International Faculty of Int. Soc. Artif. Organs) and 3rd WAITS (World Artificial Organ, Immunology and Transplantation Symposium). July 20, 1995. Sapporo, Japan.
7. 腎移植について—移植の臨床成績, 合併症, 予後など. 第18回東海人工透析談話会. 教育講演. 名古屋. 1979年3月10日.
8. 自家腎移植術と体外腎手術. 第127回東海泌尿器科学会. 特別講演. 名古屋. 1980年1月27日.
9. 腎移植後合併症について. 第7回北陸腎疾患懇話会. 特別講演. 金沢. 1981年5月10日.
10. 腎移植について 腎移植の現況と将来. 第2回浜松カンファレンス. 特別講演. 浜松. 1981年7月11日.
11. 腎移植の合併症—その他の合併症—. メディカル・コア第292回最新医療ゼミナール(腎移植とその新しい展開). 講演. 東京. 1981年10月18日.
12. 腎移植の最近の傾向. 愛知県医師会生涯教育講座. 名古屋. 1983年10月17日.
13. 腎移植について. 愛知県医師会教育講座. 名古屋. 1984年2月3日.
14. 最近の性病について. 南区産婦人科医会. 講演. 名古屋. 1984年11月25日.
15. 止血手技 腎臓. 第29回手術手技研究会. 講演. 四日市. 1987年11月28日.
16. 腎移植の進歩 死体腎について. 第10回腎臓セミナー. 講演. 東京. 1988年8月27日.
17. 腎移植・腎血管外科の臨床. 第15回高知泌尿器科オープンカンファレンス. 講演. 高知. 1988年11月25日.
18. 腎移植における胸管ドレナージ. 第4回三重移植研究会. 特別講演. 津. 1988年12月7日.
19. 腎移植について. 名城大学薬学部・薬学部同窓会卒業教育委員会医学講座. 教育講演. 名古屋. 1989年6月18日.
20. 死体腎移植の現況について. 大分県腎移植推進月間大会. 講演. 大分. 1989年10月7日.
21. 生体腎提供者の手術手技: 生体腎摘除. 第4回腎移植・血管外科研究会. 基調講演. 富山. 1989年11月3日.
22. 腎移植の現況について. 鳥取県中部医師会生涯教育講演会. 講演. 倉吉. 1989年11月17日.
23. 体外衝撃波結石破砕療法 MPL9000 の使用経験. 体外衝撃波結石破砕療法講演会. 講演. 広島. 1990年4月25日.

24. 自家腎移植の臨床. 第78回静岡県泌尿器科医会. 特別講演. 静岡. 1990年9月8日.
25. 排尿障害. 南区在宅療養担当者合同会議. 講演. 名古屋. 1992年5月22日.
26. 愛知県の死体腎移植の現状について. 長野県腎移植推進懇話会. 特別講演. 松本. 1992年7月18日.
27. 腎移植について. 豊田記念病院開院5周年記念講演. 講演. 豊田. 1992年9月11日.
28. 愛知県における臓器移植の現状. 第3回徳島臓器移植研究会. 特別講演. 徳島. 1992年10月30日.
29. 死体腎移植の現状とその問題点. 第42回日本泌尿器科学会中部総会. 特別講演. 名古屋. 1992年11月6日.
30. 腎臓移植の現況. 第11回全国アイバンクシンポジウム. 特別講演. 名古屋. 1993年2月26日.
31. 中京病院泌尿器科における腎移植20年の経験. 第81回日本泌尿器科学会総会. 特別講演. 京都. 1993年4月11日.
32. 腎移植の実際. 第1回中部地区血清検査研修会. 講義. 名古屋. 1994年6月11日.
33. 腎移植の現況と課題. 第37回日本腎臓学会. 教育講演. 千葉. 1994年12月16日.
34. 臓器移植医療:腎. 第24回日本医学会総会. 講演. 名古屋. 1995年4月8日.
35. 移植ネットワーク. 第22回東北腎不全研究会. 報告. 仙台. 1995年8月26日.
36. 我国の腎移植の現況と課題. 第30回多摩泌尿器科医会・三多摩腎疾患治療医会 腎・腎移植講演会. 特別講演. 武蔵野. 1995年10月6日.
37. 腎移植における免疫抑制剤の使い方. 第84回日本泌尿器科学会総会. 1996年卒後・生涯教育プログラム講演. 岡山. 1996年4月4日.
38. 腎臓移植について. 福岡生体防御シンポジウム—医療と生存環境の接点を探る—. 講演. 福岡. 1996年4月5日.
39. 最近の腎移植医療の動向について—ネットワークシステムのその後—. 第12回北陸移植研究会. 特別講演. 金沢. 1996年7月6日.
40. 移植医療の実際. 臓器移植の法的事項に関する研究会. 講演. 東京. 1996年12月4日.
41. 腎臓移植ネットワークについて. 第1回静岡県腎移植研究会. 特別講演. 静岡. 1996年12月6日.
42. 免疫抑制剤の過去・現在・未来. サンディミュン発売10周年記念学術講演会. 特別講演. 静岡. 1996年12月20日.

外11回 全53回

〈 シンポジウム・パネルディスカッション 〉

1. Ono Y, Kinukawa T, Ohshima S: New Endourology. Endopyeloureterotomy via Transpelvic Extraureteral Approach. The 3rd World Congress of Videourology. July 15, 1991. Hakone, Japan.
2. Ohshima S: Bladder Tumor, Japanese Cancer Studies Recent Trial Results and Current Studies. Southwest Oncology Group-Japan Clinical Trials Summit. Jan. 21, 1992. Seattle, USA.
3. Ono Y, Ohshima S: The Long-term Results of Thoracic Duct Drainage Pretreatment in Living-related Kidney Transplantation. The 12th World Congress of Therapeutic Plasmapheresis. June 4, 1992. Sapporo, Japan.
4. Ono Y, Ohshima S, Katoh N, Sahasi M, Kinukawa T: Laparoscopic Nephrectomy, Radical Nephrectomy and Adrenalectomy. The 4th World Congress of Endoscopic Surgery. June 18, 1994. Kyoto, Japan.
5. Tanahashi Y, Higashihara E, Mamiya Y, Tashiro K, Shiraiwa K, Ohshima S: The Treatments with Endoscope and ESWL. Consensus Conference. The 4th Congress of Japanese Society of Endourology and ESWL. Nov. 24, 1994. Tokyo, Japan.
6. 大島伸一, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 大野秀作, 藤田民夫, 浅野晴好, 太田裕祥: Effect of Blood Transfusion on the Survival of Renal Allografts. 第5回日本低温医学会. シンポジウム(輸血と腎移植). 名古屋. 1978年8月19日.

7. 大島伸一：上部尿路変更術について。第16回日本社会保険医学会。シンポジウム(尿路管理)。別府。1978年10月22日。
8. 大島伸一：生体腎移植例について。第22回東海人工透析懇話会。シンポジウム(透析から移植)。名古屋。1981年3月7日。
9. 大島伸一：Dismembered Pyelolithotomy。第69回日本泌尿器科学会総会。集中討議(尿結石)。前橋。1981年5月22日。
10. 大島伸一：腎結石に対する体外手術。第69回日本泌尿器科学会総会。集中討議(尿結石)。前橋。1981年5月22日。
11. 小野佳成, 大島伸一, 三矢英輔：Dismembered Pyelolithotomy の適応について。第69回日本泌尿器科学会総会。シンポジウム。前橋。1981年5月22日。
12. 大島伸一：新しい手術方法(Dismembered Pyelolithotomy)。第31回日本泌尿器科学会中部総会。シンポジウム(腎結石に対する腎保存手術の適応と予後)。奈良。1981年11月1日。
13. 大島伸一：Pretreatment としての胸管ドレナージ法。第70回日本泌尿器科学会総会。シンポジウム(腎移植の臨床をめぐる最近の進歩)。弘前。1982年5月13日。
14. 大島伸一：Pretreatment としての胸管ドレナージ法。第18回日本移植学会総会。シンポジウム(腎移植成績に関与する諸因子の比較検討)。福岡。1982年9月11日。
15. 大島伸一：腎結石に対する体外手術の適応について。第33回日本泌尿器科学会総会中部総会。シンポジウム(自家腎移植の適応とその手術成績)。浜松。1983年11月13日。
16. 杉山敏, 大島伸一：内科医よりみた腎移植。第32回日本透析研究会。シンポジウム。東京。1987年7月12日。
17. 絹川常郎, 大島伸一：腎移植5年以上経過症例の現状と問題点—合併症と社会復帰—。第23回日本移植学会。シンポジウム。横浜。1987年9月17日。
18. 大島伸一：死体腎移植の問題。第1回腎移植・血管外科研究会。シンポジウム(腎移植の臨床—死体腎移植について)。盛岡。1988年5月19日。
19. 藤田民夫, 大島伸一：Donor の選択と準備。第3回腎移植・血管外科研究会。シンポジウム(死体腎移植)。大阪。1989年4月20日。
20. C. G. Groth, Barbara Gill, 大塚敏文, 田村晃, 村瀬敏郎, 大島伸一：臓器提供—何が問題か。第25回日本移植学会総会。公開シンポジウム。東京。1989年9月13日。
21. 大島伸一：腎臓移植について。愛腎協結成20周年記念大会。シンポジウム(腎不全の今後は)。名古屋。1989年10月1日。
22. 大島伸一：生体腎提供者の手術手技：生体腎摘除。第4回腎移植・血管外科研究会。シンポジウム。富山。1989年11月3日。
23. 藤田民夫, 大島伸一：慢性腎不全患者の副甲状腺手術および腎移植における C-PTH 測定の意義。第32回日本腎臓病学会総会。シンポジウム。浜松。1989年11月9日。
24. 小野佳成, 大島伸一：Endopyelotomy。第4回日本 Endourology・ESWL 学会総会。パネルディスカッション(尿管鏡の進歩)。東京。1990年11月24日。
25. 大島伸一：移植医から透析医への提言。第4回日本透析医会シンポジウム(腎移植・透析スタッフと移植スタッフの接点)。東京。1991年11月17日。
26. 小野佳成, 大島伸一：Endopyeloureterotomy-Transpelvic Extraureteral Approach。第5回日本 Endourology・ESWL 学会総会。シンポジウム(Endourology の最近の進歩)。金沢。1991年11月29日。
27. 上平修, 小野佳成, 佐橋正文, 山田伸, 大島伸一：移植前処置として TDD を施行した ABO 不適合生体腎移植の経験。第25回日本腎移植臨床研究会。ワークショップ(ABO 不適合・既存抗体陽性例)。大阪。1992年1月23日。
28. 竹内宣久, 松浦治, 田中國晃, 栗木修, 橋本好正, 大島伸一, 杉山敏, 露木幹人：同種腎移植における FK506 の使用経験。第25回日本腎移植臨床研究会。シンポジウム(新しい免疫抑制剤の動向)。大阪。1992年1月24日。
29. 大島伸一：腎移植ネットワークの現状と問題点。第80回日本泌尿器科学会総会。パネルディスカッション(腎移植の現状と将来の在り方)。東京。1992年4月16日。

30. 小野佳成, 大島伸一: PUJ 狭窄治療 内視鏡操作による. 第 80 回日本泌尿器科学会総会. ビデオシンポジウム(最小侵襲手術の適応と限界). 東京. 1992 年 4 月 17 日.
31. 小野佳成, 大島伸一: 小児における Endopyeloureterotomy via Transpelvic Extraureteral Approach の検討. 第 1 回日本小児泌尿器科学会総会. シンポジウム (Endopyelotomy). 名古屋. 1992 年 7 月 10 日.
32. 竹内宣久, 大島伸一, 都築一夫: 尿毒症性心筋症の合併例に対する腎移植. 第 14 回小児腎不全研究会. パネルディスカッション(ハイリスク小児患児の腎移植). 箱根. 1992 年 9 月 11 日.
33. 西山直樹, 藤田民夫, 大島伸一, 松浦治, 小野佳成, 絹川常郎, 平林聡, 加藤範夫, 名出頼男, 星長清隆: 死体腎移植における高齢者 donor の検討 生体腎移植例との比較. 第 28 回日本移植学会総会. ワークショップ. 大阪. 1992 年 9 月 24 日.
34. 絹川常郎, 服部良平, 小野佳成, 佐橋正文, 松浦治, 大島伸一, 加藤範夫, 平林聡: 腹腔鏡下腎摘除術 13 例の検討. 第 6 回日本 Endourology・ESWL 学会総会. シンポジウム(腹腔鏡下検査と手術). 福岡. 1992 年 11 月 20 日.
35. 大島伸一, 加藤一良, 柏原英彦, 篠田晤, 玉置勲, 福西孝信: 臓器移植ネットワークのあるべき姿. 第 26 回日本腎移植臨床研究会. シンポジウム. 浦安. 1993 年 1 月 28 日.
36. 小野佳成, 大島伸一: Laparoscopic Nephrectomy. 第 81 回日本泌尿器科学会総会. ビデオシンポジウム(泌尿器科領域における腹腔鏡手術). 京都. 1993 年 4 月 11 日.
37. 小野佳成, 大島伸一: Laparoscopic Nephrectomy. 第 18 回日本外科系連合学会. シンポジウム(泌尿器科における腹腔鏡手術の適応と限界). 大宮. 1993 年 6 月 25 日.
38. 大島伸一: 追加発言. 第 38 回日本透析療法学会. ワークショップ(総合医療としての腎不全対策—透析, CAPD, および腎移植). 千葉. 1993 年 7 月 18 日.
39. 大島伸一: ブロックセンターの立場から. 第 30 回日本移植学会総会. シンポジウム(日本における移植医療—これからの諸問題—). 広島. 1994 年 11 月 25 日.
40. 寺岡慧, 白倉良太, 大島伸一, 渡部良夫, 大井玄, 福間誠之, 辻本好子, 小柳仁: 移植医療の是非を考える. 第 31 回日本移植学会総会. 公開シンポジウム. 京都. 1995 年 9 月 4 日.
41. 大島伸一: 免疫抑制療法の実際 シクロスポリンを中心とした免疫抑制療法. 第 46 回日本泌尿器科学会中部総会. サテライト公開シンポジウム(腎移植における免疫抑制療法). 大阪. 1996 年 11 月 14 日.

外 12 回 全 53 回

〈 一般演題 〉 自身での発表分

1. Ohshima S, Ono Y, Mitsuya H: Dismembered Pyelolithotomy—New Procedure for Removal of Renal Calculi. The 19th Congress of the Société Internationale d'Urologie. Sep. 20, 1982. San Francisco, USA.
2. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R: The Beneficial Effects of Thoracic Duct Drainage in HLA One Haploidentical Kidney Transplantation. The 20th Congress of the Société Internationale d'Urologie. June 23, 1985. Vienna, Austria.
3. Ohshima S, Fujita T, Asano H, Ono Y: The Effect of Cyclosporin on the Early Postoperative Function of Allografted Kidney with Warm Ischemic Damage. The 11th International Congress of the Transplantation Society. Aug. 3, 1986. Helsinki, Finland.
4. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hirabayashi S: The Beneficial Effects of Thoracic Duct Drainage Pretreatment in Living Related Kidney Transplantation. The 1st International Transplantation Forum. Sep. 8, 1986. Pittsburgh, USA.
5. Ohshima S, Ono Y, Fujita T, Asano H: Three Drugs Combination Chemotherapy in the Advanced Urothelial Carcinoma. The 3rd International Congress on Treatment of Urinary Tract Tumor with Adriamycin. Sep. 26, 1986. Tokyo, Japan.
6. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Takeuchi N, Hattori R: The Long Term Result of Thoracic Duct Drainage Pretreatment in Living Related Kidney Transplantation. The 12th International Congress of the Transplantation Society. Aug. 14, 1988. Sydney, Australia.
7. 大島伸一, 津村芳雄, 千田八朗, 瀬川明夫, 太田裕祥: 腎奇形を伴った遊走腎の 1 例. 第 92 回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1970 年 9 月 26 日.

8. 大島伸一, 津村芳雄, 千田八朗, 瀬川明夫, 太田裕祥: 最近の経験した陰茎癌の3例. 第92回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1970年9月26日.
9. 大島伸一, 津村芳雄, 千田八朗, 瀬川明夫, 太田裕祥: 完全重複腎盂尿管を伴う ureterocele. 第92回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1970年9月26日.
10. 大島伸一, 津村芳雄, 太田裕祥, 瀬川明夫, 千田八朗, 大倉誉暢: 重複膀胱をともなった融合偏位腎の1例. 第95回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1971年5月29日.
11. 大島伸一, 太田裕祥, 福島賢秀, 藤田民夫, 浅野晴好: 閉塞性急性腎不全の数例. 第98回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1972年5月27日.
12. 大島伸一, 太田裕祥, 福島賢秀, 藤田民夫, 浅野晴好: 全摘を施した前立腺癌の4例について. 第99回東海泌尿器科学会. 津. 1972年10月7日.
13. 大島伸一: 悪性高血圧症を伴う透析患者の両側腎摘の1例. 第100回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1973年1月21日.
14. 大島伸一, 太田裕祥: 腎性高血圧の1例. 第101回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1973年5月26日.
15. 大島伸一: Wilms 腫瘍の1例. 第102回東海泌尿器科学会. 岐阜. 1973年9月29日.
16. 大島伸一, 太田裕祥, 藤田民夫, 浅野晴好: 腎性高血圧症における両側腎摘出術の治験. 第23回中部連合地方会. 和歌山. 1973年10月21日.
17. 大島伸一, 太田裕祥: Pyeloplasty の2症例. 第104回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1974年5月12日.
18. 大島伸一, 下地敏雄, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 太田裕祥: 乳糜尿に対するリンパ管造影. 第105回東海泌尿器科学会. 津. 1974年9月21日.
19. 大島伸一: 同種腎移植12例の経験. 第24回中部連合地方会. 京都. 1974年11月17日.
20. 大島伸一, 下地敏雄, 太田裕祥: 当院における腎移植の方法. 第106回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1974年12月14日.
21. 大島伸一, 下地敏雄, 藤田民夫: 腎移植後乏尿例の検討. 第63回日本泌尿器科学会総会. 岡山. 1975年4月25日.
22. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 小野佳成, 太田裕祥: 術後尿管狭窄に対する尿管ブジーによる3治療例. 第110回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1975年12月20日.
23. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 加藤信夫, 杉山敏, 下地敏雄, 太田裕祥: 生体同種腎移植後肝機能障害例の検討. 第9回腎移植臨床検討会. 京都. 1976年1月31日.
24. 大島伸一, 藤田民夫, 小野佳成: 上部尿路結石手術に於ける合併症について. 第113回東海泌尿器科学会. 津. 1976年9月25日.
25. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 杉山敏, 加藤信夫, 伊藤勝基, 下地敏雄, 太田裕祥: 無症状に経過した肺クリプトコッカス症の1例. 第12回日本移植学会総会. 岡山. 1976年10月27日.
26. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 太田裕祥: 腎盂形成術の10例. 第26回中部連合地方会. 京都. 1976年11月13-14日.
27. 大島伸一, 浅野晴好, 他: 移植後肺腫瘍を合併した1例. 第8回中部臓器移植懇話会. 名古屋. 1977年3月5日.
28. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 加藤信夫, 杉山敏, 伊藤勝基, 下地敏雄: 移植後感染症の Risk Factor について その1: 臨床統計的検討. 第13回日本移植学会総会. 千葉. 1977年9月30日.
29. 大島伸一, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治: 拒絶反応例の検討—特に不可逆性拒絶反応例について. 第1回臨床移植免疫研究会. 東京. 1978年6月3日.
30. 大島伸一, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎: 同種腎移植39例の経験. 第121回東海泌尿器科学会. 岐阜. 1978年9月30日.
31. 大島伸一, 藤田民夫, 浅野晴好, 小野佳成, 梅田俊一, 絹川常郎, 松浦治, 平林聡, 都築一夫, 下地敏雄: 拒絶反応による移植腎摘出例の検討. 第14回日本移植学会総会. 京都. 1978年10月19日.

32. 大島伸一, 小野佳成, 松浦治, 平林聡, 小川洋史, 竹内宣久, 太田裕祥, 名出頼男, 藤田民夫, 浅野晴好: Anti-VUR 手術: Cohen 法の検討. 第 28 回日本泌尿器科学会中部総会. 鳥羽. 1978 年 11 月 5 日.
33. 大島伸一, 小野佳成, 松浦治: 腎内動静脈瘻の 1 例 Ex Vivo Surgery による治験例. 第 125 回東海泌尿器科学会. 津. 1979 年 9 月 29 日.
34. 大島伸一, 小野佳成, 杉山敏, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一: 長期移植腎生着例の検討—臨床的検討—. 第 13 回腎移植臨床検討会. 廿日市. 1980 年 1 月 16 日.
35. 大島伸一, 小野佳成, 三矢英輔: 腎珊瑚状結石に対する新しい手術法. 第 68 回日本泌尿器科学会総会. 神戸. 1980 年 4 月 4 日.
36. 大島伸一, 松浦治: NK-631 の前立腺癌に対する検討. 第 4 回ペプロマイシン研究会. 京都. 1980 年 11 月 28 日.
37. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 平林聡, 杉山敏, 都築一夫: Pretreatment としての胸管ドレナージ法の経験. 第 14 回腎移植臨床検討会. 三沢. 1981 年 1 月 16 日.
38. 大島伸一, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久: 体外腎手術による腎動脈狭窄症の 1 治療例. 第 136 回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1982 年 4 月 24 日.
39. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 金城勤, 平林聡: Pretreatment としての胸管ドレナージの臨床的検討. 第 6 回臨床移植免疫研究会. 東京. 1983 年 6 月 25 日.
40. 大島伸一, 小野佳成, 松浦治, 竹内宣久: Urinary Undiversion の 3 例. 第 146 回東海泌尿器科学会. 名古屋. 1984 年 12 月 22 日.
41. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 松浦治, 竹内宣久, 服部良平, 藤田民夫, 浅野晴好, 梅田俊一, 平林聡: 生体腎移植 103 例の検討. 第 73 回日本泌尿器科学会総会. 東京. 1985 年 4 月 5 日.
42. 大島伸一, 岩崎洋治, 太田和夫, 高木弘, 園田孝夫: 腎移植における FK506 投与例の 1 年間追跡調査. 第 29 回日本移植学会総会. 金沢. 1993 年 9 月 16 日.

＜ テレビ出演 ＞

「ドキュメンタリー」ラポールの贈りもの～愛知の腎臓移植～. 東海テレビ. 1990 年 5 月 30 日放送.

名古屋大学

(1997(平成9)年1月～2004(平成16)年2月)

〈 ガイドライン 〉

1. 高齢者排尿管理マニュアル 尿失禁・排尿困難(大島伸一 監修). 愛知県健康福祉部高齢福祉課, 名古屋. 2001
2. EBMに基づく前立腺肥大症診療ガイドライン(泌尿器科領域の治療標準化に関する研究班(大島伸二 班長)編). じほう, 東京. 2001.

〈 編 書 〉

1. Yoshida O, Higashihara E, Ohshima S, Matsuda T(Eds.). Recent Advances in Endourology Vol.1 Urologic Laparoscopy. Springer-Verlag, Tokyo. 1999.
2. Ohshima S, Hirao Y(Eds.). Recent Advances in Endourology Vol.4 Clinical Guidelines in Urological Management. Springer-Verlag, Tokyo. 2003.
3. 吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編:新図説泌尿器科学講座. メジカルビュー社, 東京.
 - (1) 第1巻 泌尿器科診断学. 1999.
 - (2) 第2巻 尿路結石症, 尿路性器感染・炎症疾患. 1999.
 - (3) 第3巻 泌尿器科腫瘍学. 1999.
 - (4) 第4巻 内分泌疾患, 性機能障害. 1999.
 - (5) 第5巻 小児泌尿器科学, 女性泌尿器科学. 1999.
 - (6) 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学. 2000.
4. 荒川正昭, 小磯健吉, 浅野泰監修, 富野康日己, 石田尚志, 富田公夫, 大島伸一 編集顧問:先端医療シリーズ13 腎臓病 腎臓病の最新医療. 先端医療技術研究所, 東京. 2001.

全9巻

〈 ビデオ監修 〉

1. 大島伸一 総監修:尿失禁術式シリーズ. ゼネカ薬品, 大阪. 1999.
 - (1) Vol. 1. 尿失禁に対する day surgery—尿道周囲コラーゲン注入療法, TVT スリング法.
 - (2) Vol. 2. 前膈壁形成術+ステーミー法, 恥骨固定式スリング法, 恥骨膈スリング法.

〈 著 書 〉

1. Ohshima S, Fujita T, Ono Y, Kinukawa T, Katoh N, Matsuura O: Immunosuppressive Treatment of Primary Cadaveric Renal Transplant Patients Receiving Kidneys from Non-Heart Beating Donors. In: Immunomodulation in Immune Disorders and Organ Substitution, Kikuchi K, Nishimura A, Komatsu S(Eds.), Blackwell Science, Inc., U.S.A. 1998. pp.221-227.
2. Ono Y, Ohshima S: Laparoscopic Radical Nephrectomy for Renal Cell Carcinoma. In: Recent Advances in Endourology Vol.1 Urologic Laparoscopy, Yoshida O, Higashihara E, Ohshima S, Matsuda T (Eds.), Springer-Verlag, Tokyo. 1999. pp.73-86.
3. Gotoh M, Ono Y, Ohshima S: High-Energy TURP Using a Thick Loop. In: Recent Advances in Endourology Vol.2 Treatment of Benign Prostatic Hyperplasia, Koshiba K, Miki M, Terachi T, Uchida T (Eds.), Springer-Verlag, Tokyo. 2000. pp.167-175.
4. Ohshima S: Preface. In: Recent Advances in Endourology Vol.4 Clinical Guidelines in Urological Management, Ohshima S, Hirao Y(Eds.), Springer-Verlag, Tokyo. 2003.
5. 大島伸一: 医者へのそ 患者のつむじ. 日本医療企画, 東京. 1997.
6. 大島伸一: 医療は不確実 ホンネで語る医論・異論. じほう, 東京. 2002.

7. 大島伸一, 小野佳成: 腎移植の合併症. 別冊・医学のあゆみ 腎疾患State of Arts Ver.2(成清卓二, 浅野泰 編). 医歯薬出版, 東京. 1997. pp.396-398.
8. 大島伸一, 小野佳成: 我が国の腎移植の現況と腎移植ネットワーク. 最新 腎移植と腎癌手術—可能性と問題点—(田島惇 編). 協和企画通信, 東京. 1997. pp.9-12.
9. 大島伸一: 臓器移植ネットワーク 基本的概念. コーディネーターのための臓器移植概説(若杉長英 監修, 白倉良太, 高原史郎, 芦刈淳太郎 編). 日本医学館, 東京. 1997. pp.79-81.
10. 絹川常郎, 大島伸一: 拒絶反応治療薬1 ステロイド. 腎移植における免疫抑制療法(高橋公太 編). 日本医学館, 東京. 1998. pp.157-171.
11. 大島伸一, 小野佳成, 後藤百万: 血尿・排尿障害の診断と治療. 30の大学病院による診断と治療シリーズ 血尿・蛋白尿・排尿障害の診断と治療. 真興交易医書出版部, 東京. 1998. pp.114-126.
12. 大島伸一, 小野佳成: 生体腎移植. テキスト臓器移植(雨宮浩 編). 日本評論社, 東京. 1998. pp.170-178.
13. 大島伸一: 臓器移植ネットワーク. Annual Review腎臓1999(長澤俊彦, 河邊香月, 伊藤克己, 浅野泰, 遠藤仁 編). 中外医学社, 東京. 1999. pp.171-174.
14. 大島伸一: 泌尿器の悩みQ&A. NHKきょうの健康別冊 これだけは知っておきたい泌尿器の病気(垣添忠生 総監修). 日本放送出版会, 東京. 1999. pp.120-125.
15. 大島伸一: 死体腎移植実施の手続き. 泌尿器科診療Q&A. 六法出版社, 名古屋. 1999. pp.629/4-629/5.
16. 大島伸一: 臨床泌尿器科のコツと落とし穴 3 手術療法Part2(阿曾佳郎 編). 中山書店, 東京. 1999.
 - (1) 体外腎手術と自家腎移植術のコツ. pp.44-45.
 - (2) 生体腎移植のためのドナー腎摘出術. pp.49-51.
17. 西村達弥, 弓場宏, 水谷一夫, 大島伸一: 尿路性器損傷・救急処置. 新図説泌尿器科学講座 第1巻 泌尿器科診断学(吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編). メジカルビュー社, 東京. 1999. pp.236-256.
18. 大島伸一: 序文. 新図説泌尿器科学講座 第4巻 内分泌疾患, 性機能障害(吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編). メジカルビュー社, 東京. 1999.
19. 大島伸一: 序文. 新図説泌尿器科学講座 第5巻 小児泌尿器科学, 女性泌尿器科学(吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編). メジカルビュー社, 東京. 1999.
20. 岡村菊夫, 大島伸一: 女性における骨盤内臓器の下垂. 新図説泌尿器科学講座 第5巻 小児泌尿器科学, 女性泌尿器科学(吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編). メジカルビュー社, 東京. 1999. pp.318-323.
21. 大島伸一: 新図説泌尿器科学講座 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学(吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編). メジカルビュー社, 東京. 2000.
 - (1) 序文. (2) 腎移植 歴史と用語. pp.118-119.
22. 絹川常郎, 大島伸一: 腎移植手術. 新図説泌尿器科学講座 第6巻 腎疾患・神経泌尿器科学・老年泌尿器科学(吉田修 監修, 小柳知彦, 村井勝, 大島伸一 編). メジカルビュー社, 東京. 2000. pp.142-145.
23. 小野佳成, 大島伸一: 腹腔鏡下根治摘腎摘除術. ベッドサイド泌尿器科学—手術編(改訂第3版)(吉田修 編). 南江堂, 東京. 2000. pp.73-76.
24. 大島伸一, 加藤範夫: 腎盂尿管移行部狭窄 Endopyelomy, 腹腔鏡下腎盂形成術. ベッドサイド泌尿器科学—手術編(改訂第3版)(吉田修 編). 南江堂, 東京. 2000. pp.176-178.
25. 大島伸一: 腎移植患者のケア. 今日の治療指針2000年版(多賀須幸男, 尾形悦郎, 石井清一 編). 医学書院, 東京. 2000. pp.928-929.
26. 高原史郎, 打田和治, 長谷川昭, 大島伸一, 高橋公太, 田辺一成, 太田和夫, 雨宮浩, 星長清隆, 長谷川友紀, 東間紘, 小林孝彰, 葛原敬八郎, 平野哲夫, 石田尚志, 大塚聡樹, 本田宏, 相川厚, 両角國男: 総合討論. 腎移植連絡協議会からの提言 献腎移植を公平に受けるためには—数と地域格差の解消へ—(高橋公太 編). 日本医学館, 東京. 2000. pp.31-71.
27. 吉川羊子, 後藤百万, 大島伸一: ポラキス(塩酸オキシブチニン). 先端医療シリーズ7 泌尿器科 診断と治療の最前線(垣添忠生 監修). 先端医療技術研究所, 東京. 2000. pp.455-458.

28. 後藤百万, 大島伸一 編著: 日常診療のための泌尿器科診断学 No.6 女性尿失禁の検査(吉田修 監修). 住友製薬, 大阪. 2000.
29. 高原史郎, 相川厚, 打田和治, 高橋公太, 長谷川友紀, 小林孝彰, 藤田民夫, 鈴木和雄, 永野俊介, 大塚聡樹, 太田和夫, 大島伸一: 平成11年度厚生科学研究・北川班の活動から 討論. 腎移植連絡協議会からの提言 臓器提供を増やすには―ドナー・アクション・プロトコル―(高橋公太 編). 日本医学館, 東京. 2001. pp.28-52.
30. 高士宗久, 大島伸一: 膀胱癌マーカー(尿中BTA, 尿中NMP22). 臨床検査ガイド2001~2002(和田攻, 他 編). 文光堂, 東京. 2001. pp.945-947.
31. 小野佳成, 大島伸一, 絹川常郎, 田中國晃, 古川亨, 松浦治, 上平修: ABO血液型不適合腎移植の経験. ABO血液型不適合腎移植の新戦略-2001-(高橋公太, 田中紘一 編). 日本医学館, 東京. 2001. pp.61-63.
32. 大島伸一: 腎臓移植の現状と問題点. 先端医療シリーズ13・腎臓病 腎臓病の最新医療(荒川正昭, 小磯健吉, 浅野泰 監修). 先端医療技術研究所, 東京. 2001. pp.23-28.
33. 田中國晃, 大島伸一: 成人の腎移植. Urologic SurgeryシリーズNo.10 腎移植と血管外科(高橋公太, 村井勝 編). メジカルビュー社, 東京. 2001. pp.30-40.
34. 大島伸一, 服部良平: クリニカルパスの実践. 改訂泌尿器悪性腫瘍治療ハンドブック(勝岡洋治, 赤座英之 編). 新興医学出版社, 東京. 2001. pp.153-161.
35. 大島伸一: 名古屋大学における卒後臨床研修への取り組み. '01.5.26 医療事故情報センター総会記念シンポジウム 医師の研修制度について考える. 医療事故情報センター, 名古屋. 2001. pp.20-26.
36. 大島伸一, 石井トク, 鈴木満, 堀康司: パネルディスカッション医師の研修制度について考える. '01.5.26 医療事故情報センター総会記念シンポジウム報告書 医師の研修制度について考える. 医療事故情報センター, 名古屋. 2001. pp.32-50.
37. 長谷川友紀, 齋藤和英, 坂本薫, 大田原佳久, 秋山政人, 高橋公太, 鈴木和雄, 安田和広, 吉村了勇, 葛原敬八郎, 大島伸一, 星長清隆: 総合討論. 腎移植連絡協議会からの提言 献腎移植を増やすには―献腎提供運動はボランティア活動である―(高橋公太 編). 日本医学館, 東京. 2001. pp.49-63.
38. 大島伸一: 血尿(特発性腎出血を含む). 今日の治療指針2002年版(山口徹, 北原光夫 編). 医学書院, 東京. 2002. pp.722-723.
39. 吉川羊子, 大島伸一: 陰茎全切断術. Urologic SurgeryシリーズNo.11 陰茎癌と精巣癌の手術(寺地敏郎, 山口脩 編). メジカルビュー社, 東京. 2002. pp.15-20.
40. 後藤百万, 大島伸一: 女性尿失禁の検査. 日常診療のための泌尿器科診断学(吉田修 監修). インターメディカ, 東京. 2002. pp.135-149.
41. 古川亨, 絹川常郎, 都築一夫, 大島伸一: 骨髄移植後のABO血液型不適合生体腎移植の一例. ABO血液型不適合腎移植の新戦略-2002-(高橋公太, 田中紘一 編). 日本医学館, 東京. 2002. pp.33-36.
42. 星長清隆, 秋山政人, 鈴木和雄, 中村信之, 高橋公太, 齋藤和英, 大田原佳久, 深尾立, 大島伸一, 太田和夫: 新潟県における病院開発と臓器提供の現況 討論. 腎移植連絡協議会からの提言 献腎提供を増やすための取り組み―病院システムかの確立を目指して―(高橋公太 編). 日本医学館, 東京. 2002. pp.38-57.
43. 大島伸一: 導尿法, 膀胱穿刺法, 膀胱瘻造設術. 今日の治療指針2003年版(山口徹, 北原光夫 編). 医学書院, 東京. 2003. p.738.
44. 高士宗久, 大島伸一: 膀胱癌マーカー(尿中BTA, 尿中NMP22). 臨床検査ガイド2003~2004(和田攻, 大久保昭行, 矢崎義雄, 大内尉義 編). 文光堂, 東京. 2003. pp.955-957.
45. 杉村芳樹, 岡村菊夫, 大島伸一: 日本短波放送医学特別番組<明日の治療指針>排尿障害―最新の診断と治療法―. 扶桑薬品工業(株)・東菱薬品工業(株). 2003.
46. 大島伸一: 腎腫瘍. 長寿科学事典(祖父江逸郎 監修). 医学書院, 東京. 2003. pp.521-522.
47. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: EBMに基づく前立腺肥大症診療ガイドライン. からだの科学〔増刊〕EBM診療ガイドライン解説集(福井次矢 編). 日本評論社, 東京. 2003. pp.302-307.
48. 大島伸一: 腎移植患者のケア. 今日の治療指針2004年版(山口徹, 北原光夫 編). 医学書院, 東京. 2004. pp.796-797.

〈 英文論文 〉

1. Takeuchi N, Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Yamada S, Ohshima S : Efficacy of the Swiss Lithoclast for the Endourological Treatment of Urinary Stones. *Jpn J Endourol ESWL*. 10(2):107-111. 1997.
2. Okamura K, Kato N, Takamura S, Tanaka J, Nagai T, Watanabe H, Tsuji Y, Ono Y, Ohshima S : Trigonal Splitting Is a Major Complication of Endoscopic Trigonoplasty at 1-year Followup. *J Urol*. 157(4):1423-1425. 1997.
3. Ono Y, Kinukawa N, Matsuura T, Ohshima S : Laparoscopic Radical Nephrectomy: the Nagoya Experience. *J Urol*. 158(3 Pt 1):719-723. 1997.
4. Motoyama O, Hasegawa A, Ohara T, Hattori M, Kawaguchi H, Takahashi K, Kamiyama Y, Nakai H, Shishido S, Ogawa O, Kawamura T, Tsuzuki K, Ohshima S : A Prospective Trial of Steroid Cessation after Renal Transplantation in Pediatric Patients Treated with Cyclosporine and Mizoribine. *Pediatr Transplant*. 1(1):29-36. 1997.
5. Mizutani K, Yamada S, Katoh N, Ono Y, Ohshima S, Kinukawa T, Fujita T : Cadaveric Kidneys From Older Donors and Their Effective Use in Transplantation: A Risk Factor for Long-Term Graft Survival. *Transplant Proc*. 29(1-2):113-115. 1997.
6. Teraoka S, Ota K, Tanabe K, Takahashi K, Toma H, Yasumura T, Yoshimura N, Oka T, Takahara S, Okuyama A, Haba T, Uchida K, Sugiyama S, Ohshima S, Sato T, Okazaki H, Morozumi K : Multicenter Trial of the Therapeutic Effects of a Newly Developed Antiplatelet Agent, Satigrel, on Biopsy-Proven Chronic Rejection After Kidney Transplantation. *Transplant Proc*. 29(1-2):266-271. 1997.
7. Kinukawa T, Ono Y, Takeuchi N, Hattori R, Ohshima S : Analysis of long-Term Results in Kidney Transplantation Performed Using a Rejection-Free Protocol with Cyclosporine and Thoracic Duct Drainage. *Transplant Proc*. 29(1-2):946-947. 1997.
8. Okamura K, Kinukawa T, Tsumura Y, Otani T, Itoh H, Kobayashi H, Matsuura O, Kobayashi M, Fukatsu T, Ohshima S : A Randomized Study of Short-Versus Long-Term Intravesical Epirubicin Instillation for Superficial Bladder Cancer. Nagoya University Urological Oncology Group. *Eur Urol*. 33(3):285-289. 1998.
9. Takashi M, Hasegawa S, Ohmura M, Ohshima S, Kato K : Significant Elevation of Urinary 28-kD Calbindin-D and N-Acetyl- β -D Glucosaminidase Levels in Patients Undergoing Extracorporeal Shock Wave Lithotripsy. *Int Urol Nephrol*. 30(4):407-415. 1998.
10. Takashi M, Katsuno S, Yuba H, Ohshima S, Wakai K, Ohno Y : Possible Factors Affecting Response to Intravesical Bacillus Calmette- Guérin(Tokyo 172 Strain)Therapy for Carcinoma in Situ of the Bladder:a Multivariate Analysis. *Int Urol Nephrol*. 30(6):713-722. 1998.
11. Higashihara E, Baba S, Nakagawa K, Murai M, Go H, Takeda M, Takahashi K, Suzuki K, Fujita K, Ono Y, Ohshima S, Matsuda T, Terachi T, Yoshida O : Learning Curve and Conversion to Open Surgery in Cases of Laparoscopic Adrenalectomy and Nephrectomy. *J Urol*. 159(3):650-653. 1998.
12. Hemal AK: Re: Laparoscopic Nephrectomy via the Retroperitoneal Approach. (Ono Y, Katoh N, Kinukawa T, Matsuura O, Ohshima S. *J Urol*. 156(3):1101-1104. 1996) [Letters to the editor]. *J Urol*. 159(3):992-993. 1998.
13. Ohshima S, Ono Y. : The Present Status of Endourologic Surgery. *Nagoya J Med Sci*. 61(1-2):1-10. 1998.
14. Ono Y, Mizutani K, Kamihira O, Hattori R, Ohshima S : Depressed Expression of CD28 Antigen on Lymphocytes in Long-Term Kidney Transplant Patients. *Transplant Proc*. 30(4):1164-1166. 1998.
15. Kinukawa T, Ohshima S, Ono Y, Fujita T, Hattori R, Tanaka K: Long-Term Comparison of Tacrolimus and Cyclosporine-Based Immunosuppression in Kidney Recipients with Grafts from Non-Heart-Beating Cadaver Donor. *Transplant Proc*. 30(4):1227-1229. 1998.
16. Mizutani K, Ono Y, Hattori R, Kamihira O, Ohshima S, Otsuka K : Low MLR Stimulation Index and Depressed CD28 Antigen Expression in Long-Renal Transplant Recipients. *Transplant Proc*. 30(7):2970-2973. 1998.

17. Kondo T, Kinukawa T, Takeuchi N, Hattori R, Ono Y, Matsuura O, Fujita T, Ohshima S : Ten Years After: Long-term Effects of Cyclosporine-Based Immunosuppression on Renal Allograft Recipients. *Transplant Proc.* 30(7):3530-3532. 1998.
18. Hatsuse K, Kinukawa T, Hattori R, Fujita T, Ono Y, Ohshima S : Cadaveric Renal Transplantations with Prolonged Warm Ischemic Times Greater Than 30 Minutes. *Transplant Proc.* 30(7):3787-3789. 1998.
19. Hattori R, Ohshima S, Ono Y, Fujita T, Kinukawa T, Matsuura O : FK 506 in Cadaveric Kidney Transplantation from Non-Heart-Beating Donors. *Transplant Proc.* 30(7):3801-3803. 1998.
20. Takashi M, Katsuno S, Sakata T, Ohshima S, Kato K : Different Concentrations of Two Small Stress Proteins, Alpha-B Crystallin and HSP27 in Human Urological Tumor Tissues. *Urol Res.* 26(6):395-399. 1998.
21. Waters WB, Bassi P, Ohi Y, Ohshima S, van Poppel HP, Smith JA Jr, Tajima A : The Role of Pelvic Lymph Node Dissection in the Management of Invasive Bladder Cancer. *Urologic Oncology.* 4(4-5):168-171. 1998.
22. Hattori R, Ono Y, Kinukawa T, Nishiyama N, Yamada S, Ohshima S : Long-Term Results of Laparoscopic Radical Nephrectomy. *Asian Journal of Surgery.* 22(3):217-222. 1999.
23. Okamura K, Kato N, Tsuji Y, Ono Y, Ohshima S : A Comparative study of Endoscopic Trigonoplasty for Vesicoureteral Reflux in Children and in Adults. *Int J Urol.* 6(11):562-566. 1999.
24. Okamura K, Watanabe H, Iwasaki A, Tsuji Y, Ohshima S : Closure of the Mouth of a Bladder Diverticulum Via the Endoscopic Transvesico-transurethral Approach. *J Endourol.* 13(2):123-126. 1999.
25. Gotoh M, Okamura K, Hattori R, Nishiyama N, Kobayashi H, Tanaka K, Yamada S, Kato T, Kinukawa T, Ono Y, Ohshima S : A Randomized Comparative Study of the Bandloop Versus the Standard Loop for Transurethral Resection of the Prostate. *J Urol.* 162(5):1645-1647. 1999.
26. Ono Y, Ohshima S, Takahashi Y, Kuriyama M, Kawada Y, Shimizu H : Endocrine Plus Uracil/Tegafur Therapy for Prostate Cancer. *Oncology.* 13(7, Suppl3):120-124. 1999.
27. Tsuji-Hayashi Y, Fukuhara S, Green J, Takai I, Shinzato T, Uchida K, Ohshima S, Yamazaki C, Maeda K : Health-Related Quality of Life Among Renal-Transplant Recipients in Japan. *Transplantation.* 68(9):1331-1335. 1999.
28. Mizutani K, Nishiyama N, Hattori R, Matsuura O, Kinukawa T, Ono Y, Ohshima S : Usage of High-Risk Donors in Non-Heart-Beating Cadaveric Kidney Transplantation: Is An Older Donor Available?. *Transplant Proc.* 31(7):2843-2846. 1999.
29. Hattori R, Ohshima S, Ono Y, Fujita T, Kinukawa T, Matsuura O : Long-Term Outcome of Kidney Transplants from Non-Heart-Beating Donor: Multivariate Analysis of Factors Affecting the Graft Survival. *Transplant Proc.* 31(7):2847-2850. 1999.
30. Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Yamada S, Nishiyama N, Mizutani K, Ohshima S : Laparoscopic Radical Nephrectomy for Renal Cell Carcinoma: A Five-Year Experience. *Urology.* 53(2):280-286. 1999.
31. Gotoh M, Yoshikawa Y, Kondo AS, Kondo A, Ono Y, Ohshima S : Positive Bladder Cooling Reflex in Patients with Bladder Outlet Obstruction due to Benign Prostatic Hyperplasia. *World J Urol.* 17(2):126-130. 1999.
32. Gotoh M, Yoshikawa Y, Kondo AS, Kondo A, Ono Y, Ohshima S : Prognostic Value of Pressure-Flow Study in Surgical Treatment of Benign Prostatic Obstruction. *World J Urol.* 17(5):274-278. 1999.
33. Terachi T, Yoshida O, Matsuda T, Oriyasa S, Chiba Y, Takahashi K, Takeda M, Higashihara E, Murai M, Baba S, Fujita K, Suzuki K, Ohshima S, Ono Y, Kumazawa J, Naito S : Complications of Laparoscopic and Retroperitoneoscopic Adrenalectomies in 370 Cases in Japan: A Multi-Institutional Study. *Biomed Pharmacother.* 54 Suppl 1:211s-214s. 2000.
34. Takagi Y, Takashi M, Koshikawa T, Sakata T, Ohshima S : Immunohistochemical Demonstration of Cyclin D1 in Bladder Cancers as an Inverse Indicator of Invasiveness but not an Independent Prognostic Factor. *Int J Urol.* 7(10):366-372. 2000.

35. Hibi H, Yamada Y, Honda N, Fukatsu H, Katsuno S, Ohshima S, Yamamoto M: Microsurgical Vasoepididymostomy with Sperm Cryopreservation for Future Assisted Reproduction. *Int J Urol.* 7(12):435-439. 2000.
36. Wakai K, Takashi M, Okamura K, Yuba H, Suzuki K, Murase T, Obata K, Itoh H, Kato T, Kobayashi M, Sakata T, Otani T, Ohshima S, Ohno Y: Foods and Nutrients in Relation to Bladder Cancer Risk: A Case-Control Study in Aichi Prefecture, Central Japan. *Nutrition and Cancer.* 38(1):13-22. 2000.
37. Kamihira O, Kinukawa T, Matsuura O, Hattori R, Nishiyama T, Ono Y, Ohshima S: Successful Use of Graft from Marginal Donors in Non-Heart Beating Renal Transplantation. *Transplant Proc.* 32(7):1578-1582. 2000.
38. Tanaka K, Kinukawa T, Matsuura O, Hattori R, Hirabayashi S, Sahashi M, Fujita T, Ono Y, Ohshima S: The Effect of Donor Age on Living-Related Kidney Transplantation. *Transplant Proc.* 32(7):1583-1584. 2000.
39. Kato M, Mizutani K, Hattori R, Kinukawa T, Uchida K, Hoshinaga K, Ono Y, Ohshima S: In Situ Renal Cooling for Kidney Transplantation from Non-Heart-Beating Donors. *Transplant Proc.* 32(7):1608-1610. 2000.
40. Takashi M, Schenck U, Koshikawa T, Nakashima N, Ohshima S: Cytological Changes Induced by Intravesical Bacillus Calmette- Guérin Therapy for Superficial Bladder Cancer. *Urol Int.* 64(2):74-81. 2000.
41. Gotoh M, Mizutani K, Furukawa T, Kinukawa T, Ohshima S: Quality of Micturition in Male Patients with Orthotopic Neobladder Replacement. *World J Urol.* 18(6):411-416. 2000.
42. Kato M, Matsuguchi T, Ono Y, Hattori R, Ohshima S, Yoshikai Y: Characterization of CD28-CD4+ T cells in living kidney transplant patients with long-term allograft acceptance. *Human Immunology.* 62(12):1335-1345. 2001.
43. Katsuno S, Takashi M, Ohshima S, Ohta M, Kato N, Kurokawa H, Arakawa Y: Direct Screening of The IMP-1 Metallo- β -Lactamase Gene (BlaIMP) from Urine Samples by Polymerase Chain Reaction. *Int J Urol.* 8(3):110-117. 2001.
44. Yuba H, Okamura K, Ono Y, Ohshima S: Growth Fractions of Human Renal Cell Carcinoma Defined by Monoclonal Antibody Ki-67. Predictive Values for Prognosis. *Int J Urol.* 8(11):609-614. 2001.
45. Kuriyama M, Takahashi Y, Sahashi M, Ono Y, Tanaka T, Shimizu H, Ohshima S: Prospective and Randomized Comparison of Combined Androgen Blockade Versus Combination with Oral UFT as an Initial Treatment for prostate Cancer. *Jpn J Clin Oncol.* 31(1):18-24. 2001.
46. Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Gotoh M, Kamihira O, Ohshima S: The Long-Term Outcome of Laparoscopic Radical Nephrectomy for Small Renal Cell Carcinoma. *J Urol.* 165(6 Pt 1):1867-1870. 2001.
47. Mizutani K, Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Nishiyama N, Kamihira O, Ohshima S: Use of Marginal Organs from Non-Heart-Beating Cadaveric Kidney Donors. *Transplantation.* 72(8):1376-1380. 2001.
48. Furukawa T, Kinukawa T, Sugiyama S, Ono Y, Ohshima S: Prediction of Chronic Allograft Failure Using Computerized Image Analysis of Postperfusion Biopsy Specimen: Study of Cadaver Kidney Transplants. *Transplant Proc.* 33(1-2):962-963. 2001.
49. Ohshima S, Ono Y, Hattori R, Fukuhara N, Kinukawa T, Yamada S, Kamihira O, Nishiyama N: Long-Term Outcome of Cadaver Kidney Transplants from Non-Heart-Beating Donors. *Transplant Proc.* 33(7-8):3764-3768, 2001.
50. Okamura K, Ono Y, Kinukawa T, Matsuura O, Yamada S, Ando T, Fukatsu T, Ohno Y, Ohshima S: Randomized Study of Single Early Instillation of (2''R)-4'-0-Tetrahydropyranyl-Doxorubicin for a Single Superficial Bladder Carcinoma. *Cancer.* 94(9):2363-2368. 2002.
51. Ishizuka O, Nishizawa O, Hirao Y, Ohshima S: Evidence-Based Meta-Analysis of Pharmacotherapy for Benign Prostatic Hypertrophy. *Int J Urol.* 9(11):607-612. 2002.
52. Takashi M, Wakai K, Hattori R, Furuhashi K, Ono Y, Ohshima S, Ohno Y: Multivariate Evaluation of Factors Affecting Recurrence, Progression, and Survival in Patients with Superficial Bladder Cancer Treated with Intravesical Bacillus Calmette-Guérin (Tokyo 172 Strain) Therapy: Significance of Concomitant Carcinoma in Situ. *Int Urol Nephrol.* 33(1):41-47. 2002.

53. Takashi M, Wakai K, Hattori R, Ono Y, Ohshima S : Evaluation of Multiple Recurrence Events in Superficial Bladder Cancer Patients Treated with Intravesical Bacillus Calmette-Guérin Therapy Using the Andersen-Gill's Model. *Int Urol Nephrol.* 34(3):329-334. 2002.
54. Gotoh M, Ono Y, Hattori R, Kinukawa T, Ohshima S : Laparoscopic Adrenalectomy for Pheochromocytoma : Morbidity Compared with Adrenalectomy for Tumors of Other Pathology. *J Endourol.* 16(4):245-250. 2002.
55. Hattori R, Ono Y, Fukuhara N, Katoh M, Ohshima S, Kinoshita Y, Nimura H : Usefulness of Cooling Perfusion Apparatus in Cadaveric Kidney Perfusion. *Transplant Proc.* 34(5):1469-1472. 2002.
56. Fukuhara N, Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Nishiyama N, Yamada S, Kamihira O, Ohshima S : Long-Term Outcome of Tacrolimus in Cadaveric Kidney Transplantation from Non-Heart-Beating Donors. *Transplant Proc.* 34(5):1577-1579. 2002.
57. Tanabe K, Takahashi K, Takahara S, Uchida K, Ohshima S, Toma H, Sonoda T, for the Japanese Tacrolimus Study Group : Outcome of Kidney Transplantation from Non-Heart-Beating Donors Followed by Tacrolimus Immunosuppression in Japan. *Transplant Proc.* 34(5):1580-1582. 2002.
58. Takahara S, Takahashi K, Uchida K, Ohshima S, Toma H, Sonoda T, for the Japanese Tacrolimus Study Group : Excellent Results Following 3 Years of Tacrolimus Immunosuppression in Kidney Transplantation Recipients in Japan : Overall Analysis of More Than 1000 Patients. *Transplant Proc.* 34(5):1597-1599. 2002.
59. Yoshimura N, Takahara S, Uchida K, Takahashi K, Ohshima S, Toma H, Sonoda T, for the Japanese Tacrolimus Study Group : Safety Analysis Following Tacrolimus Immunosuppression in Renal Transplant Recipients in Japan:3-Year Results in Over 1000 Patients. *Transplant Proc.* 34(5):1600-1603. 2002.
60. Takahashi K, Takahara S, Uchida K, Ohshima S, Toma H, Sonoda T, for the Japanese Tacrolimus Study Group : Successful Results After 3 Years' Tacrolimus Immunosuppression in ABO-Incompatible Kidney Transplantation Recipients in Japan. *Transplant Proc.* 34(5):1604-1605. 2002.
61. Uchida K, Takahashi K, Takahara S, Ohshima S, Toma H, Sonoda T, for the Japanese Tacrolimus Study Group : Excellent 3-Year Results Following Living-Donor Kidney Transplantation and Tacrolimus Immunosuppression in Japan. *Transplant Proc.* 34(5):1606-1607. 2002.
62. Hasegawa A, Takahashi K, Ito K, Ohshima S, Uchida K, Sonoda T, for the Japanese Tacrolimus Study Group : Optimal Use of Tacrolimus in Living Donor Renal Transplantation in Children. *Transplant Proc.* 34(5):1939-1941. 2002.
63. Hatsuse K, Ono Y, Kinukawa T, Hirabayashi S, Hattori R, Yamada S, Ohshima S : Long-Term Results of Endopyeloureterotomy Using the Transpelvic Extrareteral Approach. *Urology.* 60(2):233-238. 2002.
64. Kuriki O, Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Nishiyama N, Yamada S, Ohshima S : Laparoscopic Radical Nephrectomy for Renal Cell Carcinoma. *Aktuelle Urol.* 34(4):244-246. 2003.
65. Hattori R, Ono Y, Yoshimura N, Hoshinaga K, Nishioka T, Ishibashi M, Ohshima S : Long-Term Outcome of Kidney Transplant Using Non-Heart-Beating Donor : Multicenter Analysis of Factors Affecting Graft Survival. *Clin Transplant.* 17(6):518-521. 2003.
66. Tsuji Y, Okamura K, Nishimura T, Okamoto N, Kobayashi M, Kinukawa T, Ohshima S : A New Endoscopic Ureteral Reimplantation for Primary Vesicoureteral Reflux (Endoscopic TrigonoplastyII). *J Urol.* 169(3):1020-1022. 2003.
67. Sonoda T, Takahara S, Takahashi K, Uchida K, Ohshima S, Toma H, Tanabe K, Yoshimura N : Outcome of 3 Years of Immunosuppression with Tacrolimus in More Than 1,000 Renal Transplant Recipients in Japan. *Transplantation.* 75(2):199-204. 2003.
68. Fukatsu A, Ono Y, Ito M, Yoshino Y, Hattori R, Gotoh M, Ohshima S : Relationship Between Serum Prostate-Specific Antigen and Calculated Epithelial Volume. *Urology.* 61(2):370-374. 2003.
69. Yoshino Y, Ono Y, Hattori R, Gotoh M, Kamihira O, Ohshima S : Retroperitoneoscopic Nephroureterectomy for Transitional Cell Carcinoma of the Renal Pelvis and Ureter : Nagoya Experience. *Urology.* 61(3):533-538. 2003.
70. Saika T, Ono Y, Hattori R, Gotoh M, Kamihira O, Yoshikawa Y, Yoshino Y, Ohshima S : Long-term Outcome of Laparoscopic Radical Nephrectomy for Pathologic T1 Renal Cell Carcinoma. *Urology.* 62(6):1018-1023. 2003.

＜ 和文論文 ＞

1. 竹内宣久, 大島伸一, 藤田民夫, 小野佳成, 絹川常郎: 中京病院で行っている免疫抑制法. 腎移植・血管外科. 8(2):88-95. 1997.
2. 大島伸一, 絹川常郎: 腎移植後の晩期急性拒絶反応に対するスパニジンによる2期的治療法の経験. 診療手帖. 133(1997年2月):5-7. 1997.
3. 小野佳成, 加藤範夫, 武田明久, 山田伸, 水谷一夫, 横井繁明, 大島伸一, 新谷一郎: ウロレーズを使用したVLAPの検討. 前立腺レーザー治療研究会記録集. 22-26. 1997.
4. 竹内宣久, 大島伸一, 小野佳成, 佐橋正文, 栗山学, 高橋義人, 田中卓二, 清水弘之, 河田幸道, 三宅弘治: 進行前立腺癌の治療 第II群各種内分泌療法の実績(化学内分泌療法を含む) 7. Stage D 前立腺癌初期治療としての内分泌化学療法の評価. 第23回尿路悪性腫瘍研究会記録. 45-50. 1997.
5. 近藤隆夫, 松浦治, 竹内宣久, 栗木修, 上平修, 橋本好正, 大島伸一: 同時発生した両側精巣セミノーマの1例—本邦報告例の検討—. 泌尿器科紀要. 43(11):795-798. 1997.
6. 長谷川友紀, 大島伸一, 山川和夫: 意思表示カードの効果的な配布方法についての検討. 今日の移植. 11(2):239-244. 1998.
7. 近藤隆夫, 絹川常郎, 田中國晃, 辻克和, 古川亨, 橋本好正, 竹内宣久, 大島伸一: ドナー腎に Fibromuscular Dysplasia を有する生体腎移植の2例. 腎移植・血管外科. 10(1):69-73. 1998.
8. 水谷一夫, 大島伸一: 腎移植を成功させるためのチェックポイント 高齢者. 腎と透析. 45(4):498-501. 1998.
9. 本山治, 長谷川昭, 小原武博, 服部元史, 川口洋, 高橋公太, 上山泰淳, 中井秀郎, 小川修, 川村猛, 都築一夫, 大島伸一: 小児腎移植後免疫抑制療法における副腎皮質ステロイド剤離脱の試み(1990~1996年の成績). 日本小児腎不全学会雑誌. 18:243-245. 1998.
10. 岡村菊夫, 高土宗久, 日比初紀, 辻克和, 下地敏雄, 大島伸一, 高木康治, 鈴木靖夫, 水谷一夫, 小野佳成, 加藤隆範, 小林峰生: Poor-Risk非セミノーマ胚細胞腫瘍の臨床的検討. 泌尿器科紀要. 44(4):265-272. 1998.
11. 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一: Acute Late Rejectionの治療と予後. 泌尿器科紀要. 44(5):347-351. 1998.
12. 古川亨, 服部良平, 絹川常郎, 竹内宣久, 佐橋正文, 小野佳成, 松浦治, 山田伸, 加藤範夫, 大島伸一: 膀胱全摘除術後のHemi-Kock代用膀胱の長期成績およびQOL調査. 泌尿器科紀要. 44(7):461-467. 1998.
13. 都築一夫, 大島伸一: 腎移植は腎外症状をいかに改善するか—骨・Ca代謝. 泌尿器外科. 11(9):1127-1132. 1998.
14. 辻克和, 三嶋敦, 岡村菊夫, 大島伸一, 近藤厚生, 岡本典子: 膈内異物が原因で発生した女兒尿道膿瘍. 臨床泌尿器科. 52(5):345-348. 1998.
15. 大島伸一, 太田和夫, 大橋靖雄, 園田孝夫, 高木弘, 岡隆宏, 高橋公太, 打田和治, 奥山明彦, 高原史郎, 土肥雪彦, 遠藤忠雄, 山口裕, 両角國男: 新規シクロスポリン現行製剤で維持療法中の腎移植患者におけるシクロスポリンMEPCへの切り替え試験—シクロスポリン現行製剤を対照とした多施設共同 well controlled 比較試験—. 今日の移植. 12(Suppl):43-64. 1999.
16. 打田和治, 太田和夫, 高木弘, 岡隆宏, 園田孝夫, 遠藤忠雄, 高橋公太, 大島伸一, 奥山明彦, 高原史郎, 土肥雪彦, 山口裕, 両角國男: 新規腎移植患者におけるシクロスポリンMEPCの臨床使用経験. 今日の移植. 12(Suppl):65-77. 1999.
17. 岡村菊夫, 加藤範夫, 辻克和, 小野佳成, 大島伸一: 内視鏡下三角部形成術による治療成績. 小児外科. 31(4):409-413. 1999.
18. 橋本好正, 田中國晃, 古川亨, 近藤隆夫, 絹川常郎, 天野泉, 竹内宣久, 松浦治, 大島伸一: 自家移植部位に, 9年間に2回の局所再発をきたした二次性副甲状腺機能亢進症の1例. 腎と透析. 46(別冊 腎不全外科1999):35-37. 1999.
19. 福原信之, 水谷一夫, 勝野暁, 田中篤史, 西村達弥, 弓場宏, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一: 左尿管結紮5カ月後, 閉塞解除により腎機能が回復した1例. 腎と透析. 46(別冊 腎不全外科1999):67-68. 1999.
20. 水谷一夫, 後藤百万, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一, 古川亨, 田中國晃, 絹川常郎, 山田伸, 松浦治, 服部良平: 尿路変更の変遷について. 東海ストーマリハビリテーション研究会誌. 19(1):47-50. 1999.

21. 伊藤博, 三嶋敦, 西村達弥, 後藤百万, 岡村菊夫, 大島伸一, 辻克和, 岡本典子, 渡辺博幸: 小児尿路結石の臨床的研究. 日本小児泌尿器科学会誌. 8:112-115. 1999.
22. 長谷川友紀, 雨宮浩, 高原史郎, 大島伸一, 高橋公太, 深尾立, 寺尾慧, 北川定謙: 小児腎臓移植レシピエント選択基準についての検討. 日本透析医学会雑誌. 32(11):1397-1400. 1999.
23. 岡村菊夫, 弓場宏, 西村達弥, 水谷一夫, 高士宗久, 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 進行性胚細胞腫瘍に対する後腹膜リンパ節郭清術の検討. 泌尿器科紀要. 45(2):95-101. 1999.
24. 黒田和男, 後藤百万, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一: 子宮筋腫による閉尿の3例. 泌尿器科紀要. 45(2):115-117. 1999.
25. 岡村菊夫, 弓場宏, 水谷一夫, 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: Poor-Risk胚細胞腫瘍に対する末梢血幹細胞移植併用大量化学療法 of の検討. 泌尿器科紀要. 45(11):793-798. 1999.
26. 弓場宏, 後藤百万, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一: 進行性胚細胞腫瘍に対するPBSCT併用超大量療法. 泌尿器外科. 12(6):661-666. 1999.
27. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: Neobladderの合併症とその対策—Neobladderにおける尿失禁と排尿障害. 泌尿器外科. 12(12):1417-1422. 1999.
28. 上平修, 黒田和男, 磯部安朗, 弓場宏, 松浦治, 近藤厚生, 小野佳成, 大島伸一: 血液型不適合腎移植後のサイトメガロウイルス肺炎に対し、ステロイド大量投与およびガンシクロビル、ホスカネット併用療法にて治癒した一例. 移植. 35(6):345-351. 2000.
29. 服部良平, 小野佳成, 絹川常郎, 平林聡, 山田伸, 大島伸一: 小児における腹腔鏡下腎手術. Jpn J Endourol ESWL. 13(1):33-38. 2000.
30. 後藤百万, 小野佳成, 服部良平, 大島伸一: 腹腔鏡下根治的腎摘除術. 腎移植・血管外科. 12(2):78-83. 2000.
31. 服部良平, 小野佳成, 後藤百万, 吉川羊子, 吉野能, 大島伸一: 腹腔鏡下前立腺全摘除術(後腹膜到達法): 血管処理について. 腎移植・血管外科. 12(2):120-124. 2000.
32. 服部良平, 小野佳成, 後藤百万, 吉川羊子, 山田伸, 西村達弥, 大島伸一: 腎腫瘍性病変に対する腹腔鏡下腎部分切除術. 腎移植・血管外科. 12(2):131-136. 2000.
33. 西山直樹, 藤田民夫, 絹川常郎, 服部良平, 山田伸, 小野佳成, 大島伸一: 透析患者の腎癌の諸問題透析、腎移植患者に対する腹腔鏡下根治的腎摘除術. 腎と透析. 48(別冊 腎不全外科2000):31-33. 2000.
34. 福原信之, 橋本好正, 古川亨, 辻克和, 田中國晃, 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一: 慢性腎不全患者に対する腹腔鏡下腎摘除術の経験. 腎と透析. 48(別冊 腎不全外科2000):67-69. 2000.
35. 加藤真史, 水谷一夫, 近藤隆夫, 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一, 古川亨, 絹川常郎: 献腎移植の際膀胱腫瘍を認めた1例. 腎と透析. 48(別冊 腎不全外科2000):73-75. 2000.
36. 岡田正軌, 本多靖明, 三井健司, 水本裕之, 瀧知弘, 日比初紀, 山田芳彰, 深津英捷, 小野佳成, 大島伸一: 腎盂尿管移行部狭窄に対するEndopyelotomyの検討. 西日本泌尿器科. 62(8):433-435. 2000.
37. 山田伸, 小野佳成, 大島伸一: 腎盂尿管移行部狭窄症に対するエンドパイロトミー施行前腎機能と術後腎機能の回復. 泌尿器科紀要. 46(9):667-670. 2000.
38. 大島伸一, 高橋公太, 打田和治, 高原史郎, 園田孝夫: 腎移植におけるFK506顆粒剤の第III相試験成績—カプセル剤からの切り換え試験(12週間投与)とprimary試験—. 移植. 36(1):20-38. 2001.
39. 小野佳成, 服部良平, 後藤百万, 吉川羊子, 吉野能, 大島伸一: 腹腔鏡下前立腺全摘除: 術後腹膜到達法. Jpn J Endourol ESWL. 14(1):37-41. 2001.
40. 大島伸一, 野々村克也: VURに対する新しい腔内手術. Jpn J Endourol ESWL. 14(1):55. 2001.
41. 岡村菊夫, 辻克和, 小野佳成, 大島伸一: 内視鏡下三角部形成術(Endoscopic Trigonoplasty C)の適応と手術術式. Jpn J Endourol ESWL. 14(1):56-60. 2001.
42. 小野佳成, 大島伸一: 前立腺癌における内分泌療法、内分泌化学療法、化学療法の現況. Tumor Dormancy Therapy. 3(4):289-292. 2001.
43. 辻克和, 絹川常郎, 山本茂樹, 福原信之, 古川亨, 田中國晃, 都築一夫, 大島伸一: 腎機能障害を来した膀胱尿管逆流症の検討. 日本小児腎不全学会雑誌. 21:160-163. 2001.
44. 後藤百万, 吉川羊子, 小野佳成, 大島伸一, 加藤久美子, 加藤隆範, 近藤厚哉, 武田宗万, 伊藤いづみ, 井口昭久: 老人施設における高齢者排尿管理に関する実態と今後の戦略: アンケートおよび訪問聴き取り調査. 日本神経因性膀胱学会誌. 12(2):207-222. 2001.

45. 服部良平, 小野佳成, 後藤百万, 吉川羊子, 平林聡, 山田伸, 大島伸一: 腹腔鏡下前立腺全摘除術—10例の検討—. 日本泌尿器科学会雑誌. 92(6):603-608. 2001.
46. 深津顕俊, 岡村菊夫, 西村達弥, 小野佳成, 大島伸一: 後腹膜腔鏡下膀胱憩室切除術の試み. 日本泌尿器科学会雑誌. 92(6):636-639. 2001.
47. 岡村菊夫, 水谷一夫, 服部良平, 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 胚細胞腫瘍患者に対する末梢血造血幹細胞採取法の検討. 泌尿器科紀要. 47(6):397-403. 2001.
48. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: Ho:YAGレーザーを用いた上部尿路通過障害に対する内視鏡下狭窄部分切開術. 泌尿器外科. 14(2):111-117. 2001.
49. 田邊一成, 東間紘, 高橋公太, 深尾立, 阿岸鉄三, 渕之上昌平, 小原武博, 打田和治, 絹川常郎, 吉村了勇, 高原史郎, 大島伸一: わが国における新規腎移植患者に対する Basiliximab(シムレクト)の急性拒絶抑制効果及び安全性の検討. 移植. 37(1):18-31. 2002.
50. 寺岡慧, 平野哲夫, 里見進, 長谷川昭, 打田和治, 秋山隆弘, 田中信一郎, 進藤和彦, 中村信之, 大島伸一: 脳死移植法施行後の心停止下腎移植成績. Organ Biology. 9(3):243-264. 2002.
51. 寺岡慧, 大島伸一, 平野哲夫, 里見進, 長谷川昭, 内田和治, 秋山隆弘, 田中信一郎, 進藤和彦, 中村信之: 献腎移植の現状と今後の課題. 今日の移植. 15(2):147-153. 2002.
52. 大島伸一(訳・解説): 臓器提供に関する家族の同意に影響を与える因子. JAMA〔日本語版〕. 2002年3月号:101-109. 2002.
53. 西山直樹, 藤田民夫, 絹川常郎, 山田伸, 上平修, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 腫瘍径 5cm 以上の腎癌に対するリンパ節郭清を伴う腹腔鏡下根治的腎摘除術. Jpn J Endourol ESWL. 15(1):23-26. 2002.
54. 木村恭祐, 松浦治, 磯部安朗, 上平修, 近藤厚生, 小野佳成, 大島伸一: 腎移植におけるMMFの使用経験. 腎移植・血管外科. 14(1):29-32. 2002.
55. 木村亨, 平野篤志, 野尻佳克, 古川亨, 辻克和, 絹川常郎, 田中國晃, 大島伸一: 高齢ドナーより心停止後摘出された腎を用いた献腎移植の1例. 腎移植・血管外科. 14(1):59-63. 2002.
56. 吉野能, 深津顕俊, 吉川羊子, 服部良平, 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 透析患者に対する腹腔鏡下根治的腎摘除術. 腎と透析. 52(別冊 腎不全外科 2002):110-111. 2002.
57. 本山治, 佐藤真理, 相川厚, 小原武博, 長谷川昭, 近本裕子, 服部元史, 白髪宏司, 伊藤克己, 穴戸清一郎, 中井秀郎, 本田雅敬, 都築一夫, 柳原俊雄, 小川修, 斉藤和英, 高橋公太, 大島伸一: シクロスポリン使用の小児腎移植における最終身長への検討. 日本小児腎不全学会雑誌. 22:251-253. 2002.
58. 後藤百万, 吉川羊子, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一, 岡村菊夫: 高齢者排尿管理における排尿管理マニュアル導入の有用性. 日本排尿機能学会誌. 13(2):290-300. 2002.
59. 岡村菊夫, 長谷川友紀, 後藤百万, 関成人, 三浦久幸, 橋本樹, 山口脩, 内藤誠二, 大島伸一: 介護者, 看護師, 一般内科医向きの高齢者尿失禁タイプ分析のための排尿障害診断質問票. 日本排尿機能学会誌. 13(2):301-311. 2002.
60. 深津顕俊, 服部良平, 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 精巣鞘膜自家移植にて治療した Peyronie 病の2例. 日本泌尿器科学会雑誌. 93(3):487-490. 2002.
61. 後藤百万, 吉川羊子, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 被在宅看護高齢者における排尿管理の実態調査. 泌尿器科紀要. 48(11):653-658. 2002.
62. 絹川常郎, 大島伸一, 小野佳成, 服部良平: 慢性拒絶反応の病態と治療 急性拒絶反応の慢性拒絶反応発症に与える影響について(ワークショップ). 泌尿器科紀要. 48(11):685-691. 2002.
63. 高橋公太, 齋藤和英, 高原史郎, 深尾立, 阿岸鉄三, 渕之上昌平, 東間紘, 小原武博, 打田和治, 絹川常郎, 吉村了勇, 大島伸一: Basiliximab(シムレクト)の腎移植後1ヶ月間の拒絶反応抑制効果ならびに外国臨床データの国内への外挿可能性の考察. 移植. 38(1):83-94. 2003.
64. 上平修, 小野佳成, 絹川常郎, 服部良平, 後藤百万, 平林聡, 山田伸, 大島伸一: 腹腔鏡下根治的腎摘除術における合併症の検討. Jpn J Endourol ESWL. 16(3):251-255. 2003.
65. 加藤真史, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一, 木下良彦, 二村寛: 冷却機能をもった灌流装置による死体内腎灌流の有用性. 低温医学. 29(1):15-18. 2003.
66. 服部良平, 小野佳成, 山本徳則, 大島伸一: 阻血と腎機能. 低温医学. 29(3):59-63. 2003.

67. 山本徳則, 藤澤正人, 野入英世, 南学正臣, 藤田喜久, 片岡則之, 戸村裕一, 小笠原康夫, 絹川常郎, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 小児難治性腎不全に対する自己臍帯静脈血管内皮細胞移植治療. 西日本泌尿器科. 65(7):427-432. 2003.
68. 関成人, 内藤誠二, 大島伸一, 平尾佳彦, 東原英二: 前立腺肥大症に対する各種外科的治療法の普及と医療者意識に関するアンケート調査結果. 日本泌尿器科学会雑誌. 94(4):495-502. 2003.
69. 松沼寛, 小野佳成, 服部良平, 後藤百万, 吉野能, 大島伸一: 精巣腫瘍に対する腹腔鏡下後腹膜リンパ節郭清術の臨床的検討. 泌尿器科紀要. 49(7):377-380. 2003.
70. 服部良平, 小野佳成, 後藤百万, 吉川羊子, 雑賀隆史, 吉野能, 勝野暁, 大島伸一: 腹腔鏡下腎部分切除術. 臨床泌尿器科. 57(5):301-307. 2003.

外1編 全71編

〈 総説 等 〉

1. 小野佳成, 大島伸一: 泌尿器科がん治療における体腔鏡下手術の現状と将来. 癌の臨床. 43(12):1450-1454. 1997.
2. 辻克和, 大島伸一: 読影トレーニングのための超音波・CT診断アトラス 超音波編 腹部 尿路結石・水腎症・急性陰嚢疾患. 救急医学. 21(10):1371-1382. 1997.
3. 大島伸一, 小野佳成, 絹川常郎, 岡村菊夫, 後藤百万: 泌尿器科学の最近の進歩と動向. 現代医学. 45(2):229-235. 1997.
4. 小野佳成, 大島伸一: 死体腎移植におけるタクロリムスの応用. 腎と透析. 43(5):651-655. 1997.
5. 大島伸一: 排尿障害—前立腺肥大症とその治療—. 豊田加茂医報. 286:23-29. 1997.
6. 大島伸一: 泌尿器科領域における腹腔鏡下手術. 名大医学部学友時報. 566(1997.3):8-10. 1997.
7. 大島伸一: 腹腔鏡下腎・腹腎摘除術は、標準術式になりうるか? 序文. 泌尿器外科. 10(10):1017. 1997.
8. 大島伸一: わが国の死体腎移植. 臨床泌尿器科. 51(10):715-722. 1997.
9. 大島伸一: 法案成立後の移植医療. 外科. 60(7):1. 1998.
10. 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一: 臓器移植の臨床—腎臓. 最新医学. 53(10):2183-2189. 1998.
11. 大島伸一: QOLを重視した治療と高齢者に多い疾患. 毎日ライフ. 29:12-15. 1998.
12. 大島伸一: 腹腔鏡下手術をはじめにあたり. Jpn J Endourol ESWL. 11(1):1-2. 1998.
13. 重藤和弘, 大島伸一, 加藤治, 山内喜美子: 市民公開シンポジウム「臓器移植法施行半年を迎えて」. JTR ニュース. 2123(平成10年9月12日):1-8. 1998.
14. 大島伸一: 特集: Tacrolimus はじめに. 腎移植・血管外科. 9(2):75. 1998.
15. 小野佳成, 大島伸一: 死体腎移植例に対するタクロリムス使用免疫抑制療法. 腎移植・血管外科. 9(2):98-103. 1998.
16. 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一: トロッカーの挿入部位—泌尿器科領域の場合—. 内視鏡外科. 3(6):484-487. 1998.
17. 岩月舜三郎, 岩城裕一, 藤堂省, 大島伸一: 日本の移植医療を考える. 日本医事新報. 3855(1998年3月14日):73-78. 1998.
18. 大島伸一, 小野佳成: 臓器移植の今後の展望 腎臓移植. 日本外科学会雑誌. 99(11):765-769. 1998.
19. 大島伸一, 秋山隆弘: 第47回日本泌尿器科学会中部総会シンポジウム II 腎移植における拒絶反応の診断と治療の進歩—司会の言葉—. 泌尿器科紀要. 44(5):339-340. 1998.
20. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 尿失禁の手術的療法: コラーゲン注入. 泌尿器外科. 11(12):1447-1452. 1998.
21. 大島伸一: 脳死臓器移植開始を迎えた臓器移植各論 腎臓移植. Cardiovascular Med-Surg. 1(1):53-58. 1999.
22. 大島伸一: 脳死で提供された腎臓の移植. ウロ・ナーシング. 4(2):62. 1999.
23. 大島伸一: 新医療技術の導入とその評価—現状における問題. Jpn J Endourol ESWL. 12(1):1-3. 1999.

24. 絹川常郎, 大島伸一: 実践に即した腎移植後合併症の診断と治療 泌尿器科学的合併症. 腎移植・血管外科. 10(2):135-140. 1999.
25. 大島伸一, 小野佳成: 移植腎の長期定着に及ぼす因子とその対策 尿路感染と尿路障害. 腎と透析. 47(4):495-498. 1999.
26. 大島伸一: 「特集 腎移植はここまできた！」向上する成績と残された課題. ぜんじんきょう. 175(1999.9.6):2-4. 1999.
27. 大島伸一: 高齢者の排尿障害. 名古屋医報. 1161(平成11年3月16日):1-5. 1999.
28. 小野佳成, 大島伸一: 生体臓器移植 生体腎移植. Pharma Medica. 17(3):61-65. 1999.
29. 大島伸一: 高齢者に多い泌尿器科疾患とQOLを重視した治療. 毎日ライフ. 29(12):12-14. 1999.
30. 大島伸一, 小野佳成: 腎臓移植の現況と今後の課題. Medical Postgraduates. 37(5):362-367. 1999.
31. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 泌尿器科画像診断 腎動脈瘤. 臨床泌尿器科. 53(4):302-304. 1999.
32. 大島伸一, 小野佳成: 腎移植. カレントセラピー. 18(10):1807-1812. 2000.
33. 大島伸一: 臓器移植について. 埼玉県薬剤師会雑誌. 26(2):12-24. 2000.
34. 大島伸一: 排尿の仕組み: 「排尿障害とは」大切な排尿の働き、スコアで確認しよう. 産経新聞社医療シンポジウム中高年のからだ講座「おしっこが出ない悩み、もれる悩み」. 2, 5-6. 2000.
35. 岩元則幸, 大島伸一: 透析患者の腎癌の諸問題 総括. 腎と透析. 48(別冊 腎不全外科 2000):49-50. 2000.
36. 絹川常郎, 大島伸一: 腎移植統計と移植にかかる費用. 腎と透析. 49(増刊):159-163. 2000.
37. 服部良平, 大島伸一: 生体腎ドナーの腎摘出術. 腎と透析. 49(増刊):444-446. 2000.
38. 大島伸一, 小野佳成: ぜひ知っておきたい特殊な診察 泌尿器科的診察. 治療と診断. 88(4):612-616. 2000.
39. 後藤百万, 大島伸一: Stress Leak Point Pressure(SLPP)の臨床的意義. 排尿障害プラクティス. 8(1):32-39. 2000.
40. 絹川常郎, 小野佳成, 大島伸一: 腹腔鏡補助手術の応用と展開 腹腔鏡下根治的腎摘術. 泌尿器外科. 13(1):17-21. 2000.
41. 大島伸一: 前立腺疾患の症状. 毎日ライフ. 31(10):18-21. 2000.
42. 大島伸一: 腎移植 コメント. 臨床泌尿器科. 54(12):923-924. 2000.
43. 小野佳成, 大島伸一: 慢性拒絶反応の克服. 医学のあゆみ. 196(13):991-994. 2001.
44. 大島伸一: 臓器移植の社会資源の整備に向けて. 医学のあゆみ. 196(13):1051-1054. 2001.
45. 大島伸一: 腎移植の現状と問題点. 医工学治療. 13(3):123-127. 2001.
46. 絹川常郎, 大島伸一: 腎移植. OPE Nursing. 16(1):61-67. 2001.
47. 大島伸一, 平尾佳彦, 長谷川友紀: 前立腺肥大症ガイドライン. 診断と治療. 89(9):1667-1681. 2001.
48. 大島伸一, 小野佳成: 腎疾患における低侵襲性手術の現状. 臨床成人病. 31(10):1341-1345. 2001.
49. 大島伸一: 増える前立腺がんを早く見つける法. そこが知りたいがん医療最先端 2. 6:120-125. 2001.
50. 大島伸一, 平尾佳彦, 長谷川友紀: 前立腺肥大症の診療ガイドライン. 日本医事新報. 4039(2001年9月22日):1-11. 2001.
51. 大島伸一: 日本におけるEBM診療 排尿障害. Medicament News. 1706(2001年10月15日):19-21. 2001.
52. 大島伸一: 内視鏡手術への現状と将来展望(3) — Minimally Invasive Surgery を中心として — 総論. Medical Postgraduates. 39(4):279-280. 2001.
53. 小野佳成, 服部良平, 後藤百万, 大島伸一: 内視鏡手術への現状と将来展望(3) — Minimally Invasive Surgery を中心として — 泌尿器科領域. Medical Postgraduates. 39(6):486-492. 2001.
54. 吉川羊子, 大島伸一: 前立腺肥大症. 薬局. 52(増刊):591-596. 2001.
55. 吉川羊子, 大島伸一: 高齢者の代表的な疾患の臨床知識と薬物療法 尿失禁. 薬局. 52(11):2510-2515. 2001.

56. 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: アルゴンビームコアギュレーターの使い方. 臨床泌尿器科. 55(10):881-885. 2001.
57. 大島伸一: 高齢者の排尿障害に対する治療戦略. 朝日新聞医療セミナー. 愛知県医師会, 名古屋. pp.1-18. 2002.
58. 大島伸一: 脳死臓器移植. 医学のあゆみ. 200(13):1225. 2002.
59. 大島伸一: Editorial Comment. Urology Today. 9(3):65-67. 2002.
60. 大島伸一: 日本における臓器提供の推進. 今日の移植. 15(5):408-411. 2002.
61. 後藤百万, 大島伸一: 排泄機能指導士. Geriatric Medicine. 40(7):927-930. 2002.
62. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: 前立腺肥大症の診療ガイドライン. 日本臨床. 60(増刊号11):311-317. 2002.
63. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: BPHの診療ガイドライン. 排尿障害プラクティス. 10(3):235-243. 2002.
64. 寺岡慧, 大島伸一, 平野哲夫, 里見進, 長谷川昭, 打田和治, 秋山隆弘, 田中信一郎, 進藤和彦, 中村信之: わが国における献腎移植の現状と今後の課題. 泌尿器外科. 15(5):539-547. 2002.
65. 吉野能, 大島伸一: インターフェロン療法 腎がん. 毎日ライフ. 33(9):33-35. 2002.
66. 石塚修, 西澤理, 平尾佳彦, 大島伸一: EBMに基づく前立腺肥大症診療 薬物療法. 泌尿器外科. 15(9):1013-1018. 2002.
67. 大島伸一: 腎移植の現状と将来. 臨床と研究. 79(7):1166-1170. 2002.
68. 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 血管吻合・縫合について. 臨床泌尿器科. 56(13):1155-1160. 2002.
69. 服部良平, 小野佳成, 後藤百万, 吉川羊子, 吉野能, 雑賀隆史, 勝野暁, 大島伸一: 腹腔鏡下前立腺全摘除術(後腹膜到達法). 臨床泌尿器科. 56(13):1191-1198. 2002.
70. 大島伸一: 大学人から見た最近の医療事情. 旭丘時報. 44(2003年1月25日)号:2-4. 2003.
71. 大島伸一: 泌尿器科ガイドラインの背景と現況 企画にあたって. Urology View. 1(6):7. 2003.
72. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: BPH: BPHのガイドラインについて. Urology View. 1(6):50-56. 2003.
73. 大島伸一: 高齢者における排尿障害対策. 刈谷医師会報. 362:3-5. 2003.
74. 吉野能, 大島伸一: 抗がん剤治療薬の副作用対策—泌尿器系腫瘍における副作用—. 緩和医療学. 5(4):331-337. 2003.
75. 小野佳成, 服部良平, 後藤百万, 山本徳則, 吉川羊子, 吉野能, 加藤真史, 田承賢, 荒木英盛, 木村亨, 小松智徳, 松川宜久, 大島伸一: 腹腔鏡下根治的前立腺摘除術. 現代医学. 51(2):259-267. 2003.
76. 大島伸一: 国立大法人化で大学病院は何を目指すか. 新医療. 30(4):78-81. 2003.
77. 大島伸一: 独立行政法人化と名古屋大学病院の自立. 新医療. 30(12):37-39. 2003.
78. 大島伸一: 臓器提供を推進するモデル事業—病院開発モデルとドナー・アクション・プログラム—. 腎と透析. 55(4):637-640. 2003.
79. 大島伸一: EBM診療ガイドラインの読み方・使い方 前立腺肥大症. メディカル朝日. 32(12):24-25, 29. 2003.
80. 大島伸一: 臓器移植におけるドナー確保の対策. Medical Science Digest. 29(9):362-365. 2003.
81. 伊藤恵子, 大島伸一: 医療事故の生ずる背景. 泌尿器外科. 16(12):1233-1238. 2003.
82. 後藤百万, 大島伸一: 前立腺肥大症のガイドラインとは何か. 臨床泌尿器科. 57(4):79-84. 2003.
83. 大島伸一, 山本徳則: 疾患別臨床検査パーフェクトガイド 前立腺疾患. 診断と治療. 92(Suppl):375-384. 2004.
84. 大島伸一: いま学会は専門職能集団として何をすべきか—腹腔鏡下手術による患者死亡事故を受けて. 日本医事新報. 4165(2004年2月21日):73-76. 2004.
85. 大島伸一: 移植外科医から腎臓内科医に期待するもの. 日本腎臓学会誌. 46(2):49-51. 2004.

＜ ビデオ ＞

1. 守殿貞夫, 後藤俊弘, 大島伸一: 前立腺炎症候群へのアプローチはここまで進んだ—現時点における診療の実際と課題—. Video Journal of JUA. 4. 1998.
2. 大島伸一, 近藤厚生, 後藤百万: 尿失禁に対する day surgery—尿道周囲コラーゲン注入療法, TVTスリング法. 尿失禁術式シリーズ Vol.1 (大島伸一 総監修). ゼネカ薬品, 大阪. 1999.
3. 大島伸一, 近藤厚生, 後藤百万, 加藤久美子: 前膈壁形成術+ステーミー法, 恥骨固定式スリング法, 恥骨膈スリング法. 尿失禁術式シリーズ Vol.2 (大島伸一 総監修). ゼネカ薬品, 大阪. 1999.
4. 辻克和, 絹川常郎, 田中國晃, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一: 膀胱鏡尿管逆流症に対する内視鏡手術の試み—Endoscopic Trigonoplasty II—. Video Journal of JUA. 7. 2001.
5. 後藤百万, 大島伸一: 腹圧性尿失禁・膀胱瘤に対する経膈的手術. 泌尿器科領域「最新手技」シリーズ. 2002.
6. 上平修, 松浦治, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 腹腔鏡下根治的腎摘除術における遊離組織の捕獲と摘出の工夫. Video Journal of JUA. 8. 2002.
7. 辻克和, 絹川常郎, 田中國晃, 木村亨, 野尻佳克, 古川亨, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一: 新しい内視鏡下逆流防止術—Endoscopic Trigonoplasty II—. Video Journal of JUA. 8. 2002.

＜ 対談・鼎談・座談会 等 ＞

1. 野本亀久雄, 大島伸一, 山崎親雄, 藤田民夫, 打田和治: 第3回明日の移植を考える—脳死移植の再開に向けて—望まれる腎移植ネットワークの構築に向けて. Trends & Topics in Transplantation. 8(3):3-7. 1997.
2. 大島伸一, 高木守道: 中日新聞健康セミナー「前立腺肥大症を学ぶ」男、50歳を過ぎたら注意が必要. 中日新聞. 1998年8月9日朝刊. p. 19.
3. 野本亀久雄, 大島伸一, 高橋公太, 星長清隆, 玉置勲: 第4回明日の移植を考える—脳死移植の再開に向けて—年間2,000例の腎移植実現を目指して. Trends & Topics in Transplantation. 9(1):3-8. 1998.
4. 野本亀久雄, 大島伸一, 長谷川友紀, 重藤和弘, 大久保通方: 第5回明日の移植を考える—脳死移植の再開に向けて—有効な意思表示カードを考える. Trends & Topics in Transplantation. 9(2):3-8. 1998.
5. 野本亀久雄, 大島伸一, 門田守人, 里見進: 第6回明日の移植を考える—脳死移植の再開に向けて—肝移植を考える. Trends & Topics in Transplantation. 9(3):3-8. 1998.
6. 菱田仁, 井形昭弘, 阿部稔雄, 大島伸一, 小寺良尚, 橋本俊, 森本紳一郎, 神野哲夫, 島田康弘, 大塚雅喜: 愛知県における臓器移植—脳死臓器移植再開に当たって—. 現代医学. 47(1):101-118. 1999.
7. 大島伸一, 星長清隆, 横山逸男, 川合明彦, 石橋道男, 東間紘: 脳死下での臓器の管理法・摘出法. 腎移植・血管外科. 11(2):109-124. 1999.
8. 大島伸一, 大輪次郎, 余語弘, 安藤明夫, 岡久美子: 名大病院は変わるか 問われる研究優先—公開シンポジウム. 中日新聞. 1999年8月10日朝刊. P6.
9. 野本亀久雄, 大島伸一, 寺岡慧, 町野朔, 貝谷伸: 第7回明日の移植を考える—脳死移植の再開に向けて—臓器移植法成立時の根本精神とは何か. Trends & Topics in Transplantation. 10(1):3-8. 1999.
10. 大島伸一, 貫井英明, 田中秀治, 玉置勲: 第8回明日の移植を考える—脳死移植の再開に向けて—脳神経外科・救急医療の現場では、移植医療に対してどのように対応が変わってきたのか. Trends & Topics in Transplantation. 10(2):3-8. 1999.
11. 大島伸一, 寺岡慧, 長谷川友紀, 門田守人: 脳死移植第1例を振り返って—Best Open Fairは保証されたか—. Trends & Topics in Transplantation. 臨時増刊号:10-15. 1999.
12. 野本亀久雄, 大島伸一, 平賀聖悟, 堤邦彦, 大田原佳久: 第1回明日の移植を考える—脳死移植の定着に向けて—ドナーアクション. Trends & Topics in Transplantation. 10(3):3-8. 1999.
13. 大島伸一, 出口隆, 郡健二郎, 細見三英子: 医療シンポジウム「おしっこが出ない悩み、もれる悩み」. 産経新聞. 2000年3月28日朝刊. pp. 20-21.

14. 黒川清, 両角國男, 大島伸一, 長谷川昭: 透析対策と腎移植—腎移植はベストの選択肢になり得るか—. 日本医事新報. 3961(2000年3月25日):1-13. 2000.
15. 勝又義直, 井口昭久, 大島伸一, 太田美智男, 木村卓, 桜井寛久, 菱田光洋, 飛田拓哉, 青黄千津子, 小田切拓也, 鈴木祥代, 鈴木宗幸, 村本明生, 小熊麻子, 三浦奈穂子: 名古屋大学医学部の現状とこれからと～学生生活について考える～. 名大医学部学友時報. 600(2000.1):9-10. 2000.
16. 大島伸一, 有賀徹, 町野朔, 宮田速雄, 山谷えり子, 野本亀久雄: 情報公開とプライバシーのあり方. Trends & Topics in Transplantation. 11(1):3-9. 2000.
17. 野本亀久雄, 大島伸一, 田代俊孝, 米本昌平: 移植医療と教育. Trends & Topics in Transplantation. 11(2):3-8. 2000.
18. 野本亀久雄, 大島伸一, 大和田隆, 小中節子, 藤堂省: ドネーションを考える2. Trends & Topics in Transplantation. 11(3):3-8. 2000.
19. 太田宏, 各務伸一, 溝上雅史, 大島伸一, 吉田純, 大西一功: サイトカインおよびサイトカイン遺伝子療法 of 最近の展開—インターフェロンを中心として—. 現代医学. 49(2):249-274. 2001.
20. 高橋公太, 大島伸一, 長谷川友紀, 鈴木和雄, 秋山政人: 献腎移植を増やすには. 今日の移植. 14(2):163-179. 2001.
21. 大島伸一, 寺岡慧, 田中秀治, 吉田克法, 両角國男: 腎移植の現状と課題. 腎臓. 23(2-3):114-134. 2001.
22. 野本亀久雄, 大島伸一, 諏訪英行, 鈴木和雄, 松井初世, 清水牧子: ドナーアクション2 静岡県編. Trends & Topics in Transplantation. 12(1):3-8. 2001.
23. 野本亀久雄, 大島伸一, 高橋公太, 秋山政人, 西方好: ドナーアクション2 新潟県編. Trends & Topics in Transplantation. 12(2):3-9. 2001.
24. 野本亀久雄, 大島伸一, 田中信一郎, 安田和広, 丸橋民子, 三宅修: ドナーアクション2 岡山県編. Trends & Topics in Transplantation. 12(3):3-9. 2001.
25. 大島伸一, 高橋公太, 高原史郎, 打田和治, 田邊一成: 新しい免疫抑制療法—ヒトマウスキメラ型CD25モノクローナル抗体—. 今日の移植. 15(1):65-77. 2002.
26. 大島伸一, 平尾佳彦, 長谷川友紀, 野中博: 「前立腺肥大症診療ガイドライン」の現状と展望. 新薬と治療. 52(3):4-13. 2002.
27. 大島伸一, 鈴木和雄, 高橋公太, 野本亀久雄, 長谷川昭: ドナーアクション2 新シェアリングシステムに向けて. Trends & Topics in Transplantation. 13(1):3-9. 2002.
28. 大島伸一, 篠崎尚史, 鈴木和雄, 高橋公太, 野本亀久雄, 長谷川友紀, 藤田民夫: ドナーアクション3 アクション! 献腎移植増加へ. Trends & Topics in Transplantation. 13(2):3-9. 2002.
29. 大島伸一, 五十里明, 藤田民夫: 愛知県が「管理マニュアル」作成 排尿障害まず診察を. 読売新聞. 2002年10月17日朝刊. p. 29.
30. 大島伸一, 鈴木和雄, 高橋公太, 野本亀久雄, 長谷川友紀: ドイツのドネーションに学ぶ. Trends & Topics in Transplantation. 14(1):3-8. 2003.
31. 大島伸一, 佐古和廣, 嶋村剛, 中川原譲二, 野本亀久雄, 長谷川友紀: ドナーアクション3北海道編. Trends & Topics in Transplantation. 14(2):3-9. 2003.
32. 大島伸一, 秋山政人, 田中秀治, 堤邦彦, 野本亀久雄, 長谷川友紀: 臓器移植における家族ケアとコミュニケーション. Trends & Topics in Transplantation. 15(1):3-8. 2004.

＜ インタビュー ＞

1. 「ヘルススポット」名大医学部泌尿器科学教授に就任した大島伸一さん. 読売新聞. 1997年1月21日朝刊. p. 25.
2. 教授就任. 名大医学部学友時報. 565(1997.2):1-2. 1997.
3. 「INTERVIEW」がん医療最先端 増える前立腺がんを早く見つける法 大島伸一氏に聞く. AFLAC REPORT. 92:12-15. 1999.
4. がん医療最先端 大島伸一氏に聞く 増える前立腺がんを早く見つける法. ファミリーラポール. 1999年3月号:2-4. 1999.

5. 「名古屋東間税会事務局インタビュー」医療最前線 前立腺肥大症. 名古屋東間税会会報. 22(1999年3月)号:6-7. 1999.
6. 脳死移植のいま 法施行4年県内からの報告<1> 厚労省臓器移植委員 大島さんに聞く 臓器提供の底上げ重要. 新潟日報. 2001年10月11日朝刊. p. 19.
7. 「サロン」名大泌尿器科学教授 尿失禁からの自立システム 来月一月にスタート. 読売新聞. 2001年11月21日朝刊.
8. 「サロン」大島伸一・名大泌尿器科学教授 排せつ障害からの自立. 読売新聞. 2002年.
9. 診療ガイドライン第2回前立腺肥大症 医療の安全と質がキーワード 重症度を定量的に評価. Japan Medicine. 2002年6月24日. p. 14.
10. EBMに基づく前立腺肥大症診療ガイドライン. Medical Publisher制作・発行. 1-7. 2002. 9月1日
11. 「サロン」名大病院が目指すもの. 読売新聞. 2002年11月13日朝刊.
12. 病院長決定. 名大医学部学友時報. 635(2002.12):2. 2002.
13. 「メディカルトーク」前立腺肥大症と前立腺がん. 週刊朝日. 平成15年6月20日:90-91. 2003.
14. 名古屋大学医学部附属病院長 大島伸一氏に聞く 法人化をきっかけに国立大学病院は激しい競争の世界へ. 日経ヘルスケア 21. 2003年8月号:44-46. 2003.

〈 論説・エッセー 等 〉

1. 泌尿器科講座の教授就任にあたって—大学人としての責務を果たしたい. 名大病院かわらばん. 16(1997年2月10日):2. 1997. (外5編)
2. 教授就任. 名大医学部学友時報. 565(1997.2):1-2. 1997. (外5編)
3. 「ドクターによる現場発想の管理ノウハウ」連載3 医の倫理的問題が浮上し経済的問題とぶつかる時 経済的判断を優先してはならない. フェイズ3. 1997年1月号:104-105. 1997.
(連載 外18編)
4. 「健康随筆」52歳の転職. 社会保険あいち. 319(1997.1):6. 1997. (連載 外64編)
5. 社会保険「中京病院」から名古屋大学医学部へ. 愛知腎臓財団. 28(1997.6.1):4-5. 1997.
(外10編)
6. 「大学病院日誌」医療技術が進歩 安全管理大切に. 朝日新聞. 2001年1月17日朝刊.
(連載 外26編)
7. 臓器移植の最前線. Medical Academy News. 857(平成15年3月11日):17. 2003.
8. 「ひととき」国立大学法人化 患者本位の改革したい. 中日新聞. 2003年6月27日朝刊.
(連載 外3編)
9. 「論点」真の「専門医」、基準示す時. 読売新聞. 2003年12月3日朝刊.

外28編 全168編

〈 特別講演・基調講演 等 〉

1. Kidney Transplantation and Autotransplantation. Annual Meeting of Korean Urological Association. Invited lecture. Sep.9, 1999. Seoul, Korea.
2. Current Status of Kidney Transplantation of Japan. Department of Urology, Hanyang University Hospital. Invited lecture. Sep.28, 2000. Seoul, Korea.
3. Long-term Outcome of Kidney Transplants from Non-Heart-Beating Donors. The 24th Annual Congress of the Urological Association of the Republic of China. Invited lecture. Aug.25, 2002. Taipei, R. O. C.
4. The Current Status of Donor Nephrectomy in Japan. The Korean Urological Association Spring Meeting. Invited lecture. Apr.19, 2003. Seoul, Korea.

5. 前立腺肥大について. 第 181 回緑医学研究会. 講演. 名古屋. 1997 年 2 月 25 日.
6. 前立腺肥大症について. 成田記念病院第 77 回医学講座. 講演. 豊橋. 1997 年 3 月 28 日.
7. ストレスに克つ. 愛知県社会保険労務士会平成 9 年度第 1 回研修. 講演.
(1) 名古屋. 1997 年 10 月 7 日. (2) 安城. 1997 年 10 月 14 日. (3) 名古屋. 1997 年 10 月 17 日.
8. 移植法案と腎移植. 第 27 回日本腎臓学会西部学術集会. 教育講演. 名古屋. 1997 年 10 月 24 日.
9. 臓器移植 特に腎移植の現況. 日本医師会生涯教育講座・愛知県泌尿器科医会. 講演. 名古屋. 1997 年 10 月 25 日.
10. 腎移植の現況. 市立四日市病院学術講演会. 特別講演. 四日市. 1997 年 10 月 30 日.
11. 排尿障害—前立腺肥大症とその治療—. 豊田加茂医師会学術講演会. 講演. 豊田. 1997 年 11 月 1 日.
12. 臓器移植法案について. 桑名医師会講演. 桑名. 1997 年 11 月 27 日.
13. 腎移植について. 第 198 回日本泌尿器科学会東海地方会. 教育講演. 浜松. 1997 年 12 月 14 日.
14. 日本の腎移植の現況と将来. 第 8 回稷門会研究会. 特別講演. 名古屋. 1998 年 2 月 7 日.
15. 腎移植について. 札幌医科大学泌尿器科セミナー. 講演. 札幌. 1998 年 3 月 27 日.
16. 腎移植に関する最近の動向. 第 10 回腎移植勉強会. 講演. 名古屋. 1998 年 4 月 4 日.
17. 日本臓器移植ネットワーク活動報告. 臓器移植推進懇話会. 特別講演. 那覇. 1998 年 5 月 7 日.
18. 腎移植の現況と法案などについて. 平成 10 年度春季西三医学会. 特別講演. 安城. 1998 年 5 月 24 日.
19. 腎癌の外科的治療の動向. 第 3 回生命科学交流会. 講演. 名古屋. 1998 年 6 月 19 日.
20. 移植と悪性腫瘍. 第 7 回腎不全外科研究会. 講演. 神戸. 1998 年 6 月 26 日.
21. 腎移植について. 第 16 回筑後地区腎移植検討会. 講演. 久留米. 1998 年 7 月 9 日.
22. 最近の移植医療の動向. 第 39 回徳島県泌尿器科疾患研究会. 特別講演. 徳島. 1998 年 8 月 11 日.
23. 病院経営の実践. 平成 10 年度中部ブロック国立大学病院医療保険事務専門研修会. 講義. 1998 年 10 月 12 日.
24. 最近の腎移植の動向. 第 3 回長野県腎移植推進公開講演会. 特別講演. 飯田. 1998 年 10 月 25 日.
25. 前立腺がんと前立腺肥大症—特に PSA (前立腺特異抗原) とその役割—. 愛知診断技術振興財団医学特別記念講演会. 招請講演. 東京. 1998 年 11 月 6 日.
26. 小児科医に必要な泌尿器疾患. 第 30 回小児実地医家懇話会. 講演. 名古屋. 1998 年 11 月 8 日.
27. 高齢者の排尿障害. 第 3 回名古屋市医師会学術講演会. 講演. 名古屋. 1998 年 11 月 28 日.
28. 病院経営におけるコメディカルの役割—病院薬剤師はどのように貢献すべきか. 愛知県病院薬剤師研修会. 講演. 1999 年 2 月 8 日.
29. 泌尿器科治療における最近の動向. 第 34 回日本手術看護学会東海地区. 特別講演. 名古屋. 1999 年 2 月 20 日.
30. 医療の枠を超えた尿失禁. 日本コンチネンス協会愛知支部設立 1 周年記念講演. 基調講演. 名古屋. 1999 年 2 月 27 日.
31. 臓器移植の最近の動向. SL 定期講習会. 講演. 名古屋. 1999 年 2 月 23 日.
32. 腎臓移植及び臓器移植法案について. 第 11 回東三河泌尿器科懇話会. 特別講演. 豊橋. 1999 年 3 月 13 日.
33. チーム医療とは、リーダーとは. 愛媛県病院薬剤師会第 209 回県病薬南予支部薬学セミナー. 特別講演. 宇和島. 1999 年 4 月 10 日.
34. 腎移植の問題点—特に臓器提供に関する問題点—. 第 14 回福岡臓器移植懇話会. 講演. 福岡. 1999 年 6 月 15 日.
35. 泌尿器系疾患の診断と治療—前立腺肥大症とインポテンス. 愛知県社会保険診療報酬支払基金審査会が医術講演会. 講演. 名古屋. 1999 年 7 月 22 日.

36. 前立腺癌とPSA. 平成11年度日本医師会生涯教育講座. 講演. 名古屋. 1999年7月29日.
37. 臓器移植について. 第32回日本薬剤師会学術大会. 特別記念講演. 名古屋. 1999年11月13日.
38. 望ましい医療のあり方—臓器移植問題. 愛知県保険医協会新聞部座談会. 講演. 名古屋. 1999年12月4日.
39. 高齢者の排尿障害について. 平成11年度高齢者医療に関する講習会. 講演. 大府. 1999年12月10日.
40. 臓器移植について. トヨタ記念病院内教育講演会. 講演. 豊田. 2000年1月17日.
41. 腎臓移植の最近の動向と臓器提供に関する諸問題. 第6回山口県腎臓病研究会. 特別講演. 山口. 2000年2月17日.
42. 前立腺肥大症について. 愛知診断技術振興財団講演会. 講演. 名古屋. 2000年3月4日.
43. 最近の臓器移植の現状—おもに腎臓提供の問題について—. 静岡県腎移植臨床勉強会. 講演. 浜松. 2000年3月24日.
44. 臓器の移植に関する法律施行後の問題点と今後の課題. 愛知腎臓財団平成11年度施設内移植情報担当者研修会. 講演. 名古屋. 2000年3月26日.
45. 最新治療の現況—臓器移植についての問題点—. 愛知県外科医会生涯教育研修会. 講演. 名古屋. 2000年4月27日.
46. 最近の移植の動向について. 成田記念病院医学講座. 講演. 豊橋. 2000年5月10日.
47. 腎移植と尿検査. 第26回日本臨床検査技師会一般検査研修会. 講演. 名古屋. 2000年8月27日.
48. 前立腺疾患について. 豊橋内科医会学術講演会. 講演. 豊橋. 2000年12月21日.
49. 腎移植の現状と問題点. 第16回日本医工学治療学会. 教育講演. 名古屋. 2001年2月10日.
50. 腎移植の現況と問題点. 長野腎不全フォーラム. 特別講演. 松本. 2001年3月18日.
51. 排尿障害対策. 第1回北九州泌尿器科医会. 講演. 小倉. 2001年4月26日.
52. 腎臓移植の現況. 第40回岡山腎疾患懇話会. 講演. 岡山. 2001年5月12日.
53. 「泌尿器科領域のEBMによる治療ガイドライン」作成までの実際の経緯と薬物療法の今後. 薬物療法評価研究会. 講演. 京都. 2001年5月30日.
54. 腎移植の外科的合併症及び現状と問題点. 第21回九州腎臓移植研究会. 講演. 大分. 2001年6月30日.
55. 高齢者排尿障害の治療戦略. 第3回京滋前立腺フォーラム. 特別講演. 京都. 2001年7月7日.
56. 献腎移植のブレイクスルー. 第19回南大阪泌尿器科研究会. 講演. 堺. 2001年7月28日.
57. 腎移植の現況. 群馬県臓器移植に関する講演会. 講演. 前橋. 2001年11月21日.
58. 厚生労働省科学研究・大島班の報告. 山口県献腎移植推進に関する説明会. 講演. 山口. 2001年11月22日.
59. 日本の腎移植の現況と平成13年度厚生科学研究事業について. 第2回佐賀県臓器移植推進研究会. 講演. 佐賀. 2001年12月20日.
60. 臨床医学について. 第1回京都Urology Forum. 講演. 京都. 2002年2月8日.
61. 高齢者の排尿障害に対する治療戦略. 日本医師会生涯教育講座 朝日新聞医療セミナー. 講演. 名古屋. 2002年2月23日.
62. これからの臨床医像—総論. 東濃泌尿器科ネットワーク研究会. 特別講演. 多治見. 2002年2月28日.
63. 腎移植に関する最近の動向. 徳島腎移植研究会. 講演. 徳島. 2002年6月26日.
64. 高齢者の排尿障害に対する治療戦略. 第1回西濃泌尿器フォーラム. 特別講演. 大垣. 2002年10月5日.
65. 最近の腎移植の動向. 第6回秋田腎不全研究会. 特別講演. 秋田. 2002年11月10日.
66. 臓器提供・移植施設の拡充について. 第3回福井県臓器移植普及推進検討会. 講演. 福井. 2002年11月11日.

67. 診療ガイドラインとプロフェッショナルフリーダム. 第3回東京都病院管理適正化推進事業. 講演. 東京. 2002年12月17日.
68. 高齢者における排尿障害対策. 刈谷内科医会. 特別講演. 刈谷. 2002年12月21日.
69. 全国的な臓器提供(特に腎臓提供)に関する取り組みについて. 第1回奈良県腎臓等臓器移植推進会議. 講演. 奈良. 2003年1月16日.
70. 臓器提供推進のためのストラテジー. 第7回福島移植フォーラム. 特別講演. 福島. 2003年2月22日.
71. 医療事故解明に臨んで「事故調査委員会設置」のありかた—名古屋大学医学部附属病院の場合—. 第144回東海病院管理学研究会. 講演. 名古屋. 2003年2月27日.
72. 腎臓提供推進の現状. 日本臓器移植ネットワーク中日本支部第1回臓器提供に関する愛知県懇談会. 講演. 名古屋. 2003年3月28日.
73. 腎移植の現状と課題. 第50回山陰透析懇話会. 講演. 鳥取. 2003年3月30日.
74. 病院改革と医工連携. 名古屋工業大学先導研究 V.L. 医学工学研究所創設記念講演会. 講演. 名古屋. 2003年5月20日.
75. 医療提供機能と質の保証. 文部科学省平成15年度国立大学附属病院リスクマネージャー研修. 講演. 東京. 2003年6月11日.
76. 最近の腎移植の現状と問題. 第16回広島腎疾患研究会. 特別講演. 広島. 2003年7月24日.
77. 前立腺肥大症診療ガイドラインについて. 出雲医師会学術講演会. 特別講演. 出雲. 2003年9月12日.
78. 医療安全に関する基本的な考え方. 厚生労働省医療安全に関するワークショップ. 講演. 名古屋. 2003年11月6日.
79. 高齢者の尿失禁対策とシステム作りについて. 志太・榛原地域リハビリテーションセミナー. 講演. 藤枝. 2003年11月15日.
80. 排尿障害ガイドラインと排尿障害対策. 第5回山梨泌尿器科排尿障害検討会. 特別講演. 甲府. 2004年1月22日.
81. ドナー・アクション・プログラムについて. 沖縄県臓器移植講演会. 講演. 那覇. 2004年1月24日.

外11回 全94回

＜ シンポジウム・パネルディスカッション ＞

1. Tang X, Chan TM, Chu S-H, Yoshimura N, Ohshima S, Ahmad G : Kidney Session, Steroid Withdrawal. The 1st Prograf Asia / Oceania Work Shop. Concurrent Roundtable Discussion. Feb. 25, 2001. Nago, Japan.
2. Ohshima S, Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Kamihira O : Long-term Outcome of Kidney Transplants from Non Heart-Beating Donors. 2001 A Transplant Odyssey. Symposium. Aug. 23, 2001. Istanbul, Turkey.
3. Fujita T, Takahashi K, Ohshima S : Trials to Increase Donors by a Model Designed to Develop Hospitals in Japan. The 3rd Korea-Japan Transplantation Forum. Sep. 28, 2002. Seoul, Korea.
4. Kinukawa T, Takahara S, Takahashi K, Uchida K, Ohshima S, Toma H, Tanabe K, Yoshimura N, Sonoda T : Outcome of 3 Years of Immunosuppression With Tacrolimus in More Than 1,000 Renal Transplant Recipients in Japan. The 8th Congress of the Asian Society of Transplantation. Sep. 23, 2003. Kuala Lumpur, Malaysia.
5. Yamamoto T, Ono Y, Hattori R, Yoshino Y, Kato M, Kinukawa T, Ohshima S : Micro Circulation in Kidney Graft. The 4th Japan-Korea Transplantation Forum. Oct. 28, 2003. Osaka, Japan.
6. 大島伸一, 長谷川友紀, 福井次矢 : 新医療技術の導入とその評価. 第11回日本Endourology・ESWL学会. 鼎談. 四日市. 1997年11月22日.
7. 黒川清, 大島伸一, 岩月舜三郎, 岩城裕一, 重藤和弘 : 脳死法案成立後の腎移植医療のゆくえ—献腎移植を推進するための組織づくり—. 第31回日本腎移植臨床研究会市民公開講座. 横浜. 1998年1月24日.

8. 重藤和弘, 大島伸一, 加藤治, 山内喜美子: 「臓器移植法施行半年を迎えて」何が変わり、また何が変わらないのか. 臓器移植推進連絡会 市民公開シンポジウム. パネルディスカッション. 東京. 1998年4月19日.
9. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一, 吉川羊子, 近藤厚哉: 自排尿型新膀胱における排尿の質. 第5回日本神経因性膀胱学会. シンポジウム. 豊中. 1998年10月2日.
10. 大島伸一: 腎移植と今後の課題. 日本学術会議医療技術開発学研究連絡会・第34回日本移植学会. シンポジウム(臓器移植と人工臓器の現状と今後). 東京. 1998年12月2日.
11. 大島伸一: 腎移植の展開. 第25回日本医学会総会. パネルディスカッション(脳死と臓器移植). 東京. 1999年4月2日.
12. 絹川常郎, 松浦治, 西山直樹, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 腎移植を成功させるためのチェックポイント—高齢者—. 第87回日本泌尿器科学会総会. パネルディスカッション. 大阪. 1999年4月14日.
13. 後藤百万, 小野佳成, 大島伸一: Hemi-Kock法: 手術成績と合併症. 第87回日本泌尿器科学会総会. ビデオシンポジウム(膀胱再建手術). 大阪. 1999年4月14日.
14. 大島伸一, 大輪次郎, 余語弘, 安藤明夫, 岡久美子: これからの名大病院に何を期待するか. 名大病院公開シンポジウム. 名古屋. 1999年8月7日.
15. 大島伸一: 日本臓器移植ネットワークの立場から. 第35回中部外科学会総会. シンポジウム(中部地区における臓器移植の現状、問題点、ならびに将来の展望). 名古屋. 1999年9月3日.
16. 大島伸一: 国際性を配慮した泌尿器科の将来. 第49回日本泌尿器科学会中部総会. パネルディスカッション. 大阪. 1999年11月18日.
17. 山田伸, 小野佳成, 大島伸一: 腎盂尿管移行部狭窄症に対するエンドパイロトミー施行前腎機能と術後腎機能の回復. 第49回日本泌尿器科学会中部総会. シンポジウム(進行性腎障害への泌尿器科的対応—治療のタイミングと予後). 大阪. 1999年11月18日.
18. 大島伸一, 出口隆, 郡健二郎, 細見三英子: おしっこが出ない悩み、もれる悩み. 産経新聞社医療シンポジウム中高年のからだ講座. パネルディスカッション. 名古屋. 2000年3月2日.
19. 絹川常郎, 大島伸一: 長期透析例 現状と移植成績. 第88回日本泌尿器科学会総会. シンポジウム(High Risk移植の治療指針: 長期透析例と下部尿路障害). 札幌. 2000年6月8日.
20. 山田伸, 小野佳成, 服部良平, 後藤百万, 平林聡, 大島伸一: 腹腔鏡下前立腺全摘除術. 第13回日本内視鏡外科学会総会. パネルディスカッション(癌治療における内視鏡外科の位置付け(骨盤内臓器)). 大阪. 2000年12月14日.
21. 大島伸一: 腎臓移植の現況と将来. 第28回日本集中治療医学会総会. シンポジウム(臓器移植, 現在から未来へ). 東京. 2001年3月9日.
22. 絹川常郎, 大島伸一: DGF(Delayed Graft Function). 第89回日本泌尿器科学会総会. パネルディスカッション(腎移植長期生着に向けての課題: 免疫抑制療法によって越えられない問題点). 神戸. 2001年4月16日.
23. 大島伸一: 名古屋大学における卒後臨床研修への取り組み. 医療事故情報センター総会記念シンポジウム. パネルディスカッション(医師の研修制度について考える). 名古屋. 2001年5月26日.
24. 内藤和彦, 三島淳二, 西山直樹, 藤田民夫, 絹川常郎, 上平修, 松浦治, 山田伸, 平林聡, 服部良平, 小野佳成, 大島伸一: 献腎移植におけるDelayed Graft Functionの検討. 第37回日本移植学会総会. シンポジウム(腎移植). 東京. 2001年12月16日.
25. 寺岡慧, 平野哲夫, 里見進, 長谷川昭, 打田和治, 秋山隆弘, 田中信一郎, 進藤和彦, 中村信之, 大島伸一: 献腎移植の問題点と推進のための課題. 第35回日本腎移植臨床研究会. シンポジウム(献腎移植再生に向けて). 箱根. 2002年2月7日.
26. 大島伸一: 泌尿器科疾患の診療標準化について. 第90回日本泌尿器科学会総会. パネルディスカッション(前立腺肥大症診断ガイドライン). 東京. 2002年4月19日.
27. 上平修, 小野佳成, 服部良平, 加藤真史, 大島伸一, 吉開泰信: 長期移植腎生着患者におけるCD28陰性CD4陽性リンパ球の検討. 第90回日本泌尿器科学会総会. ワークショップ(腎臓移植をめぐる最近の話題). 東京. 2002年4月20日.
28. 服部良平, 小野佳成, 大島伸一, 絹川常郎: 腎血管性病変に対する手術療法. 第18回腎移植・血管外科研究会. Case Study & Debate(腎血管病変に対する治療戦略—OPEかIVRか—). 登別. 2002年6月21日.

29. 大島伸一：臓器と組織移植のCoordination, Cooperationについて. 第1回日本組織移植学会. シンポジウム. 東京. 2002年8月2日.
30. 大島伸一, 高橋公太, 長谷川昭, 鈴木和雄, 松屋福蔵, 杉谷篤, 佐藤滋, 高原史郎, 長谷川友紀: 臓器提供病院開発事業の現状と展望. 第38回日本移植学会総会. 教育シンポジウム. 東京. 2002年10月17日.
31. 平野篤志, 木村亨, 野尻佳克, 古川亨, 辻克和, 絹川常郎, 大島伸一, 小野佳成, 服部良平, 松浦治, 上平修, 山田伸, 栗木修, 平林聡, 藤田民夫, 西山直樹: 献腎移植成績に及ぼす移植前透析期間の影響の検討. 第38回日本移植学会総会. シンポジウム(移植と血液浄化の現状). 東京. 2002年10月18日.
32. 加藤真史, 小野佳成, 服部良平, 古川亨, 絹川常郎, 上平修, 大島伸一: 生体腎移植長期生着例におけるCD28⁺CD4⁺T細胞の役割. 第38回日本移植学会総会. シンポジウム(免疫調節). 東京. 2002年10月19日.
33. 服部良平, 小野佳成, 加藤真史, 深津顕俊, 大島伸一, 木下良彦, 二村寛: 冷却機能をもった灌流措置による死体内腎灌流の有用性. 第38回日本移植学会総会. シンポジウム(臓器保存). 東京. 2002年10月19日.
34. 大島伸一, 長谷川友紀, 藤田民夫, 大田原佳久, 秋山政人, 高原史郎, 高橋公太: Donor Action Programとは. 第36回日本臨床腎移植学会. 腎移植連絡協議会. 下呂. 2003年1月29日.
35. 大島伸一: 独立行政法人化を踏まえて今. 第6回東海・北陸地区病院経営シンポジウム. シンポジウム(病院の選択). 名古屋. 2003年2月15日.
36. 大島伸一: 総括. 第91回日本泌尿器科学会総会. シンポジウム(献腎移植を増やすにはドナー・アクション・プロトコル). 徳島. 2003年4月3日.
37. 服部良平, 小野佳成, 大島伸一, 絹川常郎, 山田伸, 上平修: 水腎症に対するEndopyelotomy. 第91回日本泌尿器科学会総会. ディベート(腎盂形成術). 徳島. 2003年4月5日.
38. 大島伸一: 医療事故と病院のリスクマネジメント. 日本賠償科学第42回研究会. シンポジウム. 日進. 2003年6月7日.
39. 大島伸一: これからの腎移植について. 第48回(社)日本透析医学会学術集会・総会. シンポジウム(献腎提供を推進するためには一病院開発モデルとDonor Action Program). 大阪. 2003年6月20日.
40. 大島伸一: 特別発言. 第30回日本低温医学会総会. シンポジウム(北海道の臓器移植推進のために). 札幌. 2003年11月27日.
41. 大島伸一: ドナー・アクション・プログラムについて. 第30回日本低温医学会総会. シンポジウム(献腎移植の成績向上のために). 札幌. 2003年11月28日.

外5回 全46回

〈 一般向け講演 〉

1. 腎移植の現況. 杏林大学泌尿器科・第一内科腎移植講演会「腎移植と豊かな透析生活を目指して」. 講演. 三鷹. 1997年3月30日.
2. 腎臓移植の最近の動向. 愛知県医師会・中日新聞健康セミナー. 講演. 名古屋. 1999年2月20日.
3. 臓器移植をめぐる話題について. 鯨光月例会. 講演. 名古屋. 1999年7月12日.
4. 臓器移植について. 第17回武豊町医師会健康教育講演会. 講演. 武豊. 1999年9月12日.
5. 脳死・臓器移植その後. 名古屋市名東区生涯学習センター現代日本事情. 講演. 名古屋. 1999年9月29日.
6. 臓器移植について. 名古屋熱田ライオンズクラブ. 講演. 名古屋. 1999年10月13日.
7. くらしと医療—2000年にあたり—. 名古屋市名東区生涯学習センター現代日本事情. 講演. 名古屋. 1999年10月27日.
8. おしっこの悩み—排尿障害とは?. 産経新聞社医療シンポジウム中高年のからだ講座. 講演. 名古屋. 2000年3月2日.
9. 脳死判定と臓器移植. 瀬戸市民生涯学習セミナー. 講演. 瀬戸. 2000年3月3日.

10. 日本の移植の現況と問題点. 第43回日本腎臓学会学術総会市民公開講座. 講演. 名古屋. 2000年7月2日.
11. 大学人から見た最近の医療事情. 旭丘PTA教育講演会. 講演. 名古屋. 2002年10月29日.
12. 高齢者尿失禁の現状と治療戦略. 市民公開講座 高齢者排尿障害対策シンポジウム. 基調講演. 名古屋. 2003年2月5日.
13. 名大病院改革と県の地域医療のあり方. 自由民主党愛知県議員団研修会. 講演. 名古屋. 2003年6月25日.

外7回 全19回

〈 テレビ・ラジオ出演 〉

1. 「明日の治療指針」排尿障害—最新の診断と治療法. BSC/ラジオたんぱ. 2003年2月1日放送.
2. 「ドキュメンタリー」理想のかたち～名古屋大学病院 改革300日～. 東海テレビ. 2003年10月13日放送.

国立長寿医療研究センター総長 (2004(平成16)年3月～2014(平成26)年3月)

＜ 提 言 ＞

1. 提言「臨床医学会の社会的責任—腎・泌尿・生殖医療分野の立場から—」（日本学術会議 臨床医学委員会 腎・泌尿・生殖分科会）. 2008(平成20)年7月24日公表.
2. 提言「生きがいを支える歯科医療に期待し、提言する」（日本歯科医師会 生きがいを支える国民歯科会議）. 2010(平成22年)11月3日公表.
3. 提言「よりよい高齢社会の実現を目指して—老年学・老年医学の立場から—」（日本学術会議 臨床医学委員会 老年分科会）. 2011(平成23)年7月21日公表.
4. 社会保障制度改革国民会議報告書～確かな社会保障を将来世代に伝えるための道筋～(社会保障制度改革国民会議). 2013(平成25年)8月6日公表.

＜ ガイドライン ＞

1. EBM に基づく尿失禁ガイドライン(泌尿器科領域の治療標準化に関する研究班(大島伸一 班長)編). じほう, 東京. 2004.
2. 前立腺癌診療ガイドライン(日本泌尿器科学会 編). 金原出版, 東京. 2006.

＜ 編 書 ＞

1. 佐藤智, 大島伸一, 高久史麿, 山口昇, 島崎謙治, 和田忠志 編: 明日の在宅医療第1巻 在宅医療の展望. 中央法規出版. 東京. 2008.
2. 井藤英喜, 大島伸一, 鳥羽研二 編: 統計データでみる高齢者医療. 文光堂, 東京. 2009.
3. 大久保満男, 大島伸一 編: 歯科医師会からの提言 食べる—生きる力を支える. 中央公論新社, 東京. 2012.
 - (1) 第1巻 生活の医療.
 - (2) 第2巻 いのちと食.
 - (3) 第3巻 3.11の記録 震災が問いかけるコミュニティの医療.

外2巻 全7巻

＜ 著 書 ＞

1. 大島伸一: これからの高齢社会を考える. 名古屋学芸大学フォーラム2006～第1回卒業・大学院開設記念～講演集. 名古屋学芸大学, 日進. 2006. pp. 3-24.
2. 大島伸一: 第1章かんがえる「健康について」「長寿国ニッポン」「長寿医療」「ライフデザインと納得寿命」. セルフ・メディカ予防と健康の事典. 小学館, 東京. 2007. pp. 22-33.
3. 大島伸一: 大島郡医師会創立50周年記念 特別講演「長寿社会に向けての医療の展望」. 大島郡医師会50周年記念誌. (社)大島郡医師会, 名瀬. 2007. p. 19.
4. 大島伸一: 看取りまで行える在宅医療の推進. 日本歯科評論 別冊2008 医療連携による在宅歯科医療(箱崎守男, 石井拓男, 角町正勝 編). ヒョーロンパブリッシャーズ, 東京. 2008. pp. 40-45.
5. 大島伸一: 日本の医学・医療制度が抱える課題と在宅医療. 明日の在宅医療第1巻 在宅医療の展望(佐藤智, 大島伸一, 高久史麿, 山口昇, 島崎謙治, 和田忠志 編). 中央法規出版, 東京. 2008. pp. 302-332.
6. 大島伸一: 医療制度改革における在宅医療の位置づけ・役割(医療提供制度における在宅医療). 在宅医療ガイドブック(田城孝雄 編). 中外医学社, 東京. 2008. pp. 2-6.
7. 大島伸一: 治す医療から、治し支える医療へ. 第11回介護保険推進全国サミット in ひがしうら記録集. 第11回介護保険推進全国サミット in ひがしうら実行委員会. 知多郡東浦. 2011. pp. 11-22.

8. 大島伸一：歯科医療のパラダイム転換—専門職能団体の社会的責任。歯科医師会からの提言 食べる—生きる力を支える第1巻 生活の医療(大久保満男, 大島伸一 編)。中央公論新社, 東京。2012. pp. 218-230.
9. 大島伸一：治す医療から治し支える医療へ。治す医療から、支える医療へ 超高齢社会に向けた在宅ケアの理論と実践(ホームホスピス宮崎 編)。図書出版木星舎, 福岡。2012. pp. 139-167.
10. 大島伸一：はじめに。都市型の看護介護医療等連携研究会 住み慣れた地域で暮らし続けるために講演集I。一般財団法人杉浦地域医療振興財団, 安城。2013. pp. 2-4.
11. 大島伸一：患者のために医師がいる。老年医学系統講義テキスト(日本老年医学会 編)。西村書店, 東京。2013. pp. 7-8.
12. 大島伸一：これからの日本の医療、地域医療の在り方。(公財)宇都宮市医療保健事業団開設30周年記念誌。(公財)宇都宮市医療保健事業団, 宇都宮。2014. pp. 13-26.

外 22 編 全 34 編

＜ 英文論文 ＞

1. Kato M, Ono Y, Kinukawa T, Hattori R, Kamihira O, Ohshima S : Long Time Follow up of CD28-CD4+ T Cells in Living Kidney Transplant Patients. Clin Transplant. 18(3):242-246. 2004.
2. Nishiyama H, Habuchi T, Watanabe J, Teramukai S, Tada H, Ono Y, Ohshima S, Fujimoto K, Hirano Y, Fukushima M, Ogawa O : Clinical Outcome of Large-Scale Multi-Institutional Retrospective Study for Locally Advanced Bladder Cancer: a Surgery Including 1131 Patients Treated during 1990-2000 in Japan. European Urology. 45(2):176-181. 2004.
3. Seo IY, Ono Y, Yoshikawa Y, Saika T, Yoshino Y, Katsuno S, Araki H, Ohshima S : Early Experience of Laparoscopic Radical Nephrectomy for T3b Renal Cell Carcinoma. Int J Urol. 11(9): 778-781. 2004.
4. Hasegawa A, Motoyama O, Shishido K, Ito K, Tsuzuki K, Takahashi K, Ohshima S : A Prospective Trial of Steroid Withdrawal after Renal Transplantation in Children: Results Obtained 1990 and 2002. Transplant Proc. 36(2S):216S-219S. 2004.
5. Yoshikawa Y, Ono Y, Hattori R, Gotoh M, Yoshino Y, Katsuno S, Kato M, Ohshima S : Laparoscopic Partial Nephrectomy for Renal Tumor: Nagoya Experience. Urology. 64(2):259-263. 2004.
6. Gotoh M, Kamihira O, Kinukawa T, Ono Y, Ohshima S, Ogrigasa H : Comparison of Tamsulosin and Naftopidil for Efficacy and Safety in the Treatment of Benign Prostatic Hyperplasia: a Randomized Controlled Trial. BJU Int. 96(4):581-586. 2005.
7. Fukuhara N, Ono Y, Hattori R, Nishiyama N, Yamada S, Kamihira O, Kinukawa T, Ohshima S : The Long-Term Outcome of Tacrolimus in Cadaveric Kidney Transplantation from Non-Heart Beating Donors. Clin Transplant. 19(2):153-157. 2005.
8. Matsui Y, Nishiyama H, Watanabe J, Teramukai S, Ono Y, Ohshima S, Fujimoto K, Hirao Y, Fukushima M, Ogawa O : The Current Status of Perioperative Chemotherapy for Invasive Bladder Cancer: A Multiinstitutional Retrospective Study in Japan. Int J Clin Oncol. 10(2):133-138. 2005.
9. Okamura K, Takaba H, Kamihira O, Kinukawa T, Ono Y, Ohshima S, Nagasaka T : Determination of the Relative Probability for Prostate Cancer to Avoid Unnecessary Biopsy. Int J Urol. 12(4):346-352. 2005.
10. Nakano Y, Okamura K, Takamura S, Okamura N, Narushima M, Yoshino Y, Hattori R, Ono Y, Ohshima S, Nagasaka T : Measurement of Prostate Specific Antigen Complexed to α 1-Antichymotrypsin to Avoid Unnecessary Biopsy in Patients with Serum Prostate Specific Antigen Levels 4-20ng/ml. Int J Urol 12(8):721-727. 2005.
11. Araki H, Ono Y, Hattori R, Yoshino Y, Yamamoto T, Ohshima S : Laparoscopic Pyeloplasty Using Endoscopic GIA Stapler for Ureteropelvic Junction Obstruction. J Endourol 19(2):143-146. 2005.
12. Gupta A, Aragaki C, Gotoh M, Masumori N, Ohshima S, Tsukamoto T, Roehrborn CG : Relationship between Prostate Specific Antigen and Indexes of Prostate Volume in Japanese Men. J Urol. 173(2):503-506. 2005.

13. Motoyama O, Hasegawa A, Ohara T, Satoh M, Shishido S, Honda M, Tsuzuki K, Kinukawa T, Hattori M, Ito K, Ogawa O, Yanagihara T, Saito K, Takahashi K, Ohshima S: A Prospective Trial of Steroid Withdrawal after Renal Transplantation Treated with Cyclosporine and Mizoribine in Children: Results Obtained between 1990 and 2003. *Pediatr Transplant*. 9(2):232-238. 2005.
14. Yoshimura N, Takahara S, Uchida K, Takahashi K, Toma H, Ohshima S, Sonoda T: Safety Analysis after Tacrolimus Immunosuppression in Renal Transplant Recipients in Japan: 5-Year Results in > 1500 Patients. *Transplant Proc*. 37(4):1764-1766. 2005.
15. Sugitani A, Tanaka M, Takahara S, Uchida K, Yoshimura N, Takahashi K, Toma H, Ohshima S, Sonoda T: Long-Term Results of Tacrolimus Therapy for Renal Transplantation in Patients with Diabetic Nephropathy in Japan. *Transplant Proc*. 37(4):1767-1768. 2005.
16. Takahashi K, Takahara S, Uchida K, Yoshimura N, Toma H, Ohshima S, Sonoda T: Successful Results after 5 Years of Tacrolimus Therapy in ABO-Incompatible Kidney Transplantation in Japan. *Transplant Proc*. 37(4):1800-1803. 2005.
17. Akioka K, Takahara S, Ichikawa S, Yoshimura N, Akiyama T, Ohshima S: Factors Predicting Long-Term Graft Survival After Kidney Transplantation: Multicenter Study in Japan. *World J Surg*. 29(2):249-56. 2005.
18. Gotoh M, Yoshikawa Y, Ohshima S: Pathophysiology and Subjective Symptoms in Women with Impaired Bladder Emptying. *Int J Urol*. 13(8):1053-1057. 2006.
19. Matsunuma H, Kagami H, Narita Y, Hata K, Ono Y, Ohshima S: Constructing a Tissue-Engineered Ureter Using a Decellularized Matrix with Cultured Uroepithelial Cells and Bone Marrow-Derived Mononuclear Cells. *Tissue Engineering*. 12(3):509-518. 2006.
20. Senda M, Ito A, Tsuchida A, Hagiwara T, Kaneda T, Nakamura Y, Kasama K, Kiso M, Yoshikawa K, Katagiri Y, Ono Y, Ogiso M, Urano T, Furukawa K, Ohshima S, Furukawa K: Identification and Expression of a Sialyltransferase Responsible for the Synthesis of Disialylgalactosylgloboside in Normal and Malignant Kidney Cells: Downregulation of ST6GalNAc VI in Renal Cancers. *Biochem J*. 402(3):459-470. 2007.
21. Yamamoto T, Noiri E, Ono Y, Doi K, Negishi K, Kamijo A, Kimura K, Fujita T, Kinukawa T, Taniguchi H, Nakamura K, Gotoh M, Shinozaki N, Ohshima S, Sugaya T: Renal L-Type Fatty Acid: Binding Protein in Acute Ischemic Injury. *J Am Soc Nephrol*. 18(11):2894-2902. 2007.
22. Kamidono S, Ohshima S, Hirao Y, Suzuki K, Arai Y, Fujimoto H, Egawa S, Akaza H, Hara I, Hinotsu S, Kakehi Y, Hasegawa T: Evidence-Based Clinical Practice Guidelines for Prostate Cancer (Summary -JUA 2006 edition). *Int J Urol*. 15(1):1-18. 2008.
23. Ohshima S: What is the Current and Future Aging Problem?. *Geriatr Gerontol Int*. 12(1):1. 2012.
24. Arai H, Ouchi Y, Yokode M, Ito H, Uematsu H, Eto F, Ohshima S, Ota K, Saito Y, Sasaki H, Tsubota K, Fukuyama H, Honda Y, Iguchi A, Toba K, Hosoi T, Kita T: Toward the Realization of a Better Aged Society: Messages from Gerontology and Geriatrics. *Geriatr Gerontol Int*. 12(1):16-22. 2012.
25. Motoyama O, Hasegawa A, Aikawa A, Shishido S, Honda M, Tsuzuki K, Kinukawa T, Hattori M, Ogawa O, Yanagihara T, Saito K, Takahashi K, Ohshima S: Final Height in a Prospective Trial of Late Steroid Withdrawal After Pediatric Renal Transplantation Treated With Cyclosporine and Mizoribine. *Pediatr Transplant*. 16(1):78-82. 2012.

〈 和文論文 〉

1. 平野篤志, 藤田高史, 木村亨, 初瀬勝朗, 辻克和, 絹川常郎, 都築一夫, 野尻佳克, 大島伸一: タクロリムスをレスキュー目的で用いた小児腎移植. *今日の移植*. 17(3):429-430. 2004.
2. 吉野能, 小野佳成, 服部良平, 後藤百万, 山本徳則, 吉川羊子, 加藤真史, 荒木英盛, 小松智徳, 松川宜久, 田承賢, 大島伸一: 腎盂尿管癌に対する後腹膜鏡下腎尿管摘除術. *Jpn J Endourol ESWL*. 17(1):10-15. 2004.
3. 服部良平, 小野佳成, 後藤百万, 吉川羊子, 吉野能, 加藤真史, 平林聡, 山田伸, 大島伸一: 腹腔鏡下前立腺全摘除術の検討. *Jpn J Endourol ESWL*. 17(1):77-81. 2004.
4. 松沼寛, 大島伸一, 成田裕司, 各務秀明, 上田実: 泌尿器科領域の再生医療: 脱細胞化尿管と培養移行上皮細胞による尿管再生. *西日本泌尿器科*. 66(3):129-137. 2004.

5. 辻克和, 藤田高史, 木村亨, 平野篤志, 初瀬勝朗, 古川亨, 田中國晃, 絹川常郎, 野尻佳克, 岡村菊夫, 小野佳成, 大島伸一: 原発性膀胱尿管逆流症に対する内視鏡下三角部形成術II. 日本泌尿器科学会雑誌. 97(3):583-590. 2006.

外 11 編 全 16 編

< 総説 等 >

1. 大島伸一: 臓器移植法の6年—臨床面から振りかえる. ジュリスト. 1264:6-11. 2004.
2. 大島伸一: 高齢社会における国立長寿医療センターの役割. Aging & Health. 13(4):26. 2005.
3. 大島伸一: これからの長寿医療研究について. 日本老年医学会雑誌. 42(5):498-503. 2005.
4. 大島伸一: 高齢者の医療: 診断, 治療について. Urology View. 4(2):8-11. 2006.
5. 大島伸一: 高齢者における医学・医療と漢方. 日経メディカル. 5月号別冊付録(2006年5月10日):5-8. 2006
6. 大島伸一: 臨床医学研究について. 日本小児皮膚科学会雑誌. 25(2):73-78. 2006.
7. 大島伸一: 病気腎移植の何が問題なのか—「二つの医療」と医師集団の責任. 日本医事新報. 4324(2007年3月10日):106-114. 2007.
8. 大島伸一: 高齢社会と在宅医療. 日本老年医学会雑誌. 44(6):714-716. 2007.
9. 大島伸一: 「鯨光百三十周年記念講演」超高齢社会～我々はどこに向かうのか～. 鯨光会会報「鯨光」. 591(平成20年3月1日):4-10. 2008.
10. 大島伸一: 後期高齢者医療制度の概要と意義—新しい仕組みとねらい—. Geriatric Medicine. 46(7):687-691. 2008.
11. 大島伸一: 超高齢社会の到来と日本老年医学会の今後. 日本老年医学会雑誌. 45(6):588-590. 2008.
12. 大島伸一: 高齢者の在宅医療と医療連携. Medical Science Digest. 34(6):266-268. 2008.
13. 大島伸一: 日本の医療の今後. 全国自治体病院協議会雑誌. 48(2):121-138. 2009.
14. 大島伸一: 老年総合医の展望. 日本老年医学会雑誌. 46(1):33-34. 2009.
15. 宮武剛, 浜中和子, 川島孝一郎, 角田直枝, 江口研二, 大島伸一, 宮島俊彦: 新たな局面を迎えた緩和ケア—住み慣れた家での最期は可能か. ホスピスケアと在宅ケア. 17(1):40-55. 2009.
16. 大島伸一: 今後の医療提供の方向と在宅医療. Geriatric Medicine. 48(11):1463-1466. 2010.
17. 大島伸一: 医療は変わる. 全国老人保健施設協会機関誌. 21(7):30-33. 2010.
18. 川合秀治, 三根浩一郎, 邊見公雄, 大島伸一: 高齢者にふさわしい医療と介護とは. 全国老人保健施設協会機関誌. 21(7):34-41. 2010.
19. 大島伸一: 在宅医学の展望(I). 日本在宅医学会雑誌. 12(1):17-20. 2010.
20. 大島伸一: 日本の高齢社会をどう捉えるか. 医学のあゆみ. 239(5):327-331. 2011.
21. 大島伸一: 介護職員等によるたんの吸引等の実施の制度化の必要性. 月刊福祉. 94(8):12-16. 2011.
22. 大島伸一: “治す医療から”、“治し支える地域完結型の医療へ”. 栃木県医学会々誌. 42:48-64. 2012.
23. 大島伸一: 専門家の社会的責任. BIO Clinica. 27(10):911. 2012.
24. 大島伸一: 在宅医療の展望. 医薬ジャーナル. 49(4):71-74. 2013.
25. 大島伸一: 超高齢社会と医療. 学術の動向. 18(1):76-79. 2013.
26. 大島伸一: 長寿社会の医療の課題と対策. 現代医学. 61(2):219-229. 2013.
27. 大島伸一: 在宅医療推進におけるわが国のめざす方向性. Geriatric Medicine. 51(5):459-461. 2013.
28. 大島伸一: 転換期での歯科医療～専門職能団体の役割・使命～. 日本歯科医師会雑誌. 65(11):1336-1343. 2013.
29. 大島伸一: 「21世紀日本モデル」の医療の展望と課題—社会保障制度改革国民会議報告を踏まえて. 月刊福祉. 97(3)増刊号:9-22. 2014.

外 19 編 全 48 編

〈 対談・鼎談・座談会 等 〉

1. 坂口力, 長谷川和夫, 柴山漢人, 長嶋紀一, 大島伸一, 大島一博: 痴呆問題の今とこれから. 厚生労働. 59(6):4-11. 2004.
2. 大島伸一, 吉越亘: 国立大学病院の経営改革: 大島伸一前名古屋大学病院長との対談. CDI Newsletter. 72(2005年4月):3-10. 2005.
3. 大島伸一, 中川俊男, 中山健夫, 南砂: 医療報道を考えるー危機意識共有へ医師は何をすべきかー. 日本医事新報. 4292(2006年7月29日):4-19. 2006.
4. 大島伸一, 石田芳弘: 医療と福祉にも哲学を. 今こそローカリズム 石田芳弘対談集. 風媒社, 名古屋. 2006. pp.207-238.
5. 大島伸一, 長谷川友紀, 平川淳一, 南良武: 高齢者医療と認知症対策の現在. 精神科病院マネジメント. 5:2-6. 2006.
6. 井口昭久, 大島伸一, 佐々木英忠, 折茂肇: 老年医学の展望. Geriatric Medicine. 45(1):59-70. 2007.
7. 太田秀樹, 大島伸一, 佐藤美穂子: 満たされて生を全うできる社会の構築のためにー超高齢社会の課題と展望ー. Run & Up. 3(3):6-7. 2007. (連載 外1編)
8. 大島伸一, 浅原利正, 矢作直樹: 大学病院よ、どこへ行く!?. ドクターズマガジン. 98(2008年1月):11-18. 2008.
9. 大島伸一, 伊藤伸一: 地域医療を考えるー医療制度改革についてその1 問われる医療サービスの質. 中日新聞. 2008年2月13日朝刊(尾張版). p. 16. (連載 外2編)
10. 辻哲夫, 大島伸一, 田中紀章, 村松静子, 二川一男, 片山壽: 在宅緩和ケアの標準化により変わるべきわが国の医療モデル. 地域で支える患者本位の在宅緩和ケア(片山壽 監修), 篠原出版社. 東京. 2008. pp.1-34.
11. 大島伸一, 黒岩卓夫, 太田秀樹: “当たり前”の医療への回帰ー在宅医療推進会議の役割を探る. 温(つつむ). 3:4-9. 2009.
12. 大久保満男, 大島伸一, 福原義春: 《新春座談会》 “生きがい”を考える. 日歯広報. 1491(2010年1月5日):4-7. 2010.
13. 中村泉, 大島伸一, 広多勤, 大久保満男: 夢ある歯科医師への道ー歯科医師の未来への展望に向けてー. 日本歯科医師会雑誌. 62(10):1048-1064. 2010.
14. 大島伸一, 鳥羽研二, 佐々木経世, 佐伯達之: 「高齢者医療改革座談会」高齢者が現役で頑張れる環境をつくることで日本の新しい社会が世界から注目される!. 財界. 59(22):98-105. 2011.
15. 大島伸一, 松尾清一, 柵木充明: 「座談会 地域医療の現状と課題」超高齢社会 まず全体構想 人口構造変化に対応を 質・量の転換期 覚悟必要. 読売新聞. 2013年1月9日朝刊. p. 31.
16. 大島伸一, 織田正道, 丸山泉: 「特別鼎談 高齢者医療における病院の役割」日本が直面する大きな課題は後期高齢者に対する医療!. 全日病ニュース. 806(平成25年8月1日):4-5. 2013.
17. 高杉敬久, 唐澤剛, 大島伸一, 新田國夫, 鈴木邦彦: 「特集 在宅医療の充実に向けて」かかりつけ医機能と在宅医療. 日本医師会雑誌. 142(7):1497-1509. 2013.
18. 大島伸一, 武田俊彦, 長尾和宏: 超高齢社会を日本の医療は乗り越えられるか?ー終末期医療の課題を中心にー. 日本医事新報. 4675(2013年11月30日):58-67. 2013.
19. 大島伸一, 権丈善一: 日本が超高齢社会を迎えるにあたって, 今後の医療はどうなっていくのか. アニムス. 78:3-12. 2014.
20. 大島伸一, 秋山正子, 寺田尚弘: 「新春鼎談」 “寿命80歳代”の「医療」とは? 2025年の地域医療の輪郭を描く. 訪問看護と介護. 19(1):1-9. 2014.

外7編 全30編

〈 インタビュー 〉

1. 「ひと」国立長寿医療センター初代総長に就任した大島伸一さん. 中日新聞. 2004年3月14日.
2. 「MEDICAL SIGHT」連載第三回「大学病院は悪」なのか. ロッキング・オン・ジャパン4月増刊号サイト. 19:154-160. 2004.

3. 「あの人に迫る」民間の切り口で白い巨塔にメス. 中日新聞. 2004年6月25日夕刊. p. 7.
 4. 「特集 未来へブレイクスルーする長寿医療ナショナルセンター」地球規模での貢献へ 世界に発信. Aging & Health. 12(3):7. 2004.
 5. 「医療安全をとりまく動向・ここに注目！」学会による鑑定書の作成で医療事故の原因解明へ. 医療安全推進者ネットワーク (Medsafe) ホームページ(日本医師会). 2004年12月掲載(2008年4月一般公開).
 6. 「くらし」高齢社会と医療20 病気との共存を図る. 京都新聞. 2004年12月28日. p. 9.
 7. 「ドクターの肖像」不動明王のごとく、役割を果たす. ドクターズマガジン. 63(2005年2月):4-9. 2005.
 8. 「大学病院が危ない」私はこうして改革した 手術を増やし、病床回転率を上げ、無駄を省く. エコノミスト. 2005年2月8日号. 2005.
 9. 「支・え・るきもち」長寿社会の医療のあり方を考える. 読売新聞. 2005年2月15日.
 10. 「人」大島伸一氏(国立長寿医療センター総長). 日本医事新報. 4235(2005年6月25日):82. 2005.
 11. 「Talks」若き日の手術現場で身に付けたリスクマネージメント. MEDICAL TORCH. 1(1):2-5. 2005.
 12. 「中部の60人未来を語る」(創刊60周年企画). 「健康長寿」はみんなの課題 地域一帯で超高齢化の理想社会を. 中部経済新聞. 2006年8月12日. p. 1.
 13. 「生きていて良かった」と思える社会の構築を. 革新・愛知の会. 139(2006年11月5日):1-2. 2006.
 14. 万波王国ルール違反 一律否定は避ける. 東京新聞(共同通信). 2006年11月11日夕刊.
 15. 「闘論」病気腎移植 必要なプロセス省略 「患者のため」が暴走. 毎日新聞. 2006年11月27日朝刊. p. 2.
 16. 移植学会副理事長に聞く「手続き・報告」条件欠く「医療は公共財」自覚は. 朝日新聞(大阪). 2006年12月3日. p. 36.
 17. 「病気腎」移植問題「医療技術は究極の公共財 社会全体に責任持つ行為」大島・移植学会副理事長に聞く. 朝日新聞(東京). 2006年12月8日夕刊.
 18. 「この人に聞きたい」東海市で初の官民病院統合 再編問題に一石成功を. 朝日新聞. 2008年1月16日朝刊. p. 26.
 19. 「高井一の中部に活！」長寿から「健康寿命」への挑戦. CIAC REPORT. 115(2008年3月):2-5. 2008.
 20. 「私のあんしん宣言」生活支援型の医療体制へ. 読売新聞. 2008年11月4日朝刊. p. 9.
 21. 私のVisionと経営戦略～高齢者医療の在り方の標準化で新たな日本の医療文化を作っていく～. Visionと戦略. 5(12):1-4. 2008.
 22. 「新春巻頭インタビュー」長寿社会を迎えて(前編). 月刊なごや. 316:15-21. 2009.
- (連載 外1編)
23. 「長寿革命 識者に聞く」「治すだけ」からの転換. 読売新聞. 2009年8月8日朝刊. p. 2.
 24. 「FOREWORD」超高齢社会における「支える医療」をめざして長期的視点に立ったグランドデザインが必要. HOPE Vision. 11:1. 2009.
 25. 「参院選2010 識者に聞く」社会保障 高齢者医療具体像を示せ. 読売新聞. 2010年7月1日朝刊. p. 27.
 26. “治す医療”から“治し支える医療”へ。医療資源を適正配置する仕組みづくりを. 日経BP社21世紀医療フォーラム Good Doctor NET. 2010年9月8日掲載.
 27. 「NEWS」臓器提増加に応じてコーディネーターの増員. 日本医事新報. 4509(2010年9月25日):17.
 28. 医師以外の医行為、積極的に議論すべき 大島・長寿医療センター総長. メディファクスウェブ. 2011年8月25日.
 29. 医師以外の医行為、積極的に議論すべき 大島・長寿医療センター総長. メディファクス. 6186号(2011年8月26日).
 30. 「インタビュー」医師以外の医行為は積極的に議論を. Japan Medicine. 2011年8月29日. p. 9.
 31. 「健康長寿者会の構築目指し」第1回人口構造の変化に追いつかない制度、システム. 科学技術の最新情報を提供する総合WEBサイトScience Portal(科学技術振興機構). 2012年2月17日掲載.
- (連載 外4編)

32. 「連載「総合医」の時代は来るか」「総合医」養成提言した厚労省研究班. 日本医事新報. 4622(2012年11月24日):16-17. 2012.
33. 「治す医療」からの大転換が必要. 全国老人保健施設協会機関誌. 24(1):30-33. 2013.
34. 「ニュース・医療維新」医療を行うために医師がいる—大島伸一・国立長寿医療研究センター総長に聞く◆Vol.1 専門医中心の医療、今のニーズに対応できず. 医師・医療従事者向け医療情報専門サイトm3.com. 2013年5月28日掲載. (連載 外3編)
35. 「Nippon蘇れ 私の処方箋」完治ありえない。病気と共存する人生へ. 読売新聞, 2013年6月15日朝刊. p.14. 2013.
36. 国民会議報告書は、医師が変わる動機に—長寿医療研究センター・大島総長に聞く. 医療経営 CB News マネジメント. 2013年11月7日配信.
37. 「新春論壇医界展望2014」超高齢社会における医療介護一体改革 今、「徹底的に治す医療」が高齢者に望まれているのか. CLINIC magazine. 535(平成26年1月1日):9. 2014.
38. 「こころ 健康のページ」国立長寿医療研究センター総長 大島伸一さん退任 治す・支える 医療は奉仕. 読売新聞. 2014年3月27日夕刊. p.8. 2014.

外 27 編 全 73 編

〈 論説・エッセー等 〉

1. 「巻頭言」国立長寿医療センター総長に就任して. Aging & Health. 13(1):5. 2004.
2. 「ひととき」国立大学の勝敗 良い人材と環境が必須. 中日新聞. 2004年4月4日朝刊. 2004.
3. 「巻頭言」チーム医療の原則. ウロ・ナーシング. 9(6):515. 2004.
4. 「巻頭言」罰則の強化で、医療への信頼は回復するだろうか. 毎日ライフ. 35(8):3. 2004.
(連載 外2編)
5. 「新聞時評」「専門医」見直し問題のフォローを. 毎日新聞. 2004年9月28日朝刊. 2004.
(連載 外3編)
6. 「長寿の国を診る」苦痛取り除くなりわい. 中日新聞. 2005年1月30日朝刊. 2005.
(2013年12月まで連載 外107編)
7. 「巻頭言」高齢者医療の特徴. 漢方医学. 29(4):151. 2005.
8. 「天窓」お互いに“おせっかい”を. 読売新聞. 2005年9月26日. 2005.
9. 「新春随想」21世紀の医療. 週刊医学界新聞. 2664(2006年1月2日):14. 2006.
10. 「プラタナス」医者が尊敬されなくなった理由. 日本医事新報. 4280(2006年5月6日):1.
11. 「巻頭言」お互いさまの社会を. JA あいち中央「年金友の会」会報. 創刊(2006年7月):1.
12. 「Doctor's Opinion」日本の医療を救う処方箋. ドクターズマガジン. 95(2007年10月)号:2. 2007.
13. 「時事解説」「医療崩壊」の処方せん 変わらぬ医局に医師養成は任せられない. メディファクスウェブ. 2007年10月3日掲載.
14. 「視点」医療改革と薬剤業務. 日本薬剤師会雑誌. 59(11):1545. 2007.
15. 「炉辺閑話」寡きを患えず 安からざるを患う. 日本医事新報. 4419(2009年1月3日):44. 2009.
16. 「essay 高齢者医療」はじめに病人があった. Geriatric Medicine. 47(8):1081. 2009.
17. 「炉辺閑話」人間的な営みとしての医療. 日本医事新報. 4471(2010年1月2日):41-42. 2010.
18. 「プラタナス」政権交代は医師集団にチャンスを与えた. 日本医事新報. 4478(2010年2月20日):1. 2010.
19. 社会が変わる 医療が変わる. 革新・愛知の会 結成30周年記念誌「国民が主人公の新しい日本へ」. 平和・民主・革新の日本をめざす愛知の会, 名古屋. 2010. p.36.
20. 「知っておきたい隣接医学あれこれ」医療が変わる①医療の変化と医療提供の原則. 日歯広報. 1503(2010年6月5日):7. 2010. (連載 外4編)

21. 世界一の高齢社会. 鯨光会会報「鯨光」. 616(平成24年5月1日):1. 2012.
22. 時代の変化と大学の役割. 東京大学医学部老年病学教室創立50周年記念誌. 東京大学医学部老年病学教室創立50周年記念誌編集委員会, 東京. 2012.
23. 「私の一冊」マテオ・ファルコーネ～どんな社会にもルールがある 自分ならどうするか自問～. 日本医事新報. 4646(2013年5月11日):82. 2013.
24. 「巻頭言」健康長寿社会の構築に向けて. 公衆衛生情報. 43(6):1. 2013.
25. 「巻頭言」日本の高齢社会の進展において医療のあるべき姿とは何か. 新医療. 40(10):19. 2013.
26. 名古屋大学医学部泌尿器科70周年によせて. 名古屋大学泌尿器科70年のあゆみ. 名古屋大学医学部泌尿器科同門会, 名古屋. 2013. p.16.
27. 「新春特集 日本の将来を語る」子どもは大人の真似しかしない. 日本教育. 430(平成26年1月):10-12. 2014.

外42編 全185編

＜ 特別講演・基調講演 等 ＞

1. 医療提供機能と質の保証. 愛知県病院協会第1回通常総会. 特別講演. 名古屋. 2004年5月11日.
2. 高齢者排尿障害の治療戦略. 第3回福岡前立腺疾患研究会. 特別講演. 福岡. 2004年8月20日.
3. 臨床医学研究について. 神水会学術講演会. 講演. 神戸. 2004年8月22日.
4. 高齢社会における医療について. 先端技術産業調査会第56回研究会健康医療部会. 講演. 東京. 2004年9月8日.
5. 日本における臓器移植推進の現状. 第40回日本移植学会総会. シンポジウム(フランスと日本における臓器移植推進の現状). 講演. 岡山. 2004年9月17日.
6. 医学研究私見. 藤田保健衛生大学医学セミナー第15回特別講演. 豊明. 2004年9月22日.
7. 医学研究について. 第332回日本泌尿器科学会新潟地方会. 特別講演. 新潟. 2004年12月4日.
8. これからの高齢者医療のあり方. 第81回中部地区老年医学懇話会. 特別講演. 名古屋. 2005年2月26日.
9. 腎移植の未来. 大阪腎移植病理研究会15周年記念講演会. 講演. 大阪. 2005年3月12日.
10. 臨床医について求められる医療倫理について. 奈良県立医科大学「臨床実習直前の学生を対象とした医療倫理・医療安全教育」シンポジウム. 基調講演. 橿原. 2005年5月19日.
11. 名大病院の改革. 第6回病院の経営を考える会. 講演. 東京. 2005年6月11日.
12. これからの長寿医療研究について. 第47回日本老年医学会学術集会. 特別講演. 東京. 2005年6月17日.
13. 高齢社会と医療. 名瀬市長寿医療講演会. 講演. 名瀬. 2005年10月18日.
14. 長寿医療の展望と健康長寿産業への期待. あいち健康長寿産業クラスター推進協議会設立記念セミナー. 基調講演. 名古屋. 2005年10月24日.
15. 超高齢社会を迎えて—医工科学技術と社会のあり方—. 名古屋工業大学創立100周年記念講演会. 記念講演. 名古屋. 2005年10月31日.
16. 移植医療30年. 第10回静岡腎移植研究会. 特別講演. 静岡. 2005年12月10日.
17. 高齢者における医学・医療と漢方. KAMPO MEDICAL SYMPOSIUM 2006. 基調講演. 東京. 2006年2月4日.
18. 長寿医療について. 奈良県立医科大学実践的医療倫理教育講演. 橿原. 2006年3月17日.
19. 今後の高齢者医療. 愛知県議会講演会. 講演. 名古屋. 2006年3月20日.
20. 高齢社会と医療. 第94回日本泌尿器科学会総会. 特別講演. 福岡. 2006年4月12日.
21. 臨床医学研究について. 第30回日本小児皮膚科学会学術大会. 特別講演. 名古屋. 2006年6月17日.
22. 長寿社会と工学への期待. 日本機械学会福祉工学シンポジウム2006. 基調講演. 野田. 2006年9月12日.

23. 超高齢社会をどう生きるか. 民主党愛知県第2区総支部主催フォーラム. 講演. 名古屋. 2006年9月23日.
24. 高齢社会について. 平成18年度社会保険大会と年金の集い. 記念講演. 名古屋. 2006年11月7日.
25. 高齢社会と医療. 第39回九州人工透析研究会総会. 招請講演. 大分. 2006年11月26日.
26. 医療技術の進歩と倫理. 奈良県立医科大学腎臓移植100例記念式典講演会. 講演. 奈良. 2006年12月17日.
27. 高齢社会と医療. 第1回抗加齢医学研究会. 特別講演. 浜松. 2007年3月31日.
28. 医師のQOLと医療危機. 第27回日本医学会総会. パネルディスカッション(日本の医療クライシスー産科、小児科、麻酔科、救急医療と医師のQOLー). 基調講演. 大阪. 2007年4月7日.
29. 老人医療について. 第49回日本老年医学会学術集会. ランチョンセミナー. 札幌. 2007年6月20日.
30. 高齢社会と在宅医療. 第49回日本老年医学会学術集会. ジャーナリスト企画セッション(高齢者の在宅医療と老年医学). 基調講演. 札幌. 2007年6月21日.
31. 高齢社会への対応. 第53回(平成19年度)日本薬学会東海支部総会. 特別講演. 名古屋. 2007年7月7日.
32. 高齢社会と医療の方向. 第19回九州排尿機能セミナー. 特別講演. 福岡. 2007年7月28日.
33. 在宅医療推進会議の取り組みについて. 日本医師会平成19年度第1回在宅医研修会. 講演. 東京. 2007年8月26日.
34. 医療制度改革と在宅医療. 厚生労働省・日本歯科医師会平成19年度社会保険指導者研修会. 講演. 東京. 2007年9月4日.
35. 長寿社会に向けての医療の展望. 大島郡医師会50周年記念特別記念講演. 名瀬市. 2007年10月7日.
36. 高齢社会と医療. 第10回財団法人医療研修推進財団講演会. 講演. 東京. 2008年1月29日.
37. 超高齢日本の豊かな社会, 地域づくりへの展望. 厚生労働省老人保健健康増進等推進事業未来志向研究プロジェクト記念事業 介護予防のための(新)排泄相談システムを考える記念講演・シンポジウム. 記念講演. 山形. 2008年3月15日.
38. 高齢社会と今後の医療. 第51回日本形成外科学会総会・学術集会. 特別講演. 名古屋. 2008年4月9日.
39. これからの日本の医療～超高齢社会に向かって～. 碧南市民病院開院20周年記念講演会. 講演. 碧南. 2008年5月22日.
40. これからの医療のあり方. 第16回M-M(Medical-Management Meeting)研究会. 基調講演. 東京. 2008年6月14日.
41. 臨床医学会の社会的責任と裁量. 第115回日本産科婦人科学会関東連合地方部会総会・学術集会. 特別講演. 東京. 2008年6月15日.
42. 超高齢社会の到来と日本老年医学会の今後. 第50回日本老年医学会学術集会. 日本老年医学会50周年記念式典・特別講演会. 千葉. 2008年6月19日.
43. 老年総合医の展望. 第50回日本老年医学会学術集会. 特別企画基調講演. 千葉. 2008年6月19日.
44. 高齢社会における医療と福祉. 福井県平成20年度特別研修「ミニ大学」医療コース. 講演. 福井. 2008年8月8日.
45. 医師と医療の質保証&プロフェッションの役割「提言 臨床医学会の社会的責任ー腎・泌尿・生殖医療分野の立場からー». 厚生労働科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業 医療の質・安全戦略研究会議. 講演. 東京. 2008年10月19日.
46. 超高齢社会と医療の動向. 第62回国立病院総合医学会. シンポジウム(高齢者医療). キーノートレクチャー. 東京. 2008年11月22日.
47. 今後の医療. 徳島大学創立60周年記念事業 市民シンポジウム「長寿と健康の調和を目指して」. 講演. 徳島. 2008年11月29日.
48. これからの医療について. 第8回世田谷区医師会医学会. 特別講演. 東京. 2008年12月6日.
49. 高齢社会と医療. 愛知県国民健康保険団体連合会 国民健康保険主管課長会議. 講演. 名古屋. 2009年2月5日.

50. 国立長寿医療センターの使命；在宅医療への挑戦。九州医療・病院管理研究会第16回研究会総会。特別講演。福岡。2009年3月22日。
51. 高齢社会におけるこれからの医療について。第7回大阪アルツハイマー病研究会。特別講演。大阪。2009年3月28日
52. これからの医療と長寿医療センターの取組。(社)愛知県歯科医師会平成21年度介護予防・認知症サポーター養成講習会。基調講演。名古屋。2009年7月9日。
53. 高齢社会とこれからの医療。三菱商事(株)ヒューマンメディア本部講演会。講演。東京。2009年7月21日。
54. 高齢者医療の課題と国立長寿医療センターの役割。第120回尾道市医師会高齢者医療福祉問題特別講演会。講演。尾道。2009年9月4日。
55. 科学技術の進歩と医療。第23回日本Endourology・ESWL学会。基調講演。東京。2009年11月12日。
56. 医師になって40年。2010MCM-STORZキックオフミーティング。特別講演。東京。2010年4月11日。
57. 医療は変わる。全国公私病院連盟・(社)全国老人保健施設協会共催 地域における医療と介護の連携セミナー。特別講演。東京。2010年6月2日。
58. 医療・介護の連携。(社)日本歯科医師会平成22年度役員合宿勉強会。講演。東京。2010年7月28日。
59. 多職種協働による医療連携の取り組み。(財)8020推進財団学術集会第8回フォーラム8020。基調講演。名古屋。2010年10月2日。
60. 高齢者医療をめぐる最近の動向について。民主党愛知県議員団健康・福祉等研究会。講演。名古屋。2010年10月7日。
61. 治す医療から、治し支える医療へ。第11回介護保険推進全国サミットinひがしうら。基調講演。知多郡東浦。2010年10月21日。
62. 医療・介護の連携。日本歯科医師会「生きがいを支える国民歯科会議」シンポジウム「食べる、生きる、幸せ噛みしめる～8020健康長寿社会を目指して～」。講演。東京。2010年11月3日。
63. 高齢者医療のあるべき姿。民主党厚生労働部門会議内 第1回高齢者医療制度改革WT。講演。東京。2010年11月4日。
64. 今、なぜ、在宅医療が必要か。四国在宅医療推進フォーラム。記念講演。高知。2010年11月14日。
65. 在宅医療に向けての期待。千葉県在宅医療推進寄附プロジェクト設立記念講演会。講演。東京。2010年11月16日。
66. 高齢社会における医療のあり方。日本歯科医学会ワークショップ。講演。東京。2010年11月27日。
67. 認知症と胃ろう。日本認知症ケア学会2010年度東海地域大会。基調講演。名古屋。2010年12月11日。
68. 高齢社会における医療と介護の連携。(社)全国社会保険協会連合会平成22年度社会保険介護老人保健施設管理セミナー。特別講演。東京。2010年12月17日。
69. たんの吸引等の適切な実施の在り方について。愛知県の重症心身障害児者の医療的ケアを考えるシンポジウム。基調講演。名古屋。2011年1月9日。
70. 移植医療と社会。第44回日本臨床腎移植学会。基調講演。宝塚。2011年1月27日。
71. 高齢社会について。第3回予防医工学研究会。講演。名古屋。2011年2月24日。
72. 新しい時代の医療・介護の連携。(社)日本補綴歯科学会第120回記念学術大会。特別講演。広島。2011年5月22日。
73. 高齢社会における医療の方向。第24回日本老年泌尿器科学会。特別講演。名古屋。2011年5月28日。
74. “治す医療”から“治し支える地域完結型の医療へ”。第51回栃木県総合医学会。特別講演。宇都宮。2011年6月19日。
75. 高齢社会における医療の役割。第15回日本看護管理学会年次総会。パネルディスカッション(地域をつなぐケアシステム)。基調講演。東京。2011年8月26日。
76. 高齢社会と医療。第16回静岡健康・長寿学術フォーラム。基調講演。静岡。2011年10月21日。
77. 医療提供体制の変化と歯科の果たす役割。第63回近畿北陸地区歯科医学大会。特別講演。大津。2011年11月6日。
78. 医療は変わる～診察室から地域へ～。第11回日本訪問歯科医学会。特別講演。東京。2011年11月20日。

79. 医療技術の進歩のあり方. 愛知医科大学平成23年度特別講演会. 講演. 愛知郡長久手. 2011年11月25日.
80. なぜ今、在宅医療なのか. 静岡県在宅医療推進センター第1回セミナー. 講演. 静岡. 2011年12月3日.
81. 医療は変わる. 第15回日本健康福祉政策学会しが学術大会. 招待講演. 大津. 2011年12月4日.
82. 治す医療から、治し支える医療へ. (独)医療福祉機構・地域連携助成事業「高齢者が地域で普通に暮らすことを支援する事業」. 講演. 宮崎. 2012年2月25日.
83. 高齢社会と医療. 国際医療福祉大学熱海病院～高齢者社会の現状・課題などを考える特別講演会. 講演. 熱海. 2012年4月16日.
84. 医療は変わる. 千葉大学高齢者関連3部門開設記念「高齢社会を考えるシンポジウム」. 特別講演. 千葉. 2012年7月2日.
85. 超高齢社会における新たな価値創造. 「新ヘルスケア産業フォーラム」発起人会及び記念講演会. 記念講演. 名古屋. 2012年7月6日.
86. 医療とは何か. (社)日本歯科医師会・医療基本法に関する役員勉強会. 講演. 東京. 2012年7月12日.
87. 超高齢社会のあり方ー特に医療のあり方を含めてー. 東京大学ジェロントロジー・コンソーシアム Healthcare Innovation Project. 記念講演. 東京. 2012年7月18日.
88. 医療のパラダイム転換ー国立長寿医療研究センター総長との対話ー. 政策研究大学院大学・総務省自治大学校連携 平成24年度医療政策短期特別研修. 講義. 東京. 2012年8月1日.
89. 地域医療再編ー自分たちがどのように地域を変えてゆくのかー. 名古屋市介護サービス事業者連絡研究会平成24年度第4回例会. 講演. 名古屋. 2012年9月20日.
90. 超高齢社会と医療. 文部科学省科学技術政策研究所 未踏高齢社会の健康とは?…新たな健康観の構築とその測定法の確立に関する研究会第1回. 講演. 東京. 2012年9月27日.
91. 超高齢社会と医療. 日本学術会議第一部国際協力分科会公開シンポジウム 高齢社会論の最前線. 講演. 東京. 2012年9月29日.
92. 長寿社会と医療. 第103回名古屋大学医学部学友大会記念講演. 特別講演. 名古屋. 2012年10月6日.
93. 高齢社会における医療・介護等のあり方. 生活生命支援医療福祉工学系学会連合大会2012. シンポジウム(介護・医療分野への機器導入での方向性と課題). 基調講演. 名古屋. 2012年11月2日.
94. 地域における医療・介護の連携について. 介護の日記念イベント. 講演. 佐賀. 2012年11月11日.
95. 望ましい医療・介護体制と在宅政策. 日本慢性期医療協会 第1回在宅医療認定講座. 講演. 東京. 2012年11月18日.
96. 地域コミュニティ“向こう三軒両隣”のコミュニケーションをどう取り戻すか. ASIAN AGING SUMMIT 2012. 講演. 東京. 2012年11月27日.
97. 日本の真ん中から長寿時代の医療を考える. ジェネラリスト中部2012. キーノート・スピーチ. 名古屋. 2012年12月23日.
98. 長寿の国を診る. 平成24年度愛知県社会福祉協議会理事・評議員等研修会. 基調講演. 名古屋. 2013年2月6日.
99. 医療は変わる. 全国国立病院院長協議会東海北陸支部総会. 講演. 名古屋. 2013年2月18日.
100. 高齢社会における医療の動向. 日本リハビリテーション病院・施設協会. 第1回医科歯科連携合同研修会. 特別講演. 福岡. 2013年3月17日.
101. これからの日本の医療. NHK医学番組委員会講演会. 講演. 東京. 2013年3月21日.
102. 医療は変わる. 医療介護福祉政策研究フォーラム. 第10回月例社会保障研究会. 講演. 東京. 2013年3月21日.
103. 多死社会に向けて在宅医療をどう普及させるか?. 第15回日本在宅医学会大会. シンポジウム(国立長寿医療研究センターとしての取り組み). 基調講演. 松山. 2013年3月31日.
104. これからの医療のあり方. 平成25年度社会保険病院病院長セミナー. 講演. 東京. 2013年5月10日.

105. これからの高齢社会について. 愛知総合看護福祉専門学校創立20周年記念事業. 記念講演. 長久手. 2013年5月18日.
106. 今後の医療のあり方について. 第16回くすりと医療の未来を考える研究会. 講演. 東京. 2013年5月21日.
107. 超高齢社会の医療を診る. Novartis Aging Forum 2013. 基調講演. 東京. 2013年5月25日.
108. 在宅医療連携拠点事業から地域包括ケアへ. 地域包括ケア勉強会. 講演. 長岡. 2013年5月26日.
109. 高齢社会と医療～医科と歯科の医療連携～. 福岡県歯科口腔保健の推進に関する条例制定記念県民フォーラム. 講演. 福岡. 2013年7月6日.
110. 医療は変わる. 第16回日本病院脳神経外科学会. シンポジウム(2030年の医療を語る). 基調講演. 福山. 2013年7月20日.
111. 今後の医療と社会保障制度改革国民会議の動向. 名古屋市医師会学術講演会. 講演. 名古屋. 2013年7月27日.
112. 2025年にむけて これからの医療. 第135回AID(老・病・死を考える会). 講演. 東京. 2013年8月27日.
113. 何故、臓器提供は進まないのか. 第49回日本移植学会. 臓器横断的シンポジウム(臓器提供推進). 基調講演. 京都. 2013年9月7日.
114. 社会保障制度改革国民会議に参加して. 日本歯科医師会・社会保障と税の一体改革を考える会. 講演. 東京. 2013年9月12日.
115. 高齢社会における街づくりと医療・介護のあり方. NPO法人在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク 第19回全国の集いin新潟2013. 講演. 新潟. 2013年9月22日.
116. 超高齢社会と歯科医療. 徳島大学大学院口腔科学教育部・独立行政法人国立長寿医療研究センター連携大学院開設記念キック・オフミーティング. 基調講演. 徳島. 2013年9月25日.
117. 高齢社会と医療の行方. 第121回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会. 特別講演. 東京. 2013年10月4日.
118. 治す医療から治し支える医療への転換. チームかまいし地域医療連携推進フォーラム. 講演. 釜石. 2013年10月9日.
119. 長寿社会と医療. 第72回日本公衆衛生学会総会. 特別講演. 津. 2013年10月24日.
120. 「21世紀日本モデル」の医療の展望と課題～社会保障制度改革国民会議報告を踏まえて. 平成25年度社会福祉トップセミナー. 講演. 東京. 2013年10月31日.
121. これからの日本の医療、地域医療の在り方. 宇都宮市医療保健事業団開設30周年記念講演会. 講演. 宇都宮. 2013年10月31日.
122. 待ったなしの医療改革. 国際医療福祉総合研究所 医療シンポジウム「医療改革への処方箋」. 基調講演. 東京. 2013年11月9日.
123. 全世代が長生きを喜べる、新たな国の形を創造. ASIAN AGING SUMMIT 2013. シンポジウム(超高齢社会の国家像を描く). 講演. 東京. 2013年11月14日.
124. 高齢社会をどう生きるか. 中津川・恵那広域行政推進協議会2013介護シンポジウム. 基調講演. 恵那. 2013年11月16日.
125. これからの日本の医療の在り方. 第63回日本泌尿器科学会中部総会. 基調講演. 名古屋. 2013年11月29日.
126. 超高齢社会における医療～「治し支える医療」の実現への提言～. 日本赤十字豊田看護大学開学10周年記念. 記念講演. 豊田. 2013年11月30日.
127. 医療のパラダイム転換. 文部科学省「未来医療研究人材養成拠点形成事業」地域と育む未来医療人「なごやかモデル」キックオフシンポジウム. 記念講演. 名古屋. 2013年12月7日.
128. 高齢社会における医療のあり方について. 名古屋薬業倶楽部平成25年度講演会. 講演. 名古屋. 2014年3月4日.
129. 医療のパラダイム転換. 第47回日本臨床腎移植学会. 基調講演. 奈良. 2014年3月13日.
130. 超高齢社会と医療. 京都府医師会平成25年度第30回勤務医部会総会. 特別講演. 京都. 2014年3月15日.

外 54 回 全 184 回

＜ シンポジウム・パネルディスカッション ＞

1. 石井トク, 大島伸一, 古館文章, 松原祐子, 山口研一郎: 医療事故を防ぐために—大学病院の医療ミス—. 医療事故調査会第9回シンポジウム. パネルディスカッション. 大阪. 2004年6月13日.
2. 絹川常郎, 辻克和, 初瀬勝朗, 小野佳成, 服部良平, 松浦治, 藤田民夫, 大島伸一: 社会保険中京病院における腎移植手術手技. 第93回日本泌尿器科学会総会. シンポジウム(当施設における腎移植手技). 東京. 2005年4月14日.
3. 大島伸一, 白澤卓二, 中田力, 中村雅美: ここまで来た未来の加齢医学. 日本経済新聞社 健康と医療フォーラム2005「人はなぜ年をとるのか〜加齢医学最前線〜」. パネルディスカッション. 東京. 2005年7月25日.
4. 谷川真理, 大島伸一: やすらぎトーク. 第41回日本移植学会総会. 市民公開フォーラム. 新潟. 2005年10月30日.
5. 吉田修, 大島伸一, 郡健二郎: 今後の医学教育のあり方について. 第233回日本泌尿器科学会東海地方会. 鼎談. 名古屋. 2006年9月16日.
6. 大島伸一, 加藤恒夫, 佐藤美穂子, 外口崇, 佐藤智: 人生を支える在宅医療とその人材養成のあり方について. 第2回在宅医療推進フォーラム. シンポジウム. 東京. 2006年11月23日.
7. 大島伸一: 日本の移植医療の進むべき方向. 第40回日本臨床腎移植学会. シンポジウム(臓器移植法の改正とコーディネーター業務実践への影響について). 加賀. 2007年3月2日.
8. 大島伸一: 序論. 第132回日本医学会シンポジウム. シンポジウム(わが国の臓器移植—現状と問題点). 東京. 2007年8月2日.
9. 武田俊彦, 川淵孝一, 大島伸一, 深津博, 高山修一, 新宅祐太郎, 有吉純夫: 高齢者社会が求めるヘルスケアサービスとは? その効果的な提供方法について. PHILIPS Healthcare Forum in Tokyo. パネルディスカッション. 東京. 2007年10月30日.
10. 大島伸一: 医療提供体制の変化—病院から地域へ. 第57回日本泌尿器科学会中部総会. 会長特別企画(高齢者の排泄管理—どのようにすれば現場に届けられるか—). 奈良. 2007年11月9日.
11. Valvanne J, Iwasaki E, Voutilainen P, Tanaka S, Leinonen R, Takegawa S, Moller K, Konttinen M, Ohshima S: 高齢者の健康福祉、介護サービス及びサービス提供形態についての再考. 高齢化社会における健康福祉に関する日本フィンランド共同セミナー〜これからのシルバー社会における健康福祉〜. シンポジウム. 仙台. 2007年11月16日.
12. 鎌田實, 黒岩卓夫, 大島伸一, 町永俊雄: 人生を支える医療〜地域がはぐくみ つなぐいのち〜. 第3回在宅医療推進フォーラム. シンポジウム. 知多郡東浦. 2007年11月23日.
13. 大島伸一, 根津八紘, 野村実, 松田暉: 理想的な学会のあり方について. CCT 2008 Surgical. シンポジウム. 神戸. 2008年2月1日.
14. 大島伸一: 特別発言. 第96回日本泌尿器科学会総会. シンポジウム(献腎移植を増やすには—Donor Action—). 横浜. 2008年4月27日.
15. 宮島俊彦, 俵萌子, 江口研二, 大島伸一, 角田直枝, 川島孝一郎: 新たな局面を迎えた緩和ケア—住み慣れた家での最期は可能か—. 第16回日本ホスピス・在宅ケア研究会千葉大会. シンポジウム. 千葉. 2008年7月13日.
16. 大島伸一, 住江憲勇, 小島茂, 朝日俊弘, 石毛えい子, 飯山幸雄, 神田裕二, 渡辺俊介: 後期高齢者医療制度を考える—安心して老いる社会をめざして—. 地域医療研究会. パネルディスカッション. 東京. 2008年8月24日.
17. 草間朋子, 田中豊, 大島伸一: 病院経営を握る看護の将来性. 九州医療・病院管理研究会第16回研究会総会. シンポジウム. 福岡. 2009年3月22日.
18. 大島伸一, 黒岩卓夫, 前沢政次: 在宅医学の展望. 第12回日本在宅医学会大会. 大会記念シンポジウム. 千葉. 2010年2月27日.
19. 大久保満男, 辻哲夫, 大島伸一: 社会保障は単なるセーフティーネットなのか—超高齢社会における国民生活のあり方を考える—. 有度サロン2010春期プログラムレクチャー+公開講座. 静岡. 2010年5月8日-9日.
20. 川合秀治, 大島伸一, 三根浩一郎, 邊見公雄: 高齢者にふさわしい医療と介護とは. 全国公私病院連盟・(社)全国老人保健施設協会共催 地域における医療と介護の連携セミナー. パネルディスカッション. 東京. 2010年6月2日.

21. 柴田雅人, 大島伸一, 近藤昭一, 大村ひであき, 河村たかし, 福島広明, 黒岩卓夫: 独居でも生き生き暮らせる地域づくり—迷惑をかけあえる人間関係を根底に—. NPO法人在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク. 第16回全国の集いin名古屋2010. シンポジウム. 名古屋. 2010年10月10日.
22. 伊藤澄一, 松谷満子, 大久保満男, 鷺田清一, 福原義春, 辻哲夫, 大島伸一: 日本歯科医師会「生きがいを支える国民歯科会議」シンポジウム「食べる、生きる、幸せ噛みしめる～8020健康長寿社会を目指して～」. パネルディスカッション. 東京. 2010年11月3日
23. 大島伸一, 北川靖, 平井啓, 三輪恭子, 須原忍, 山口育子: 在宅医療を受けるということ～在宅医療の可能性と課題～. 厚生労働省在宅医療普及啓発推進事業 在宅医療に関する市民フォーラム. パネルディスカッション. 大阪. 2011年3月7日.
24. 大島伸一: 国立長寿医療研究センターからのアプローチ. 第11回日本抗加齢医学会総会. 会長特別企画(健康長寿へのアプローチ). 京都. 2011年5月29日.
25. 大島伸一: 医療は変わる. 第16回日本緩和医療学会学術大会. パネルディスカッション(超高齢化・多死の時代への準備). 札幌. 2011年7月29日
26. 大島伸一: 長生きを喜べる社会とは. エイジング・フォーラム2011. シンポジウム(超高齢社会 アカデミアからの予測と課題). 東京. 2011年11月9日.
27. 唐澤剛, キム・ウォンジョン, グレーゲル・ベンクトソン, エヴァ・ペダーセン, キャロリン・スマイス, ヴィヴィアン・ライ, 大島伸一, 鈴木隆雄: アクティブ・エイジング 高齢者にとってGood Lifeとは?. サンライフ/サン・ビジョン国際シンポジウム. パネルディスカッション. 名古屋. 2012年6月22日.
28. 大島伸一: 序論. 第14回日本医学会公開フォーラム 高齢者医療の今—運動器不安定の最新の知見—. 東京. 2012年10月20日.
29. 行天良雄, 永井友二郎, 中村仁一, 岩田文英, 大島伸一, 大井玄: 日本人の死生観について. 第24回国民の健康会議. パネルディスカッション. 東京. 2012年11月20日.
30. 大島伸一: 指定発言. 認知症国家戦略に関する国際シンポジウム. パネルディスカッション. 東京. 2013年1月29日.
31. 大島伸一, 佐野明人, 清水哲太, 大沢勝: 福祉と産業技術の連携を考える～医療・先端工学・住まいの将来像とは～. 平成24年度愛知県社会福祉協議会理事・評議員等研修会. シンポジウム. 名古屋. 2013年2月6日.
32. 大島伸一: プライマリ・ケア医に求めること. 第4回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会. シンポジウム(地域医療の現状と未来を考える—診察室を出よ、そして街をみよう). 仙台. 2013年5月19日.
33. 大島伸一: 社会保障制度改革国民会議で示した「超高齢社会の医療のあり方」に向け実現をめざす. ASIAN AGING SUMMIT 2013. シンポジウム(超高齢社会のグランドデザイン). 座長コメント. 東京. 2013年11月12日.

外 22 回 全 55 回

〈 一般向け講演 〉

1. 病気と共存しながら、生き甲斐ある長寿をめざして～長寿医療最前線から. 日経シニアライフ・セミナー2006. 講演. 東京. 2006年2月4日.
2. 病気とは? 老いとは?—長寿の国日本を診る. ホスピス研究会OKAZAKI講演会. 講演. 岡崎. 2006年3月12日.
3. これからの高齢社会を考える. 名古屋学芸大学フォーラム2006. 講演. 名古屋. 2006年7月9日.
4. 高齢社会と医療. 藤田保健衛生大学脳神経外科第20回市民公開講座健康セミナー2006. 特別講演. 名古屋. 2006年8月5日.
5. 高齢社会と医療. 名古屋市医師会第2回シルバー世代講演会. 講演. 名古屋. 2007年2月27日.
6. 高齢社会と医療への影響. 2007年度日本福祉大学セミナー文化講演会. 講演. 名古屋. 2007年6月23日.
7. 高齢社会と将来. 中日新聞社平成19年度創立記念日講演会. 講演. 名古屋. 2007年9月3日.
8. 超高齢社会～我々はどこに向かうのか～. 鯨光130周年記念講演. 名古屋. 2007年11月10日.

9. 高齢社会と医療. みはま寿大学閉校式. 記念講演. 知多郡美浜. 2009年2月19日
10. 高齢社会と医療. 犬山市民総合大学敬道館一般教養学部第1回講座. 講演. 犬山. 2009年7月18日.
11. 長寿の国を診る. 社団法人愛知県柔道整復師会第4回県民公開講座. 講演. 名古屋. 2010年2月28日.
12. 健康長寿社会を生きるために. 改革の風フォーラム・文化講演会. 講演. 名古屋. 2011年1月31日.
13. 高齢社会と医療. 第9回豊田地域医療センター豊田市民公開講座. 講演. 豊田. 2011年9月3日.
14. 高齢社会を元気で生きる. 恵那市・市民三学三郷員会講演会. 講演. 恵那. 2012年10月27日.
15. これからの高齢社会. 公益財団法人不老会名古屋ブロック講演会. 講演. 名古屋. 2013年5月24日.
16. これからの医療介護の方向性と地域連携の課題. 国際医療福祉大学大学院公開講座乃木坂スクール. 講演. 東京. 2013年9月21日.

外 15回 全 31回

〈 テレビ・ラジオ出演 〉

1. 「ドキュメンタリー」平成16年度文化庁芸術祭参加 渦の中～名古屋大学病院 改革500日～. 東海テレビ. 2004年10月12日放送.
2. 「クローズアップ現代」臓器売買 揺れる移植医療. NHK総合. 2006年10月25日放送.
3. 「クローズアップ現代」中身の見える医療を目指して. NHK総合. 2007年1月25日放送.
4. 「吉岡忍ドキュメンタリーの旅・時代の肖像」理想のかたち. 東海テレビ. 2008年10月26日放送.
5. 地域特集番組「金とく」ひとりの老後～病気も孤独もこわくない!. NHK名古屋. 2010年5月21日放送.
6. 「かんさい熱視線」“胃ろう”急増 介護現場で何が. NHK大阪. 2011年2月18日放送.
7. 「クローズアップ現代」あなたの自宅をホスピスに～地域で支える最期～. NHK総合. 2012年1月31日放送.

外テレビ出演 3回, ラジオ出演 2回 全 12回

国立長寿医療研究センター名誉総長 (2014(平成26)年4月～2021(令和3)年3月)

〈 提 言 〉

1. 提言書「医療・介護サービスの統合による成長戦略 大都市圏における地域福祉社会の構築にむけて」(地域福祉社会研究会). 2014(平成26)年5月29日公表.
2. 提言「高齢社会のフロントランナー日本:これからの日本の医学・医療のあり方」(日本学術会議 臨床医学委員会 老年分科会). 2014(平成26)年9月30日公表.

〈 監修・編書 〉

1. 大島伸一 監修, 長谷川敏彦 編著:愛知県地域再生・まちづくり研究会 長生きを喜べるまちへ「愛知への提言」. 公益財団法人杉浦記念財団, 安城. 2016.
2. 大島伸一 監修, 鳥羽研二 編集代表:これからの在宅医療—指針と実務. グリーンプレス, 東京. 2016.
3. 大島伸一, 荒井秀典 編集代表:「治し支える医療」へ向けて, 医学と社会の大転換を. ライフ・サイエンス, 東京. 2018.
4. 大島伸一 監修, 長谷川敏彦 編:愛知から提案する新高齢社会のまちづくり～愛知県地域再生・まちづくり研究会3年間のまとめ～. 公益財団法人杉浦記念財団, 大府. 2018.

〈 著 書 〉

1. 大島伸一:超高齢社会の医療のかたち、国のかたち. グリーンプレス, 東京. 2014.
2. 大島伸一:老後を生き抜く方法. 宝島社, 東京. 2016.
3. 大島伸一:長寿の国を診る. 風媒社, 名古屋. 2017.
4. 大島伸一:はじめに. 都市型の看護介護医療等連携研究会 住み慣れた地域で暮らし続けるために講演集2. 一般財団法人杉浦地域医療振興財団, 安城. 2014. pp. 2-4.
5. 大島伸一:はじめに. 認知症ライフサポート研修テキスト—認知症ケアの多職種協働実践ガイド—(宮島渡 監修, ニッセイ基礎研究所 編). 中央法規出版, 東京. 2015.
6. 大島伸一:長寿社会における医療のあり方. ブックレット「高齢者の終末期医療を考える」(増田寛也+日本創成会議 編). 生産性出版, 東京. 2015. pp. 8-13.
7. 大島伸一:超高齢社会における医療・介護. 人生の最終章を考える その人らしく生き抜くための提言(公益財団法人医療科学研究所 監修). 株式会社法研, 東京. 2015. pp. 85-99.
8. 大島伸一:治す医療から治し支える医療へ. これからの在宅医療—指針と実務(大島伸一 監修, 鳥羽研二 編集代表). グリーンプレス, 東京. 2016. pp. 2-5.
9. 大島伸一:「治し支える医療」へ向けて, 医学と社会の大転換を. 「治し支える医療」へ向けて, 医学と社会の大転換を(第30回日本老年学会総会 編, 大島伸一, 荒井秀典 編集代表). ライフ・サイエンス, 東京. 2018. pp. 8-20.
10. 辻哲夫, 大月敏雄, 大貫徹, 菅敬介, 都築晃, 水野真一, 田中紀之, 大島伸一, 清水哲太, 井上恵太, 飯尾歩:“住まい”と“暮らし”の調和した「共生・共創のまちづくり」を考える. 2040年の超高齢社会をみつめて(大沢勝 編). 社会福祉法人愛知県社会福祉協議会, 名古屋. 2019. pp. 236-248.
11. 大島伸一:74歳になった, 他. 素描集 第253集. 岐阜新聞社, 岐阜. 2019. pp. 55-63.

外 11 編 全 22 編

〈 英文論文 〉

1. Arai H, Ouchi Y, Toba K, Endo T, Shimokado K, Tsubota K, Matsuo S, Mori H, Yumura W, Yokode M, Rakugi H, Ohshima S: Japan as the Front-Runner of Super-Aged Societies: Perspectives from Medicine and Medical Care in Japan. Geriatr Gerontol Int. 15(6):673-687. 2015.

- Hattori M, Mieno M, Shishido S, Aikawa A, Ushigome H, Ohshima S, Takahashi K, Hasegawa A, and on behalf of the Japan Society for Transplantation and Japanese Society for Clinical Renal Transplantation. Outcomes of Pediatric ABO-incompatible Living Kidney Transplantations From 2002 to 2015 : An Analysis of the Japanese Kidney Transplant Registry. Transplantation. 102(11):1934-1942. 2018.

＜ 和文論文 ＞

- 大島浩子, 鳥羽研二, 大島伸一, 鈴木隆雄: 在宅医療連携拠点の活動性の評価. カレントセラピー. 33(2):100-106. 2015.
- 服部元史, 三重野牧子, 相川厚, 大島伸一, 宍戸清一郎, 高橋公太, 長谷川昭, 吉村了勇: 本邦小児腎移植の臨床的背景と移植成績. 移植. 51(6):452-463. 2016.
- 服部元史, 三重野牧子, 相川厚, 大島伸一, 宍戸清一郎, 高橋公太, 長谷川昭, 吉川了勇: 本邦小児腎移植の臨床的背景と移植成績. 日本臨床腎移植学会雑誌. 4(2):301-312. 2016.
- 宍戸清一郎, 服部元史, 相川厚, 大島伸一, 高橋公太, 長谷川昭, 吉川了勇: 本邦における小児への献腎配分政策と献腎移植. 日本臨床腎移植学会雑誌. 8(1):94-100. 2020.

＜ 総説 等 ＞

- 大島伸一: 超高齢社会における医療・介護. 医療と社会. 25(1):49-57. 2015.
- 大島伸一: 超高齢社会における医療の方向. 泌尿器外科. 28(臨増):539-540. 2015.
- 大島伸一: 日本における高齢社会の現状と医療の方向 特にナショナルセンターの立場から. 日本歯科医師会雑誌. 68(5):393-400. 2015.
- 大島伸一: 越境地域政策研究フォーラム 記念講演「医療・福祉のまちづくり提案」. 愛知大学三遠南信地域連携研究センター紀要2016. 4:54-59. 2017.
- 大島伸一: 越境地域政策研究フォーラム 第4分科会講演「医療・福祉のまちづくり提案」. 愛知大学三遠南信地域連携研究センター紀要2016. 4:79-87. 2017.
- 大島伸一: 輝きに満ちているか, 超高齢社会と医療. 日本医療・病院管理学会誌. 55(2):99-111. 2018.
- 大島伸一: 治し支える医療へのパラダイムシフト. 日本臨床. 76(増刊号):207-210. 2018.
- 大島伸一: 医療のパラダイム転換. 日本臨床内科医会誌. 34(2):161-166. 2019.

外2編 全10編

＜ 対談・鼎談・座談会 等 ＞

- 大島伸一, 半田一登: 長寿社会の先に. 公益社団法人日本理学療法士協会ニュース. 292:4-7. 2014.
- 鳥羽研二, 大島伸一, 辻哲夫, 平原佐斗司: 治し支える医療としての在宅医療の新展開. カレントセラピー. 33(2):108-118. 2015.
- 横倉義武, 大島伸一, 辻哲夫, 新田國夫: 在宅医療の未来像とこれからの輝き方を探る. 在宅新療 0-100. 1(1):4-12. 2016.
- 大島伸一, 児玉善郎, 福田秀志: 「スペシャルトーク」SDGs 達成に向けた日本福祉大学の取り組み. エスパシオ. 31:5-8. 2020.
- 小野庄一, 大島伸一, 永田久美子, 山崎章郎: 第3回長寿科学振興財団設立30周年記念シンポジウム 明るく活力のある長寿社会の実現に向けて～人生100年時代を語る～. Aging & Health. 29(1):22-26. 2020.
- 小野庄一, 大島伸一, 永田久美子, 山崎章郎: 第3回長寿科学振興財団設立30周年記念シンポジウム 明るく活力のある長寿社会の実現に向けて～人生100年時代を語る～. 公益財団法人長寿科学振興財団設立30周年記念誌. 公益財団法人長寿科学振興財団, 知多郡東浦. 2020. pp.52-56.

外3編 全9編

＜ インタビュー ＞

1. 「MY OPINION—明日の薬剤師へ」袋詰めをしていればいい時代を終わらせるのは、薬剤師自身。ターナーアップ. 16:4-9. 2014.
2. 「現代を斬る」幸せな長寿を支える高齢化社会の医療を模索. 時局. 47(5):12-17. 2014.
3. 「Message to U35 Doctors」 「医療は公共財」と認識すれば、立ち位置は自ずと決まる. 日経メディカルカデット. 30:8-9. 2014.
4. 超高齢社会へ処方箋 国立長寿研の大島名誉総長出版. 中日新聞. 2014年7月27日朝刊. p.22.
5. 「読者モニター」長寿医療センター大島氏—議論の前提疑う記事を. 医療介護CB ニュース. 2014年10月13日配信.
6. 「医療ルネサンス No.5973」回復力1/5元NHKアナウンサー山川静夫さん 満足の「生」のために. 読売新聞. 2015年1月5日朝刊. p.13.
7. 団塊800万人が後期高齢者に2025年医療は間違いなく崩壊する. 文藝春秋. 93(6):248-253. 2015.
8. 高齢者が笑顔で暮らせる社会を築くために、“長寿先進国日本”が取り組む医療のあり方. マイナビDOCTOR Vol13. (株)マイナビ, 東京. 2015.
9. 長寿日本へ提言の一冊 本紙連載・大島さん出版. 中日新聞. 2017年6月1日朝刊. p.17.
10. 「巻頭ビッグインタビュー」 未来の世代への責任を考慮し、高齢社会における医療と介護のパラダイムの転換を模索して… からだサイエンス・柔整 Version. 24(144):2-8. 2019.

外7編 全17編

＜ 論説・エッセー 等 ＞

1. 「看護の将来ビジョン」で新たな挑戦 メッセージ1. これからの時代に求められる方向性が明確に. 看護. 67(10):88. 2015.
2. 発刊によせて. 在宅医療テキスト第3版(在宅医療テキスト編集委員会 編). 公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団, 東京. 2015. p.3.
3. 「特別寄稿」認知症事故訴訟の最高裁判決を受けて①「新しい社会に現れた問題は新しい方法で対応するしかない」. 日本医事新報. 4795(2016年3月19日):16. 2016.
4. 社会、医療の大転換は避けられない. ひょうご人権ジャーナル きずな. 2017(平成29)年9月:3. 2017.
5. 「エッセイ」医療が大きく転換する時に医師の役割と使命が問われる. 地域医療. 55(3):292-293. 2018.
6. 「医師たちの証言」「在宅医療推進会議」が果たした役割と波及効果. 日本の在宅医療のあゆみ—地域包括ケアから地域共生社会へ—. 日本在宅ケアアライアンス, 東京. 2018. p.10.
7. 「素描」74歳になった. 岐阜新聞. 2019年9月7日朝刊. p.12. (連載 外7編)
8. 「Column」延命の先. 生活習慣病と健康長寿・フレイル対策(荒井秀典 編). 先端医学社, 東京. 2021. p.123.

外17編 全32編

＜ 特別講演・基調講演 等 ＞

1. 今後の医療と提供体制について. 2014年度自治労年金集会第3分科会. 講演. 東京. 2014年4月21日.
2. 長寿社会における医療・終末期医療について. 日本創成会議 第20回会合. 講話. 東京. 2014年6月23日.
3. 高齢社会における医療の方向性. 第16回日本褥瘡学会学術集会. 特別講演. 名古屋. 2014年8月29日.
4. 長寿社会について. 文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC)」中部大学アクティブアゲインカレッジ(CAAC)開設記念特別講義. 講義. 春日井. 2014年9月22日.

5. 急速に進む高齢社会の課題と解決策. 第10回公益社団法人日本鍼灸師会全国大会 in 岐阜. 基調講演. 岐阜. 2014年10月12日.
6. 超高齢社会における医療の方向. 第79回日本泌尿器科学会東部総会. 特別講演. 横浜. 2014年10月13日.
7. 治す医療から、治し支える医療へ. 白山市の在宅医療連携を考える会. 特別講演. 白山. 2014年10月25日.
8. この国のかたち～いま、求められるもの. ASIAN AGING SUMMIT 2014. シンポジウム(この国のかたち～超高齢社会に求められる社会システム). 講演. 東京. 2014年11月11日.
9. 高齢者医療のあるべき姿. 平成医政塾勉強会. 講演. 大阪. 2014年11月29日.
10. 医療のパラダイム転換. 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科特別講演会 先端医学研究のトレンド2015. 講演. 岡山. 2015年1月21日.
11. 超高齢社会の医療. 第45回厚生連医師会総会. 講演. 名古屋. 2015年3月7日.
12. 将来の日本の形と将来を担う若手に期待するもの. 浩志会講演会. 講演. 東京. 2015年3月31日.
13. 高齢者医療におけるQOLの追求とSOL(Sanctity of life)の諸問題. 第28回日本老年泌尿器科学会. 特別講演. 浜松. 2015年5月8日.
14. 地域で治し・支える医療の展開. 第47回岩手県立病院医学会総会in北上. 特別講演. 北上. 2015年8月30日.
15. 超高齢社会の医療のかたち. 第46回日本看護協会－在宅看護－学術集会. 基調講演. 名古屋. 2015年10月2日.
16. 超高齢社会の医療のかたち、国のかたち. 第30回保団連医療研究フォーラム. シンポジウム(「本来の高齢者医療」に立ち返る). 基調講演. 東京. 2015年10月11日.
17. 超高齢社会～生活・医療が変わる～. 第49回全国社会福祉事業団大会. 基調講演. 名古屋. 2015年10月22日.
18. 地域包括ケアシステムへのパラダイム・シフト. 第16回人間福祉学会2015. 基調講演. 各務原. 2015年10月24日.
19. 「超高齢社会これからの医療」～高齢になっても安心して地域や家庭で暮らすには～. もとす医師会・もとす広域連合 地域在宅医療連携推進事業講演会. 講演. 本巣. 2015年11月21日.
20. 社会・科学・技術について. 第6回横幹連合コンファレンス. 基調講演. 名古屋. 2015年12月5日.
21. 社会・技術・医療. 第28回日本内視鏡外科学会総会. 基調講演. 大阪. 2015年12月11日.
22. 日本の高齢者終末期医療の現状と課題. 日本創成会議・シンポジウム高齢者の終末期医療を考える～長寿時代の看取り～. 講演. 東京. 2015年12月17日.
23. 社会が変わる、医療が変わる～地域包括ケア時代の看護・介護・医療～. 愛媛県地域包括ケアを考える会(第二回愛媛県慢性期医療研究会). 講演. 松山. 2016年1月23日.
24. 2025年医療は間違いなく崩壊する～医療のパラダイム転換～. 大島郡医師会地域包括ケア研修会. 講演. 奄美. 2016年3月18日.
25. 長生きを喜べるまちへ『愛知への提言』について. 愛知県議会人づくり・福祉対策特別委員会. 講演. 名古屋. 2016年9月1日.
26. 介護専門職としての職能の確立. 第16回レジデンシャルケア研究会議. 講演. 京都. 2016年9月11日.
27. 日本の医療政策のあり方から～専門家の役割と責任～. 文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業 最先端の在宅医療を考える 展望シリーズ. 講演. 東京. 2016年10月13日.
28. 超高齢社会の医療の展望. 第55回全国自治体病院学会. 特別講演. 富山. 2016年10月20日.
29. 日本の課題. 日独専門家会議－看護・介護職の教育制度の改革. 講演. 東京. 2016年11月29日.
30. 介護福祉教育について. 第23回日本介護福祉教育学会. 基調講演. 白山. 2017年2月18日.
31. 医療が変わる. 第1回全国在宅医療医歯薬連合会全国大会. 特別講演. 東京. 2017年5月28日.
32. 「治し支える医療」へ向けて、医学と社会の大転換を. 第30回日本老年学会総会. 会長講演. 名古屋. 2017年6月14日.

33. 超高齢社会における医療・介護分野の改革. 第19回日本在宅医学会大会. 基調講演. 名古屋. 2017年6月17日.
34. 輝きに満ちているか、超高齢社会と医療. 第55回日本医療・病院管理学会学術総会. 基調講演. 横浜. 2017年9月17日.
35. 地域包括ケアを阻むもの. 第25回大都市における地域包括ケアをつくる政策研究会. 講演. 東京. 2017年11月30日.
36. 在宅医療の今後の方向性と課題. 文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業 最先端の在宅医療を考えるシンポジウム(さらなる在宅医療の質を求めて). 基調講演. 東京. 2018年2月4日.
37. 日本人の寿命はどこまで健やかに伸びるのか～天寿を全うできる社会とは～. 「百寿社会の展望」シンポジウム. 講演. 東京. 2018年3月17日.
38. 社会が変わる. 三菱商事(株)講演会. 講演. 東京. 2018年4月16日.
39. 人生100年時代の社会保障について. 自由民主党 人生100年時代戦略本部. 講演. 東京. 2018年5月10日.
40. 超高齢社会と健康長寿. 第25回日本排尿機能学会. 特別講演. 名古屋. 2018年9月27日.
41. 魅力ある専門職とは何か. 公益社団法人日本介護福祉士会第25回全国大会・第16回日本介護学会. 記念講演. 熊本. 2018年11月3日.
42. 認定介護福祉士の使命と役割そして今後. 長野県介護福祉士会シンポジウム 認定介護福祉士の可能性と期待を語る. 講演. 長野. 2019年2月23日.
43. 長寿の国を診るー“治し支える医療”において求められる医工連携のあり方と期待することー. あいち健康長寿産業クラスター推進協議会総会・講演会. 講演. 大府. 2019年3月19日.
44. 医療のパラダイム転換. 第36回日本臨床内科医会総会. 特別講演. 名古屋. 2019年4月28日.
45. 高齢社会における医療と介護. 第1回日本在宅医療連合学会大会. 新学会創立記念講演. 東京. 2019年7月14日.
46. 地域包括ケアについて. 地域における「福祉」と「交通」の連携を考えるセミナー in 名古屋. 記念講演. 名古屋. 2019年11月15日.
47. 医療と社会の大転換. 第20回病院の経営を考える会. 講演・対談. 東京. 2019年11月29日.
48. 超高齢社会における医療・介護. 長寿科学振興財団設立30周年記念シンポジウム. 講演. 名古屋. 2019年12月26日.

外 22 回 全 70 回

〈 シンポジウム・パネルディスカッション 〉

1. 小宮山宏, 水野和夫, 増田寛也, 伊藤元重, 大島伸一: シンポジウム(この国のかたち～超高齢社会に求められる社会システム). ASIAN AGING SUMMIT 2014. パネルディスカッション. 東京. 2014年11月11日.
2. 大島伸一, 斉藤吉毅, Barbara Spurrier, Stacey Chang: アカデミアにおけるメディカル・イノベーションー現状と課題ー. 文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業 合同公開フォーラム. パネルディスカッション. 東京. 2014年12月16日.
3. 大島伸一: 総括発言. 高齢社会を支える地域医療福祉連携～北上地域の現状と戦略～. 第47回岩手県立病院医学会総会 in 北上. シンポジウム. 北上. 2015年8月30日.
4. 野崎義弘, 増田幸雄, 満純孝, 村上早苗, 若松千鶴美, 大島伸一: 地域包括ケアシステムの構築を目指して. 鹿児島県医師会在宅医療推進県民セミナー. シンポジウム. 奄美. 2016年3月18日.
5. 大島伸一: 高齢社会における「未病」について. 読売新聞社未来貢献プロジェクト・未病シンポジウム. 東京. 2016年10月17日.
6. 大島伸一: 今後の介護人材及び認定介護福祉士について. 日本介護福祉学会緊急討論会. シンポジウム(介護人材をめぐる展望と課題). 東京. 2017年1月21日.
7. 二木立, 李榮成, 大島伸一, 李海鍾: 急性期医療改革と急性期病院の経営課題. 日本福祉大学・延世大学 第12回日韓定期シンポジウム. シンポジウム. 東海. 2017年11月18日.

8. 辻哲夫, 大月敏雄, 大貫徹, 菅敬介, 大島伸一, 清水哲太, 井上恵太, 飯尾歩: “住まい”と“暮らし”の調和した「共生・共創のまちづくり」を考える. 愛知県社会福祉協議会 第6回「あ・い・ち・ふ・く・し」シンポジウム. シンポウム. 名古屋. 2018年2月14日.
9. 井村裕夫, 大島伸一, 鈴木康裕, 藻谷浩介, 矢野和男, 村上陽一郎: 「百寿社会の成熟」のために. 「百寿社会の展望」シンポジウム. パネルディスカッション. 東京. 2018年3月17日.
10. 島崎謙治, 迫井正深, 石垣泰則, 蘆野吉和, 辻哲夫, 大島伸一, 垣添忠生, 城谷典保, 川越正平: 在宅医療は21世紀のイノベーション. 第1回日本在宅医療連合学会大会. 新学会創立記念シンポウム. 東京. 2019年7月14日.
11. 大島伸一, 堀田聰子, 蘆野吉和, 福田裕子, 宮崎則男: 求められる医療・看護・介護の連携～介護の専門性を考える～. 第3回全国在宅医療医歯薬連合学会全国大会. シンポウム. 東京. 2019年9月28日.
12. 大島伸一, 井上恵太, 大沢勝: 「あ・い・ち・ふ・く・し」の視点から、2040年に向けて更なる展開を考える. 愛知県社会福祉協議会 第8回「あ・い・ち・ふ・く・し」シンポジウム. 鼎談. 名古屋. 2020年2月10日.
13. 岩城裕一, 大島伸一: 我が国の移植医療は、このまま衰退するのか. 第56回日本移植学会総会オンライン総会. 対談. 秋田. 2020年11月1日-30日.

外 12回 全 26回

＜ 一般向け講演 ＞

1. 高齢社会と医療. 星城大学リハビリテーション学院開学10周年記念講演会. 記念講演. 名古屋. 2014年9月27日.
2. 超高齢社会—生活・医療はどうなるか—. 日本福祉大学文化講演会学園創立60周年記念事業. 講演. 名古屋. 2015年6月7日.
3. 地域包括ケアシステムと在宅医療. 鹿児島県医師会在宅医療推進県民セミナー. 講演. 奄美. 2016年3月18日.
4. 地域が変わる、医療が変わる. 第1回調布医学会・第36回市民公開講座. 特別講演. 調布. 2017年10月15日.
5. 老後を生き抜く方法. 大府市文化協会創立40周年. 記念講演. 大府. 2017年11月5日.
6. これからの医療・介護・福祉と地域共生社会. 第23回地域創生にいみカレッジ「鳴滝塾」. 特別講演. 新見. 2017年11月25日.
7. 長寿社会の未来. 第53回愛知県老人福祉大会. 講演. 豊田. 2018年8月31日.
8. 健康長寿社会の実現を目指して. 第30回日本医学会総会2019中部開催記念市民公開セミナー. 講演. 名古屋. 2019年3月16日.

外 7回 全 15回

＜ テレビ・ラジオ出演 ＞

1. 「がんセンターカフェ～みんなでがんを考えよう」第103回「超高齢社会」の医療の在り方について. 文化放送. 2014年9月21日放送.
2. 「報道特別番組」平成26年東海テレビ文化賞～道一筋に～. 東海テレビ放送. 2014年11月19日放送.
3. 「きく！ラジオ「健康生活」」高齢社会とまちづくり. CBCラジオ. 2019年4月1日～5日放送.
4. 「ノーナレ」“悪魔の医師”か“赤ひげ”か. NHK総合. 2018年3月28日放送. 4月15日再放送.

外テレビ出演 1回, ラジオ出演 2回 全 7回

研究助成等

厚生省(厚生科学研究費補助金)／厚生労働省(厚生労働科学研究費補助金)

平成9～11年度感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業

臓器移植の基盤整備に関する臨床的研究(主任研究者 長澤俊彦)

長期移植腎生着の向上に関する研究

分担研究者 平成9・10年度配分額 --- 平成11年度配分額 770万円

平成11年度感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業

臓器移植の社会資源整備に向けての研究(主任研究者 北川定謙)

献腎におけるコーディネーターの活動促進に関する研究

分担研究者 配分額 1,200万円

平成11・12年度医療技術評価総合研究事業, 平成13年度21世紀型医療開拓推進事業,

平成14・15年度医療技術評価総合研究事業

泌尿器科領域の治療標準化に関する研究

主任研究者 総額 6,100万円

平成12年度医療技術評価総合研究事業

日本の既存医学データベースをEBMに生かすためのエレクトロニックサーチ・ハンドサーチの方法論の開発とデータベース改良に関する研究(主任研究者 津谷喜一郎)

ガイドラインの評価方法についての検討

分担研究者 配分額 ---

平成12・13年度長寿科学総合研究事業

高齢者尿失禁の評価・治療に関するガイドラインの作成(主任研究者 岡村菊夫)

分担研究者 配分額 ---

平成12～14年度, 平成15・16年度ヒトゲノム・再生医療等研究事業

臓器移植の社会基盤に向けての研究

主任研究者 総額 1億5,824.8万円

平成15・16年度医療技術評価総合研究事業

前立腺癌診療ガイドライン作成に関する研究(主任研究者 守殿貞夫)

分担研究者 15年度配分額 --- 16年度配分額 100万円

平成17～19年度ヒトゲノム再生医療等研究事業

慢性腎障害の重症化防止を目的とした幹細胞移植による残存腎機能再構築

主任研究者 総額 1億4,319万円

平成17～19年度ヒトゲノム・再生医療等研究事業
移植医療の社会基盤整備に関する研究(主任研究者 島崎修次)
分担研究者 一括計上

平成20～22年度免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業
臓器移植の社会的基盤に関する研究(研究代表者 篠崎尚史)
研究分担者 一括計上

平成21・22年度地域医療基盤開発推進研究事業
高齢社会の医療提供体制における必要医師数の推計に関する研究
研究代表者 総額 1,600万円

平成23年度地域医療基盤開発推進研究事業(指定研究)
新たな概念に基づく超高齢社会の医師需給の研究
研究代表者 総額 940万円

平成24年度・25年度地域医療基盤開発推進研究事業(指定研究)
在宅拠点の質の向上のための介入に資する、活動性の客観的評価に関する研究
研究代表者 総額 2,100万円

平成24～26年度地域医療基盤開発推進研究事業(指定研究)
被災地の再生を考慮した在宅医療の構築に関する研究
研究代表者 総額 3億円

平成26年度・27年度地域医療基盤開発推進研究事業(指定研究)
市町村における在宅医療・介護の連携の促進とその客観的評価に関する研究
研究代表者 総額 1,665万円

文部科学省(文部科学研究費・補助事業費)

平成14・15年度基盤研究(B)
腎臓生体拡大内視鏡による進行性移植腎障害の解明
研究代表者 総額 910万円

平成14・15年度基盤研究(A)
新規遺伝子解析プログラムを応用した泌尿器科腫瘍の分子診断システムの開発(研究代表者 小川修)
研究分担者 配分額 300万円

平成14・15年度地域貢献特別支援事業「高齢者排泄管理の改善事業」
事業責任者 総額 2,508万円

愛知県

愛知県特定疾患研究

平成5年度「進行性腎障害 死体腎移植における免疫抑制療法の検討」

平成6年度「慢性腎不全「腎移植」」

愛知県における寝たきり予防対策事業

平成11年度「愛知県排尿障害実態調査」 225万円

平成12年度「愛知県排尿障害実態調査」 260万円

平成13年度「高齢者排尿管理マニュアル検証」 124万円

財団等 学術研究助成

財団法人愛知腎臓財団

昭和49年度「腎臓保存器 Belzer LI-400を使用した腎臓の灌流 冷却保存に関する研究とその常時設置」

昭和50年度「拒絶反応の免疫学的診断—白血球凝集反応」

昭和51年度「拒絶反応の免疫学的診断(継続)」

昭和54年度「腎移植患者の抗T.Bリンパ球抗体の検索について」

内視鏡医学研究振興財団

平成4年度 研究助成 B

「泌尿器科領域における laparoscopic surgery の応用 ; laparoscopic nephrectomy, laparoscopic adrenalectomyの確立」 50万円

鈴木謙三記念 財団法人医科学応用研究財団

平成13年度 第21回 調査研究助成

「尿失禁を有する高齢者に対する、コンピューターを利用した排尿管理マニュアルソフトの開発と適切な排尿管理のためのネットワークシステム創設に関する調査研究」 100万円

※研究費の記載のないものは、資料不在のため金額不明もしくは研究代表者等に一括計上

<業績集 参考資料>

- ◇ とき 四十年記念誌. 社会保険中京病院, 名古屋. 1987.
- ◇ 業績集 1970.4-1994.3. 社会保険中京病院 泌尿器科, 名古屋. 1994.
- ◇ 二十五年のあゆみ. 財団法人愛知腎臓財団, 名古屋. 1997.
- ◇ 社会保険中京病院腎移植 25周年記念誌 2000年時代の腎移植をめざして. 社会保険中京病院腎移植チーム, 名古屋. 2000.
- ◇ 名古屋大学医学部泌尿器科同門会業績集・関連病院資料集. 名古屋大学医学部泌尿器科, 名古屋. 1998~2020.

略 歷



略 歴

大 島 伸 一

名古屋大学 名誉教授

国立長寿医療研究センター 名誉総長

昭和20年9月7日生

学歴・免許・学位

(学歴) 愛知県立旭丘高等学校普通科(昭和39年3月卒業)

名古屋大学医学部医学科(昭和45年3月卒業)

(免許) 医師免許(昭和45年6月15日・医籍登録第206500号)

(学位) 医学博士(昭和59年9月20日・名古屋大学 論医博第1320号)

職 歴

昭和45年4月 社会保険中京病院嘱託臨床研修医

昭和46年4月 社会保険中京病院医員(泌尿器科)

昭和52年4月 社会保険中京病院医長(泌尿器科)

昭和52年5月 社会保険中京病院部長代理(泌尿器科)

昭和56年1月 社会保険中京病院部長(泌尿器科)

昭和61年9月 社会保険中京病院主任部長(泌尿器科)

平成4年4月 社会保険中京病院副院長

平成9年1月 名古屋大学医学部教授(泌尿器科学講座)(～平成16年2月)

同 名古屋大学医学部附属病院泌尿器科長(～平成16年2月)

平成12年2月 名古屋大学医学部附属病院副院長(～平成14年10月)

平成12年4月 名古屋大学大学院医学研究科教授(病態外科学講座泌尿器科学)

- 平成14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科教授(病態外科学講座泌尿器科学)
同 名古屋大学医学部附属病院在宅管理医療部長(～平成16年2月)
平成14年10月 名古屋大学医学部附属病院医療安全管理室長(～平成14年10月)
平成14年11月 名古屋大学医学部附属病院長(～平成16年2月)
同 名古屋大学評議員(～平成16年2月)
平成15年4月 名古屋大学医学部附属病院排泄情報センター部長(～平成16年2月)
平成16年3月 国立長寿医療センター総長(～平成22年3月)
平成21年4月 国立大学法人名古屋大学名誉教授(称号授与)
平成22年4月 独立行政法人国立長寿医療研究センター理事長・総長(～平成26年3月)
平成26年4月 国立長寿医療研究センター名誉総長(称号授与)
平成29年4月 日本福祉大学常任理事(～現在)

主な教職歴

- 同済医科大学(武漢)客座教授(1993年～)
藤田保健衛生大学医学部 客員教授(1994年～1996年)
杏林大学 客員教授(1995年～2001年)
名古屋市立大学 客員教授(2008年～2009年)

主な学会活動

役員歴：

- 日本泌尿器科学会(名誉会員)(監事：平成10年～12年，理事：平成15年～17年)
日本移植学会(名誉会員)(副理事長：平成15年～19年)
日本臨床腎移植学会(会長：平成14年～18年)
日本泌尿器内視鏡学会(名誉理事)(日本Endourology・ESWL学会理事長：平成14年～16年)
日本老年泌尿器科学会(名誉会員)(理事：平成14年～17年)
日本内視鏡外科学会(名誉会員)(理事：平成16年～21年)

日本老年学会(名誉会員)(理事：平成23年～29年)

日本老年医学会(名誉会員)(理事：平成17年～24年，特別理事：平成24年～27年)

学会開催：

第15回日本Endourology・ESWL学会総会 平成13年11月28日～30日 名古屋国際会議場

テーマ：我々はどこから来てどこへ行くのか

第36回日本臨床腎移植学会 平成15年1月29日～31日 水明館(岐阜県下呂市)

第30回日本老年学会総会 平成29年6月14日～16日 名古屋国際会議場

テーマ：「治し支える医療」へ向けて、医学と社会の大転換を

主な社会活動

《政府関係等》

内閣官房：

社会保障制度改革国民会議 委員(平成24年11月～平成25年8月)

社会保障制度改革推進会議 専門委員(平成26年11月～令和2年11月)

内閣府等：

日本学術会議 連携会員(平成18年8月～23年9月，27年9月～29年9月)

日本学術会議 会員(平成23年10月～27年9月)

戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)「AIホスピタルによる高度診断・治療システム」

評価委員会 委員(平成30年8月～現在)

厚生省・厚生労働省等：

公衆衛生審議会 臓器移植専門委員会 委員(平成9年3月～12年12月)

厚生科学審議会 臓器移植委員会 専門委員(平成13年2月～23年9月)

中央社会保険医療協議会 専門委員(平成16年12月～21年10月)

医道審議会 臨時委員(医道分科会員)(平成19年5月～21年5月，23年9月～25年3月)

医道審議会 臨時委員 (医道分科会診療科名標榜部会員) (平成19年5月～21年5月)
社会保障審議会介護給付費分科会 分科会長代理 (平成19年6月～27年8月)
介護福祉士国家試験委員会 委員長 (平成20年7月～23年4月)
特定疾患対策懇談会 委員 (平成21年9月～23年9月)
腎臓移植の基準等に関する作業班 座長 (平成21年10月～25年10月)
介護職員等によるたんの吸引等の実施のための制度の在り方に関する検討会 座長 (平成22年7月～23年7月)
認知症サービス提供の現場からみたケアモデル研究会 委員長 (平成23年6月～24年3月)
介護報酬改定検証・研究委員会 委員長 (平成24年4月～27年3月)
「統合医療」のあり方に関する検討会 座長 (平成24年)
熱中症対策に関する検討会 座長 (平成24年)
医道審議会 会長 (平成25年3月～31年3月)
医道審議会 医道分科会会長 (平成25年3月～31年3月)
全国在宅医療会議 座長 (平成28年6月～現在)

文部科学省：

科学技術政策研究所科学技術動向研究センター 専門調査員 (平成13年度～25年度)
未来医療研究人材養成拠点形成事業推進委員会 委員長 (平成25年4月～29年3月)
課題解決型高度医療人材養成推進委員会 委員長 (平成26年4月～現在)

法務省：

名古屋家庭裁判所委員会 委員 (平成19年8月～平成21年7月)

《自治体等》

愛知県排尿障害対策検討委員会 委員 (平成11年6月～12年3月)
犬山市地域医療問題検討会 委員 (平成11年11月～13年3月)
愛知県科学技術会議 委員 (平成16年5月～23年3月)
あいち健康長寿産業クラスター推進協議会 会長 (平成17年10月～現在)

あいち健康長寿推進会議 座長(平成18年～24年8月)
東海市病院連携等協議会 参与(平成平成19年7月～19年11月)
大府市長寿社会懇話会 会長(平成20年7月～平成21年3月)
千葉県柏市在宅医療研修プログラム開発委員会 委員長(平成23年1月～3月)
ウェルネスバレー推進協議会 会長(平成23年11月～26年3月)
愛知県生涯学習審議会 会長(平成24年6月～現在)

《公益法人・特定非営利活動法人等》

(公財)愛知腎臓財団 会長(平成30年6月～現在)(理事：平成3年11月～現在)
(社)全国社会保険協会連合会 健康保険病院運営審議会 委員(平成10年1月～14年1月)
(社)全国社会保険協会連合会 社会保険病院運営審議会 委員(平成14年1月～16年1月)
NPO愛知排泄ケア研究会 顧問(平成19年4月～現在)(理事長：平成14年10月～19年3月)
(公社)日本臓器移植ネットワーク 理事(平成15年10月～27年)
(公財)長寿科学振興財団 理事長(令和2年7月～現在)(理事：平成17年4月～現在)
(一社)全国在宅療養支援診療所連絡会 顧問(平成21年3月～令和2年3月)
(社)日本歯科医師会 生きがいを支える国民歯科会議 座長(平成21年8月～23年3月)
(公財)日本腎臓財団 理事(平成21年5月～27年6月)
(社福)愛知県社会福祉協議会 理事(平成22年4月～現在)
(独)科学技術振興機構 社会技術研究開発センター領域アドバイザー(平成22年6月～28年3月)
(公財)科学技術交流財団 理事(平成23年4月～27年6月)
(公財)杉浦記念財団 理事(平成27年7月～現在)
(一社)認定介護福祉士認証・認定機構 理事長(平成27年12月～現在)
(公財)在宅医療助成勇美記念財団 理事(平成29年5月～現在)
(一社)全国在宅療養支援医協会 特別会員(令和2年4月～現在)
(一社)日本在宅ケアアライアンス 特別顧問(令和2年11月～現在)

受賞

- 平成10年10月 厚生大臣感謝状授与(臓器不全対策推進功労者)
- 平成16年10月 西日本泌尿器科 平成16年度最優秀論文 重松賞
(山本徳則, 大島伸一他: 小児難治性腎不全に対する自己臍帯静脈血管内皮細胞移植治療)
- 平成20年1月 (財)内視鏡医学研究振興財団 平成19年度顕彰
(泌尿器分野における内視鏡下外科手術の本邦における先駆者として術式の確立・指導普及)
- 平成20年5月 第61回中日文化賞(腎移植医療の標準化と普及)
- 平成21年9月 第14回愛知歯科保健文化賞
- 平成23年11月 日本泌尿器内視鏡学会 第11回カールストルツ賞
(泌尿器内視鏡手術および低侵襲医療の発展に寄与)
- 平成26年11月 第46回東海テレビ文化賞
(移植医療の普及、高齢者医療改革への長年の取り組み)

おわりに

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 理事長

荒井 秀典

最初に大島名誉総長の業績集を作成すると伺ったとき、意外な感じもしましたが、おそらく2004年に名古屋大学から当センターに初代総長として着任されたときは、当時の国立長寿医療センターをいかに改革するかということで慌ただしく、脳活動のほとんどはそちらの方を向いていて業績集を作成することに時間を割く気分になれなかったのであろうと推察しています。

それまでの腎臓移植から当センターでは老年医学・老化研究への大きな方向転換にもかかわらず、持ち前のリーダーシップと突破力により、当センターの発展に寄与された功績は是非ともこのような形で残しておくべきかと思えますし、本業績集作成に尽力された後藤百万先生を中心とする名古屋大学泌尿器科教室の方々には、素晴らしい業績集を作成いただいたことに心より感謝を申し上げます。

名誉総長はいつもご自身は学者・研究者ではないと謙遜されますが、中京病院時代に400編以上の論文を書かれたという業績は驚嘆に値すべきものです。その業績はまさに優れたPhysician scientistにしか出来ないものでしょう。私も長く臨床をやってきましたが、臨床業務の合間に論文を書くというのはなかなか出来ることではありません。まさに、信念と意志と実行の力かと思っております。

我が国における現状を見渡すと学術論文が書ける臨床医が減少傾向にあり、基礎研究も含めて医学研究における我が国の存在感が他国と比べて低下しているように思います。その理由は様々でしょうが、ナショナルセンターの理事長としては、名誉総長のように学術論文が書ける優れた臨床医を育成し、ガイドライン等に寄与する研究成果を生み出し、そして政策提言につなげるという使命を果たさなければいけないと改めて思いを強くしました。

名誉総長は当センターの初代総長として当センターを大きく変革し、今日につなげる功績を残しました。まさに長寿医療研究センターという大きな城の地ならしをして頂き、第2代目の鳥羽前理事長とともに立派なお城を作っていただきました。第3代目としてはその城の中身をさらに充実しなければいけないと思っております。引き続き、ご指導・ご鞭撻をお願いしたいと考えております。

名誉総長のこれまでの功績は論文や学会発表などの目に見える業績ではなかなか顕しにくいものも多いかと思えます。本業績集を読むことにより、文字に現れる業績以外の我が国の長寿医療への貢献の一端を感じていただければ幸いです。

醫師人生五十年
— 大島 伸一 業績集 —

令和3(2021)年3月発行

編 集：藤田民夫、後藤百万、荒井秀典
発 行：名古屋大学大学院 医学系研究科
病態外科学講座 泌尿器科学
〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65
印刷・製本：名古屋大学消費生活協同組合印刷部
